

# 記のち立て人生

著子代千藤内



行發社民牧

# 生ひ立ちの記

内藤千代子著





目 次

- 搖籃の地
- 貰けず嫌ひの本領發揮
- 農村年中行事の一端
- 吟子姉様と手風琴
- 水の魅力、幼い秘密
- 悲しきあきらり
- 少女大公望
- 歓喜に輝ける夏
- む登久さん
- 紅渚口の思ひで！
- 初めて文學に志す
- 美麗のヒロインを風取

□ 友のゆくゑ  
□ 父を山寺の火葬場に送りて

□ 東京見物の追憶

□ 初島田の印象

□ かるたのまとひ

□ 晴の飛躍の初舞臺

□ 高嶺の白百合

□ 肩揚に別る、悲哀

□ 秋扇怨

□ 泉のローマンス

□ 結婚問題と東都遊學

□ 人生の春

□ 不安、動搖、煩悶の時代

- 所謂才士佳人の奇遇
- 初めて帝劇へ
- 第鳥籠に入る
- 聖なる兄よ妹よ
- 日記一週間
- 憐からぬ人のきせたる濡衣は
- 悲劇？喜劇？
- 春宵怨
- 文箱の秘密
- 離れ行く靈
- 燐ゆるはひとり花のみかは
- 懐疑のはては及をむもふ
- 死の影

- 狂風一過落花慘憺  
□ 若き終焉  
□ 冷たき額に接吻けて  
□ 尾を焼くの爐  
□ なくてぞ人は……  
□ 諒闇の秋  
□ 大阪行  
□ 五色の酒に酔ふて苦しむ  
□ 銀燭映ゆる金屏の影  
□ 除夜のの感想、不覺の涙  
□ 驚異の眼  
□ 跡に代へて

——以上——

やまとみや子著

生  
ひ立  
立ちの記

## 口 搖 蘆 の 地 口

初聲をあげたのはやつぱり東京の眞中で、四歳までそこに育ちましたけれど、その頃の事は何にも覚えて居りません、満二歳の誕生日に撮つた寫眞があつますが、短かいお河童の、頭の大きい眼ばかり光つた可愛くも何ともない兒。引きずりさうな袂の着物着て、父さんのお膝に凭れかゝつて居りますの。兄三人も亡くした後の女の兒だつたので、随分大切がられたものなさうでした。

『どうや』と呼ばれた極くおとなしい寡言な小女が守についてました故ですか、

些とも物を言はない子でいつもむつりと、口を利いたら損でもする様な顔して居ましたんですつて。人みしりもせぬ代り、お愛想でも云はれると、つと向ふむきに室の隅へくつついちまふ。女客になどお氣の毒らしくて仕方がなかつたと、よく母が申しますわ。唯一のお愛嬌はね、気が向くと踊りををどるんですつて。何處でおばえて來たんだか、お相手なりお師匠役なりのとうやは、古い月琴持ち出して滅茶々々に搔き鳴らし乍ら……さうでない時は笛を横抱きです。千いやんは着物の後をぢん／＼端折にして、すっぽり手拭で頬かむり、腕ぐみをして出る。「雪の道でもしよんぱりと」の唄で。

『裏からまはつてトン／＼トン』戸を叩くまね。『トンと叩いても開からない』と小首を傾げ「ア、コリヤ／＼コリヤ」でクル／＼クルまはる。

同番地に住んでました伯父の家にも丁度一歳勝りの従兄がありましたが、これがまた顔立なら氣性なら、女兒のやうに優しくよく氣のつくおませで、兩人

は性を取りかへて來たらうといつも言はれしくしたさうです。

名稱は『お嬢さん』もあまり御大層過ぎると、門弟たちや女中どもには、お千いさまのお千ちやまだのと呼ばせてましたさうで、長上の人たちからは千い坊千い坊、従兄は何故かちい公兵衛ワン／＼と弄かふ。自分で自分のことは千いちゃんが、千い千さんがと矢鱈に申してました。その時分の私の好きな食物はお菓子では豆のあんこ（鹿の子餅のこと）お菜では貝の『ばか』あれがなくつちや御飯いたゞかなかつたんですつて。

或る日とうやにおぶさつて買物に出来ますと、とある寄席に怪談か何かかゝつてまして、入口の行燈に幽靈の造りものがぶら下つてたんですね。それを見てから髪屋の店先や洗ひ髪の女などに出逢ふ度、キヤツとおびえて困つたさうです。チロ／＼可愛い鈴の鳴る小ちやな自分の履物を氣にしましたとといふものは、人の出入に一々玄關口まで見張りに出張して行かなけや氣がすまない、

戸外へ出ましても守の背中で、つい眠つてしまふ事があるでせう。が、もし片足でも下駄の脱げ落ちでもしやうものなら大變!! すぐ目をさまし「ガチャンパシヤンと落こつたよう」とけた、ましうわめき立てるんですつて。

大概とうやに戸外へつれ出されてた故もありませうけれど、室内で獨り言でも言ひ乍ら玩具など持つて遊んだことは絶てなく、一度なぞも大きなくお人形——自分の背とあまりちがはない位の——をあてがはれましても、忽ち解剖して仕舞つて四肢四散の體たらく、その首をごみための中へ捨てましたら、掃除夫がいつ來ても——それだけ残してくんですつて。大きな頭ですからさながら活けるが如くで、終には家の者も氣味がわるくなつたとか。そこで今度は外祖母様が布のお猿サンをこしらへて下さいました。それを始終おぶつてましたが、私が何か悪戯すると、そのお猿さんが叱られるんですつて。お猿さんにお灸をえますなんて騒ぎの時には、最初の中は傍でちつと見てますけど、だん

だんと後退りをはじめ、しまひにやワツと泣き出でました。

叔母の病氣見舞につれて行かれました時、その枕元で不思議さうに眼をバチつかせながら、

「ねえ、叔母ちやんも千いちやんのやうに、トコ／＼トコとあんよして御覽よ」としきりに足踏みして見せましたさうで、今も一つ話に致されます。

が、こんな事はみんな傍からきかせられますので、眞の一一番遠い記憶！ と申せばそれはもうみんな田舎へ移つてからの事で——お人形さんはゴロ／＼して痛くつて、背中にちつともくつゝかないんですもの。併しその枕は崩黄木綿で出来まして、などと弄かはれる度、

「あなたンとこの赤ン坊は、どうして其様に色が青いの。」

「かまひが刷毛で塗つたのよ。」

と眞面目くさつて答へてみんなを笑はせました。その頃は何でも悪い事しさへ云へば、

「かまひがした、かまひがした」と申しました。よく子供たちが「誰さんがかまつていけません」なんて云ふでせう。それで何でも「かまひ」といふものは悪い事をするもの、と極め込み、自分でも實際さういふものがあると信じてゐました。けど大人にはなかなかその意味が通じないのでほんとに焦れつたかつた。

友達は一人もありませんでした、原中の一軒家で……。で、父につれられて草花でも採りに出る外は、いつも母さんのお裁縫の傍で繪雙紙をひろげたりお飯事の道具を並べたり、笹の葉のお舟を手洗鉢に浮べたりして、孤獨で溫和しく遊びました。たまには大きな目笊持つて、

『しいばこめつかりこ。たあけこめつかりこ。』

なんて探してあるきました。丁度自分の丈ほどの小松の中に『しばこ』つていふ暗紫色のひよろくしたのや『たけこ』つていふ赤茶色の細かい茸やが澤山で發生のです。ですから期節は秋だつたのでせうけれど、赤い毛絲の長く背まで垂れた鎌頭巾をかぶつてゐたやうに思ふのは、何かの記憶とゴツチャになつてゐるのかも知れません。何でも紅と紫で日の丸に聯隊旗と市松のやうに染めた友禪の袖無しの被布を着て、よく迷子札ごと、帶を何處かへ落して來るので母に叱られた。

或る時何かからすね始め、夜泣をして一晩中泣きつけました。翌朝起きてみたらば秘藏の小鳥は二羽とも止り木から落ちて、堅くなつてゐました。つい水をきらしたので死ちたのださうですが、お前が昨夜あんまり泣いたからだとおどされて、可哀想な事をしたと悲しくて悲しくて堪らず、物心ついてから

始めての、悲しいといふ事を覚えました。で、つくづく後悔しながら竹切で土を掘つて、丁寧にお庭の隅へ埋めてやりました。が、その後どうなつたか、時々堀り出してみたいやうな氣がして仕様がなかつた。

牛乳ばかりで育つた私は、並通の少女のやうに母の乳房を弄ぐる味は知りませんでしたけれど、それでもその柔らかな懷に抱かれて、暖かい炬燵の中へねかしつけられる快さ、一日中で一番の樂い時なのでした。子供心にも引き入れられるやうな、潮の遠鳴をきゝ乍ら、うとくと……うとくと……。

或る晩ふつと目を覺ますと、私は肩掛に包まれて抱え上げられ、縁側から火事を見せられました。

真暗な空に燃え上る火焰！ 洞巻く火の粉！ 此方へくと飛んで来るやうで、脅えやすい私は覺えず聲をあげて母の肩にしがみついた。母の膝も震へてゐました。遠くく半鐘の音が……夜といふものに深い印象を與へられた

のはその時が最初でした。雨戸が閉まつて了つてからは、戸外をのぞいた事もない兒でしたもの。

おゝその頃よ、明けても暮れても別荘守の老夫婦の外には顔を合せる人もなくて、四邊と云へば白晝も狐の出さうな野原！ 何といふ侘しい静寂な生活だつたのでせう。都育ちのうら若い母は病身の夫と頑はない幼兒とを守つて、毎日毎夜どんな氣をしてゐたのでせう？ 一里も離れた鐵橋を軋る汽車の音響が一番悲しかつたと申してます。髪に銀のやうな白髪が目立つて、澁紙色の額の皺も深うなつた此頃の母さんと、あの頃の母さんと、同人とはどうしても思はれませんわ。あゝ、私、私、今一度あんな時代に返つてみたうござんすことねえ。緋の附紐をダラリと輪形に後へ結んで、禿切の頭をふくよかな胸に埋めて……枕許には翌朝のおめざを並べて……ある時金花糖の兎があまり可愛いので抱いてねたら、翌朝ベタ／＼に溶けてゐた事もありましたつけ……

⋮⋮⋮

禁められてたマツチの火なぶりをして、右の中指にひどく火傷しましたが、片手で強く其指をかくしてゐて、何とすかされても放さず、水泡になつたのを摑みつぶしちやつたこともありました。母さんの洋傘をかつぎ出し、開けやうとしたらバチンと指をはさまれた痛さが骨髓に徹つて、その後久くは洋傘さへみれば、食ひつかれでもするやうに恐れました。何かの御褒美にいたゞく五色の細かい金米糖は玻璃の壺に入つて、中二階の父さんのお机の傍にあります。ねだつては少さな両手にあふるゝほど受けて喜んでる内はようございましたが、いつしかそれを無断でつかみ出し、問ひつめられても頭ばかり振るやうなこと、誰に教へられるともなしに……。これらが淺ましい罪惡の最初だつたでせう。私は五歳になりました。

# 口 負けず嫌ひの本領發揮 口

そのうちどうした都合であつたか、本村の方の、とある農家の離家を借りて今までの知人の別荘から引越しました。今度は近所に同じくらゐの兒が澤山あつた。あまり一緒に遊びませんでしたが、それでもよく喧嘩はしました。私は直きと袂で打つのが癖でした。言葉争ひぢやとても敵はない、いつも言ひこめられるのが口惜しさに、武者振りついて相手の口の中へ指を突込み搔きますので、この上の亂暴さはありますまい。が、あるとき酷く噛みつかれた事があつてから憲りました。そのくせ仲の好い時には、云はるゝまゝに鐵砲玉（駄菓子の名）と氷砂糖の借しつこしたりなんかした。一寸しやぶつてまた返すのですよ、ホ、ヽヽヽ。

その年の夏から——紅白ダンダラの小さなメリヤス海水服を着て、毎日父に

抱かれて海へ這入つたものです。『白い波が恐いよう』と父の頭にかぢりつきしたのを微かに覚えてゐます。後年印度美人と謠はれるやうになつたのも當然ぢやありませんか。

六歳の春、妹が生れた。その時分私は『鶴ちやん』といふお人形を大切にしてゐましたので、妹の名は『亀ちやん』にして欲しい欲しいと前からせがんでゐました。生れた妹は觀音様のやうな顔をした、色の白い眉毛の半月の様な鼻の隆い、私とは似ても似つかぬ氣高い子でした。

大切な母さんを奪られてしまつた恨みはあるけれど、物珍らしさが先に立つて不平も忘れた。そして近所の私よりは三つ四つ年上の娘が、學校からかへると夕方まで妹の守にやとはれて來る事となつたので、うちの亀ちやんを負はせて上げるくと、隨分恩に着せました。

私は其子と一緒にになつて隨分な悪戯をいろくと覺えた、お轉婆にもなつた、

に虱が傳染て来て、母を困らせた事もありました。

あの頃よりも恐かつたのは『生膽取り』と『人さらひ』で、誰言ふとなく、子供達にお菓子を呉れてそれを食べると眠つてしまふのだ、なんて云ひくしました。それと夕方の『隠れ神様』で、夢中になつて遊びたはむれてゐた子供たちが、せまりよる仄闇にふつと心づき、急におち氣立つて、

『かくれ神様にさらはれる』

と口々に叫び乍ら散り／＼になつて行く時の寂しさ、物悲しさといふものは幼な心にもまた格別なのでした。それでも我家の障子に灯が赤々と映つて、なつかしい母の笑ひ聲でもしてゐれば、もう何事も忘れて駆け上るのですけれど、もしさうでない時には泣き出したいやうな氣がするのでした。

たま／＼東京からいらつしやる外祖母様を一番驚かせたのは、空荷車の後と先に取つて『ぎいたんこ、ばつたんこ』つて代る代るに上下するのです。棍

棒の方へ行くと恐いほど高く上るので面白かつた。

木登りを發見られてあはて、飛び下りる機みに、片袖枝へ引かけて引ちぎつて了つたり、石蹴りや鬼事するとて跣足になる、それでまた平氣で下駄はいてすまして室内へ上るんです。繭を口に含んで轉がし乍ら絲をとつたり、筍の皮へは紫蘇や梅干を入れて貰つて、ちゅうくと吸ふ。その他野ぐみでもつばなでも海老蔓でも桑の實でも生甘薯でも、あの頃は何でも見あたり次第、口へ入れなければ承知が出來なかつたのですわね。青梅も噛れば李も食べる、唐もろこし、砂糖きび、甜瓜、西瓜は申すに及ばず、父母にかくれて隨分怪しげなものも食べたけれど、よつほど壯健な生來だつたと見えて、ついに一度腸胃をこはした事もなかつた。それに友達は各々に物置や木部屋の漬物樽から、梅干、ラツキヨー、紅漬の大根、はては糠味噌の古茄子までぬすみ出して來るので、自分も負けずにピスケットを罐ごと持ち出し、みんなに振舞つてやつて事もあ

つた。それから山へ行くと松の枝にこぶがあつて、そこから蜜のやうな甘い蜜の吹き出してゐことがあります。私達は争ふてそれを、枯松葉の先につけてはなめました。

『うちのお父さんのお國にはね、こんなのが大きいのが澤山あるんだつて。それや大變よ、ダク〜と流れてくお茶碗で受ける位なんだつて……。』  
 なんて、それ相當の法螺を吹いた。一同は感歎の眼を光らせ乍ら、羨しさうにきてゐました。時々思々出したやうにズル〜と、鼻汁やよだれを啜り上げつゝ。

一時は南京珠が大流行で、指輪や腕輪や首飾りはおろかな事、足首にまでまとひつけ、また力いつぱい手を差上げても、まだ地に二三尺曳くくらいの長さのをこしらへて喜んでゐました。南京珠を通すのには馬の尾が一番好いのです。それで欲しくつて欲しくつて堪りませんが、何ば馬だつて尻尾の毛を引抜かれ

るのは痛うござんすから、蹄で大地を蹴つて怒ります。でも懲りすまに馬方の眼をぬすんでは、そうつと四五人づつ忍んで行つたものでした。そのくせ、白馬に歯を見せてると缺れる、とか何とかいつて、白いのに出逢ふと、堅く口をおさへて駆け抜け／＼した。

野分の後なんぞでは、私も小さな背負籠をしよつて熊手を持つて落松葉搔きに出る、その時にはどうしても一同と同じやうに姉さま冠りして、藁草履をはかなければ承知しないのです。笠原の切株があぶないからと踏抜に氣をもんでゐる母の心も知らずに……。

秋は雑木林へ椎の實や栗や初茸を拾ひに行くのも樂しみの一つなら、螽やバッタを串ざしにして炙つたり、小さな青蛙を見つけると松葉の針をお尻から突つとして躍らせたり、子猫を川へ投り込んだり、隨分慘忍な野蠻性を遺憾なく發揮しました。



それもやがてお蕎麥の紅い茎が刈り取られ、けたゝましく百舌が叫んで、樹々の梢に干大根の一ぱいつるされるやうになると、冬ざれの野にも山にも悪戯のたねがつきて來るので、朝晩は屹度焚火をしますの。粋殻や枯草を集めて……。男の兒は後向きになつて自分の裾を兩手で持ち、はた／＼と煽ぐのです。

濡紙に包んだ鶏卵や甘薯や里芋やが盛んにくべられる。

田の面が一面の水晶板に閉ざされるのも持ち兼られた。よつてたかつてその上を歩いたり、たまには口中へも入れるし、麥稈で息吹きかけて蜂の巣のやうに穴を開けなどする。小さな破片を手首にのせて旭に向つて『おてんたう様、火をお呉れ、火をお呉れ』なんてよく云つたものです。ぢり／＼と溶けて来る冷たさが、まるで焼かれるやうに感ずるので。

その時分でした、某家で粟飯を見て來て、我家でもあんな綺麗な御飯が食べたい／＼と、散々母をせめました。ところがまあ、ボロ／＼としたその不味加

滅！ 見た目の美しさと共に二度びつくりした。濁酒をお白酒だと思つて、あれが欲しい／＼と云ひ出し、とう／＼德利持つて買ひに行きました。

また／＼、豚の餌をさへつまみ食ひした事があります。アラ、厭よ、そんなに私の顔御覽遊ばしちや！ ホ＼＼＼＼＼だつてもね、みんなが先へ代る／＼『美味、おいしい』つて汚ならしい缺鍋の中へ指を突ツ込んで食べました。菜つぱだの大根のしつぽだのお甘薯のくすだの、うらなりの唐茄子だのがグツ／＼と煮えてゐたのです。

そして私にも、お食べ、もし云ふ事をきかなければもう遊んでやらないや、なんて口を揃へて言ひました。仕方がないから私もその眞似をするかしないに、子守達はワツと鬪の聲をあげたまゝ一散に我家へ馳せつけ

『旦那、旦那、千いちやんがいま豚の餌をぬすんで食ひなつた』

と口々に告げました。まあ、私は父母からどんなに叱られましたらう、それか

らはもうあの子守達が憎くつて憎くつてたまらず、ばつたり外遊びはやめました。

それを機會に手習を始めさせられました。父に手をとられて、いろはから教はりましたの。まだ机が高過ぎて困つて、臺に腰をかけて致しました。その時分百人一首は全部暗誦してゐまして、來客でもあるとよくその面前でやらせられたものでした。小さな名譽心からそれがまたやりたくつてやりたくつてならなかつたので……。

いつの頃からかお清書に二重丸のついたのがあると、母にお手玉を一個ばゝこしらへて貰ふ約束をした。友達のは誰ももく小砂利や麥や草の實を入れるのに、私のだけは小豆だつたから、しやらり／＼とそれは好い音がして取りよかつた。布も縮緬や何かばかりで、みんなの様に縞のだの緋金布などは一つもなかつた。かうして美しいお手玉は澤山たまりましたけれど、些ともそれやし

ないので、まだしも手越の方が巧者でした。ゴム毬にはいろいろな毛糸で袋を編んで冠せた。中でも青や赤や海老色が嫌ひで、一番あせやすい淡紅色や五色の染分などを非常に好んだものでした。聲張り上げてうたつた唄は、

『源三梶原朝之助、おまへ御臣下まことかへ。まことどころかきいてくれ、雙六賭博に打負けて、十兩峠で日が暮れて、小松原で夜が明けて、夜明鶲に笑はれて、法印様から文が來た。その文は何の文——』

『信濃うの善光寺、あのせこのせやつこのせ。みきみいしやにせんくわうみいしやに帆う掛船が二丁つうづく、三丁つうづく、とめたらわれらにごしよやあるぞ。ごしょいいらん、せんこしやいいらん。お月が出えやる、せんきちまんきち——』

こんな文句がまだ長くつゝくのですが、何だかさつぱり意味がわからない。ポンについてはクルリとまはつて、またポンとつきクルリまはつたり、折を

り曲げた手の甲へのせてはすべらせるのは

おねんじよ様と

かうしんさまと

赤いポツクリはいて

ポク／＼十よ

だの

おねんじよ尻まくり

今度の番は

誰さんの番よ

何々さんの番よ

落すと耻よ

しつかりか、合てんか。

もし受け外せば罰として、お尻をまくられなければならないので、息を切つて逃げまはつたりした。縁側だとつい毬が逸しそ去りやすいので、雨の日でないかぎりは地面をフウフウと吹いたり、袂で拂つたりしてそこへ座り込む。すべて農家では、簾をひろげたり豆を打つたり粟を干したりするためには、家の前の廣場に黒土を入れ、堅く砥の様に固めてあるので、子供衆の好い遊び場所でしたけれど、一寸でも轉べば手足をすぐ摩りむいてそれは痛い。

## □ 農村年中行事の一端 □

友達はよく誘ひ出しに來ましたが、それを行うことはりでもしやうものなら、家の中の蛤ツ貝、外へ出れあ蜋ツ貝、千代バカダルマ、ダルマのくせに、餉買に行つたらば、猫の糞ウ買つて來た、なんて口々にはやし立てる。實際私は父母

の監視の眼のとゞく範圍内……方三四町の間を根據地としてゐましたので。たまくお使ひに出ても犬に吠えられて逃げもどつたり、惡童にさへぎられて通り切れなかつたり……かなり敵も多がつたので、家の近所を離れるのは恐いんでした。

べいぐ言葉をつかふのが面白く、何か自慢らしいやうな氣もしていつとはなしに、

おつたまげた（びつくりした）

のうこつちよい（憎らしい）

やいびなんねかよう（行きませんか）

けちいだ（嫌な）

すつたばか（罵しる意）

その他お錢のことをせねだの髭のことをけば、蛇のことをへえび、おやつの

ことを、こぢはん（小晝飯）など、思はず口外へ飛び出しますし、いくらやかしく云はれても、あくせんとがもう尻上りな土音になつて了ふのですから仕方がありません。

年々避暑客の入り込むやうになつてから、農家にもハイカラ風がすつかり彌蔓いたしましたけれど、その時分はまだ／＼生活程度もひくゝつて、今度三十年ぶりで夜具の裏返しをしたのなんのつて、うそのやうな事實でしたわ、學校へ行く生徒等はみんなちやん／＼こ着てわら草履バタ／＼。今度始めて袴を買つてやつたが穿かせやうがわからぬとき／＼に來た親達もありましたつけ。

常食は七三ぐらゐの麥飯、甘藷、いもだんご、このお團子は甘藷を薄く切つて日光に干し、から／＼に乾上つたのを搗臼で碎き、ひいて粉にして筛ひ上げたところは眞白で、まるでうどん粉のやうですが、ふかすと薺色にピカ／＼光澤を帶びてきます。想像ほど美味いものではありません。五節句とか珍客だと

かお振舞でもある時には、先づ第一にお蕎麥の御馳走！主婦が自慢の腕をふるひます。

村の娘達が一番の快樂は、何といつても鎮守様の夏祭禮と、九月廿三日の藤澤遊行寺（演劇で有名な小栗判官照手姫の事蹟のある）の開山忌でせうね。もうくそ日を幾月か前からどんなに指折つてか知れませんの。各々に串柿のやうな顔をして赤メレンスの襦袢の袖などひらめかし、大きな帶におされたやうに丸くなつて、打群れて見世物小屋の繪看板の前にさゝめいたり、うれしさに溶けさうな相好をして一杯一錢の氷店や、一盆三錢の半五郎餅や、一串五厘の田樂やなどを、そのくせ耻かしさうに横ぐわえしてのなどが幾組もく見られます。

つい大切な財布の底をはたかせられてしまふのは「ちよい／＼かいな」の店頭ださうでござります。『ちよい／＼かいな』の店頭ださうでござります。

も二錢と五厘だ。ちよい／＼かいなよ、やたらとかひなよ、よく見て買ひなよ  
むしようと買ひなよ。人に相談はいらないことだよ。』

なんて、絶えず羽ばたきで品物拂いて調子をとり乍らしやべりつゝけてゐる。  
若い衆連はまた妙に鷄冠の様な丸方の頭髪をして得意になつて、びらしやらと  
新銘仙なんかの單衣に白縮緬の兵古帶を腹いつぱいに巻きなし、おろしたての  
白足袋ほこりで茶褐色にしてぞめて歩くのでございます。

此村の雨乞の習慣は一寸面白うござります。簫と青竹で大きな蛇の形をこし  
らへ、兩眼は目笊に金鏡を張つたもの、圓子すくひつてテニスのラケットに似  
た様な恰好のものが兩耳、箕を二つ組み合せて口になり、濛團扇が舌、その中  
へ人が這入つて何のことはない、丁度獅子舞のやうに躍り狂ひながら鎮守の社  
からねり出します。幾臺かの荷車につけた鉦、笛、太鼓でビュウーヒウーテン  
テンドン／＼チヤンチヤンチヤンチキ、耳も聲するばかりに囂し立てながら。

道筋の家々では手<sup>て</sup>に手<sup>て</sup>桶<sup>おけ</sup>に水<sup>みず</sup>をくんで待つてゐて、蛇<sup>へ</sup>のあたまから浴びせかけます。しまひにや海<sup>うみ</sup>中<sup>なか</sup>へ入つて散々荒れて流してしまふのにですが、ほんとうに靈験<sup>れいげん</sup>のあつたものかどうか覺<sup>おぼ</sup>えてゐません。

その秋<sup>あき</sup>帶<sup>おび</sup>ときの祝<sup>いわ</sup>には近所<sup>きんじょ</sup>のお婆<sup>ばあ</sup>さん達<sup>たち</sup>を招<sup>まね</sup>いて御馳走<sup>ごちそう</sup>しました。まあよう、大<sup>だい</sup>したものでなあと、その後<sup>のちなが</sup>長く夜<sup>よ</sup>長<sup>なが</sup>の圍爐裡<sup>いりばなし</sup>話<sup>のこ</sup>に残りましたつけ。けどかんじんの御本人<sup>ごほんにん</sup>はまだ美しい衣服<sup>いきもの</sup>をうれしいと思<sup>おも</sup>ふほどの分別<sup>ぶんべつ</sup>もなくて、お料理<sup>りょうり</sup>についたよせ物<sup>もの</sup>の寒天<sup>かんてん</sup>を麥程<sup>むぎぢら</sup>ですばく吸<sup>す</sup>つて、蜂<sup>はち</sup>の巣<sup>す</sup>のやうに穴<sup>あな</sup>を開<sup>ひら</sup>けて、ようこんでました。そして高瀬<sup>たかせ</sup>の小母<sup>おぼ</sup>さん——高瀬<sup>たかせ</sup>の小母<sup>おぼ</sup>さんもなつかしい人でした。母<sup>はは</sup>の一番懇意<sup>ひんじゆ</sup>にしてました女<sup>ひと</sup>で東京者<sup>とうきょうしゃ</sup>なのです、家には四五人の娘<sup>むすめ</sup>たちを集めて裁縫<sup>さいほう</sup>を教<sup>き</sup>へてましたつけ、顔<sup>かほ</sup>は外道<sup>ほかぢ</sup>みたいでしたけれど——。につけられて村の鎮守<sup>ちんじゆ</sup>様<sup>さま</sup>へ參詣<sup>さんぱ</sup>に行きましたが、ああらよ、小さな嫁<sup>よめ</sup>つ子<sup>こ</sup>が通<sup>とお</sup>るよう、みんな出て見ろやア、と我勝<sup>われがち</sup>に表<sup>おもて</sup>へ飛び出してきたり、畑<sup>はたけ</sup>にゐた人達<sup>ひとたち</sup>まで

鍼の手やめて見送るといふ騒ぎでした。

その頃の私は青々と眉を剃つて、多過ぎて困る髪を引詰て唐人鬚に、前髪は切つて額に總々垂らしてた。まだ今のやうに筒袖や元祿袖の一般に行き渡つた時節ではありませんでしたから、平常にでも邪魔な長袖をぶらつかせてた。何故かメリソスはあまり用ひなかつて、重に黒出の八丈や、あの飛八丈つていふ海老色のや、たまには紫地の太織友禪なんぞも着た。

併しこの時には稚兒輪に結つて、白丈長を前で組んで、前挿しの銀のピラビラの動かす度にチロ／＼とふれ合ふ音が堪らなく嬉しかつた。私は色が黒かつたから、母と高瀬の小母さんがお化粧の苦心さつてないのでした。生燕脂でボーッと頬をばかして、目尻にも一寸差したりされた。細い紅筆の先は玉蟲の羽のやうに青く光つてゐた。赤地へ金絲で花籠を織り出した堅い厚い帶の上へ、鷹金縮緬のしごきをごり／＼云はせて締めつけられました。太い／＼縫鼻緒の

鈴のついた丹塗の木履は臺の高さが四寸もあつた。

歳晚のお餅搗も大きい楽しみの中でした。

大抵眞夜中頃から始まるので、母家の土間から威勢のよいペツタンコ、ペツタンコの音が聞え出すと、もう胸がワクワクしてぢつとしてゐられない。明日はおよばれだ、およばれだと騒ぐ。

土地の習慣でお餅搗の翌朝は、近所中の子供達が招待されたのでした。私もその一員として、お席の端につらなつたものなのです。

ところが田舎のお雜煮はかてばかり（大根だの人参だの里芋だの）多くつておまけにお餅の切が大きいから、お汁氣なんて些ともありやしないし、もちあつかつてゐるうちに、友達はずんく席を立つてしまひ、一番最後に取残されさうになつたのでとうとう泣き出して仕舞つた。と『千いちやんが雜煮よウ食ひかけて泣いてるせ』つて知らせに行つてくれた子があつたので、おかちんを

咽へでもつまらせたのかと、母は驚いて走つて來た事もありました。

お正月にはどんな遊び事をしましたつけ？ 田舎つ子は羽子つきは下手でした。追羽子なんて出来る子は一人も居やしないので、幾年か以前東京の外祖母様にいたりいた大きい羽子板！ 櫻花を散らした目醒めるやうな緋縮纈の振袖金絲のぬひある黒襦子の帶をだらりと結んで、鳥帽子の下から振り仰いだ眼がしの強さ、への字形の唇、手は逆にして舞扇の半開きを持つてゐた。男の様な顔したお姫様だと思つたばかりで外の事は何にも知りませんでしたけれど、紅白段染の漫幕の蔭から釣鐘が半分見えてゐたし、何でも道成寺の白拍子姿であつたにちがひない。なめらかな白羽二重の顔も下着もいつまでも手垢にもよどれず、箱の中に飾られたまゝであつた。

その代りみんなと共に羽目板へ「錢打つけ」なんぞして父の大目玉を頂いた事もあつた。一同を集めて、福引を引かせた事もあつた。

十四日には何處の家でも川柳の木を切つて来て白に結びつけ、枝に紅白の餅花や蜜柑をいっぱい飾つて土間の中央へ安置する。ゆらくとしだれかゝつたその美しさといふものは……。

これは針供養など、同じく、白の慰勞祭とでもいふ意味であるらしい。堅くなつてひよわれた餅花なんぞ（米の粉でこしらへた麻玉ほどの小さなお團子）美味くも何ともありやしないけれど、園爐裡ン中へくべて、熱いのを掌へ轉がしながら灰を吹き／＼囁つた味は忘れられませんのね。

十六日の夕方は各自に五色の色紙をつき合せたのへ『奉納道祿神』女子なら『道祖神』と書いたのを笹竹の先へつけ、辻の道祖神の前へ集つて大騒ぎをします。それはこの夕べ、門松を焼き捨てる『齋取』の火で燃すのですがひらくと燃殻の空高う舞ひ上つて行く程、その人の手蹟が上達するといふ傳説なのでした。

初午の日は男の兒達の天下で、何が面白くてかシャンギリやら馬鹿ばやしやら、耳の鼓膜の疲勞れるまで鳴らしつゝける。稻荷の社は村の豪家の、椿の眞紅に咲いてる家の庭にあつた。私のつれられて行つた時社のまはりは人雪崩を打つてゐた。一袋の駄菓子と赤の御飯の大きなお握飯とが分け與へられるので……。

それは／＼大きなお握飯、どんな手で握つたらうかと思はれる、両手に受てもまだ食み出してゐた。こんな物貰つちやつてどうしやうと氣が氣ではなく、我家へ歸つて叱られるのが恐さに、ひそかに藪の中へ投げ込んで了つた。(これが非常の罪悪でもおかしたやうで、その後その藪蔭を通る度に、そつとのぞいてみた)夜はお神樂がある、それも例のテケテツテテオヒヤラ／＼と躍る滑稽なのではなく、よくは分りもしなかつたけれど、何だか女形には三平二蒲や乙姫様が出て来るし、口の曲つたひよつとこが堀部安兵衛であつたり、鬚むくち

やらの鑑賞様が松前屋五郎兵衛であつたり、それでむくくとお面の中から血を云ふのだから堪らない。お神樂芝居といふものなんですつて、けど演るものの大車輪である、観客も大興面目で、巧妙ものだの面白えのと評し合つてゐる、星さゆる寒夜の藁蓆の上で。中には重箱のお辨當なんぞ背負込んで遠路を出かけて來た熱心家もあるのですから。

### □吟子姉様ご手風琴□

二十日あまりを一年に數へる私は、八歳でなければ學校へ上れませんでした。が、その頃までにはもう二年生の課程を優にをさめてしまつたのです。父は切角これまでに丹精したものをして放すのが惜しいのと、一つは小學校が遠い所：半里も先にあつて、雪の日や雨風の登校が氣づかはれたのと、私が世間見すの利かん坊で、容赦なく誰とでも喧嘩するのとで、子に甘い父母の取越苦勞か

ら、私はとうへん父の膝下を放れませんでした。

云ひ忘れましたが、父は象牙の彫刻師でしたから、氣さへ向けば朝から晩まで仕事臺に向つてゐるのです。私も傍に机を並べて終日坐り込んで居りました。一寸でも外へ遊びに出る非常に淋しがつて直ぐ呼び戻されるので、しまひには私も滅多に二階を下りない子となつてしまひました。

勢ひ室内での娛樂ばかりを求めるやうになり、幼年世界や小波小父さんの日本お伽噺にも飽いてしまつて、ふと思ひついたのは美しい姉さまの繪を寫して自分の思ふやうに彩色をすることでした。これは父の人物ものの下繪などを見やう見眞似もあつたのでせう。ドウサ引きの薄美濃や繪の具を買つて貰ふことが、唯一の樂みとなりました。反物についてるペーパーなんぞも澤山集めた。髪の毛のボカシ方が上手と云つて賞められた。が、手足の指といつたらどれもく癩病人か、育ちそこねの人參みたいな物が描けてしまふのでした。東京の

伯父などは、そんなに好きな道なら一つ本式に師につかせてみたらどうかなど  
「云つてくれましたけれど、私は何もそんな望<sup>のぞみ</sup>のあるわけぢやないんでした。  
父<sup>ちち</sup>もこの兒を偏人<sup>へんじん</sup>にはしたくないからと云つて、その様なことは許<sup>ゆる</sup>しませんで  
した。

その頃父の碁敵の小野さんといふお家に、吟子さんて十七ばかりの綺麗なお  
嬢<sup>ちゃん</sup>さんがありました。しとやかな中にも凜として、細面の品のいゝのに、桃割  
や唐人鬚<sup>とうじんひげ</sup>のよく似合<sup>にあ</sup>ふ——そのくせまだ女學校氣賢<sup>がくかうぎ</sup>の失せきらぬハイカラな點  
もあつて——『女鑑<sup>ぢょかん</sup>』とかいふ誌上<sup>しごやう</sup>の投書欄<sup>とうしょらん</sup>では大層振<sup>たいそうぶ</sup>るつてゐらしたものな  
さうで……いはゞまあ當時<sup>だいじ</sup>の世間<sup>せげん</sup>が要求してゐた通俗的理想的<sup>つうぞくてきりょう</sup>理想型<sup>きうがた</sup>のお嬢<sup>ちゃん</sup>  
なんでした。

まだ其頃<sup>そのころ</sup>は、何子さんなんて呼び方<sup>かた</sup>をあまり耳<sup>み</sup>にしなかつた時分<sup>じぶん</sup>ですから、  
大變偉<sup>たいへんわい</sup>い別世界<sup>べつせかい</sup>の人のやうな氣<sup>き</sup>がしてゐましたわ。私はその方に唱歌<sup>しゃうか</sup>を教<sup>きし</sup>へて

いたいくことになりましたの、父がお願ひして。

最初は大喜びで小躍りいたしましたけれど、さて吟子さんの彈く手風琴に合せて『からす、からす、かんざぶろ』だの『えのころ來い／＼』なんて歌はせられますのが馬鹿らしくてたまらず、何と賺かされても叱られても一向口を開かないものですから、吟子さんにももてあまされてしまひ、とても駄目でせうと父に訴へられまして、これがために私は音痴だといふことに家内中から定められて了ひました。

唱歌のけいこは中止になつてからも、吟子さんのとこへはよく遊びに行つていろんなお伽噺をきゝました。その中でたつた一つ『三人片輪』といふのだけを今もはつきり記憶てゐます。

早く別れる故だつたでせうか、父は無暗と前途を急いで、理解も出来ぬ私の頭腦にいろいろな事を詰め込もうとする。私がまた早飲みの早忘れで、教へ

られた事は苦もなくすらくと覺えてしまふ代り、その忘れっぽい事と云はふより、右の耳から左の耳へ行き抜けなので。

それとも知らず先へくと進ませられるのだからたまりません。負擔に堪へぬ私は、そろくとこの家庭教育を苦痛なものと呪ふやうになつた。のんきさうに學校へ通ふ少女達が羨しくつてたまりませんでした。學課の好き嫌ひが甚だしくなつて、そろばんの音などきくし身の縮むやうでした。だつて相場割なんぞやらせられるんですもの、何の事が無我夢中でしたわ。

## □ 水の魅力、幼い秘密 □

私はその時分から水といふものに、不思議な親しみを持つてゐました。あのほしいまゝに輝ける暗碧の海面はもとより、井底には、ゑむ水鏡、鮎追ふ小川、さてはかなき田の畦の小流れにいたるまで……。

わけてあの音もなく悠々と流れる河水は、幼心にもやみがたい好奇心を起させ  
る大きなあやしい謎でした。あらゆる水の源へ／＼とたづねて行つたなら：  
……どんなに面白い事があるだらう……といふのがそのころのおさへ切れぬ  
憧れ心で……大きくなつたらこの事は必ず實行しやうと考へてゐました。大人  
人つてものはえらいもの……大人にさへなれば何でも出来るやうに思つてま  
したのねえ、あの時分は……。

ですからお伽噺の中でも、豊玉姫（だとたしか思ひました）、龍宮のお姫様で  
あの彦火々出見尊に井水をくんで上げる）姉妹の物語りや、浦島太郎、田原藤  
太秀卿の三上山の百足退治やをひどく興あるものに思ひまして、水の底にも都  
のあるといふことは、ほんと先入的に頭脳にありました。

魚になりたい!! と羨しく思つたことも度々でした。ちら／＼と水底に影を  
寫して、閃めく如く群れ遊ぶ幾隊の魚苗。さながら水なき如く澄み切つた水中

に、小さな芝海老など体が水の色に透きとほつてるので、よく見なければわかりませんの、まるで寒天をちぎつたやうですわ。それを手捉へにして生のまゝよく食べましたつけ、え、美味くもなんともありやしないんですけれどね、ほへへへ。

こんなのはね、きっと龍宮の美しいお侍女たちが魚の姿に身をやつして、遊山に来てゐるのだ、なんてひとりざめに思ひ込んでましたの。それから夏も末になるとよく沖や川が荒れませう。暴風雨の後なんぞ水量のふえた濁流にたいよひくるものや渚に打ち上げられるものやに、不思議の興味と好奇をもたないわけにはゆかないんでした。うづたかい海藻や青々とした松の根こぎ、戸板、樽、桶、板きれ、明俵！　くるみの片割でも柄杓の首の抜けたのでも、その一つづきについて考へてごらんなさい。幾多の潮流波瀾を経て來たものでせう。耳をおつけたら神秘のさゝやきがきこえやしないかと思つた。幾歳の年かわ

すれましたが、まだ肩入れの三つ身の綿入を着てた位ですから、幼さくて季節も寒い時分だつたのでせう。父につれられて濱へ地曳網を見にまゐりました。大きなこぼて(びく)をぶら下げて真先に立つてトコ／＼走つて行きましたが、途中にね、川がありますの、潮入の。其橋を渡りかけますと潮流の加減か、茶が、つた大きな泡がね、いっぱい水面をおほふてましたの、やはらかさうに厚くふは／＼と。

何といふ事もなかつたのですが、私はいきなりその中へ飛び込んで了ひました。冷たかつたのでハツと氣がつきましたわ。陥ちたのぢやない、たしかに飛び込んだのですから、父も屹驚いたしましたつて。けど、大方陸地の方へ向つて飛びそくなつたのだらう、蝗ちやあるまいし、無鐵鉋な眞似をするな、あはて者めがと叱られましたが、何しろ寒くて寒くて歯の根も合はず、ガタ／＼震へながら父の羽織り下におぶさつて家へ歸りましたわ。

幼時の私はほんとにくどきでね、一寸目に入るものの耳に入るものの、何でもかでも自分の腑におちるまできいたいさなければ承知しません。そのため母や……いつたい女人の人達にはしつつこい子だねと煩はしがられました。が、父はかへつてその傾向を喜び、始終叮嚀に説明を與へてくれましたが、空想めいたところは片端から打ち壊されますので、これらのことは小さい胸裡にそつとしまつとく大切なく秘密でした。ところがこの崩しは年毎にだんぐり形を變へて育つて行つて、少しでも文字を知るやうになつてからはなほさらのこと。

丁度そのころ二六新聞で小杉天外さんの『二人みなしご』って小説を、熱心に愛讀したものでした。何でも日清戰爭で戦死した陸軍大尉の遺兒をうつしたもので、姉の名を秀子、弟は秀一と云つてまだ可憐な腕白盛り、その姉弟がいろ／＼な苦勞をするのが痛はしく、すつかり秀一さんに同情しちやつて、ある日なんか秀一さんが可哀想な赤犬にお櫃から御飯をやつてところを、あの憎ら

しい兵造小父さんに見つけられ、酷い目に逢はされながらも意地つ張な秀一は、僕の分をやつたんだから、それだけ僕が食はずに居ればいいぢやないか、なんて屈せぬあたり、胸がいっぱいになつてしまつてその日は自分も、ひそかに御飯の數を減らしたほどでした。夢の様な話ですけれどごまつたくなんですわ。そのくせ朝は寝床の中から妹と同じやうに『おめざ、おめざ』とねだつてゐたんです。可笑しいでせう、ホ、、、、。

□ 悲しきあきらめ □

生ひ立ちの記の續きをくと強いられるので、再び筆を執つてはみましたがの、おゝ涙！ 珍しい涙がボタ／＼と、原稿紙の上に散りました。

前に書いた記は——あれは嘘ではございませんけれど、みにくいしんの上に五色の彩糸を加へて、絡り上げたのでござります。何の私の生ひ立ちがあのや

うに平和な、美しいものでありませうぞ。それを悲しいとも不幸とも思ひはしませぬけれど……けど、云ひたくない、云ひたくない、沈黙は黄金でござります。

偽らぬ懺悔——まだ懺悔する程のわるい事は致しませぬが——自傳——を書いておいたなら、死んでから心残りがなからうとも思ひますけれど、こんな者かと見透かされ、さげすまれて了ふのも殘念でございます。散々怪しませておいて、平氣で嘲笑してやらうといふ人のわるいいたづらッ兒なんでございます、清溜併せのんで底知れぬ海洋の様な、深さと廣さがもちたいのでござります。私は両手を天にあげて威張つてやります、叫んでやります、我が運命は、飽くまでも數奇なれ、辛辣なれ！ 襪衣のほころびを縫ふ女にて終らしむるな！ 平凡な生涯が一番堪へられない。

今こそこんなに住み荒してしまつて見る影はございませんけれど……此家

の普請の出来上つて引うつつてまわりましたのは、私が九歳の夏のこと。生れて始めて自分の家といふものに入つたのですから、子供心にもその嬉しさは格別でございましたわ。新築の木の香心地よく、青疊はつる／＼と滑りさう。何しろ別荘地のことですから、近隣の様子やお交際する人たちなども、今までとは全然ちがひました。言葉使ひやお叩頭の仕方などについて、やかましく云はれ出したのもこの頃の事です。けれど他家へ上ると、きつと紙包みの見事なお菓子を頂けるのが嬉しさに、よく父の後にまつはつて行つたものです。が小仁王みたいな引つめの束髪に、その時分流行つた紺絞りの單衣、紅いメリングの挾帶チヨコンと締めた自分の姿を、見すばらしいと微かに心づいた事もありました。

我から友にそむいて、遊び相手などは一人も求めませんでしたが、よくお使ひに行つた歸途など、學校がへりの子供等に逢ひますと、紫メリンスの風呂敷、

を腰に巻いて袴のつもり、書物の代りにお重箱包みなど斜かひに背負つて、自分もそのお仲間らしう見られることに苦心もしたのでござります。まるで昆蟲科の擬態か何ぞのやうに……ホ、、、、。

袴とリボンとお被布とは、私にとつて長いーー間の片戀でございましたが……かうして心のうちは燃ゆる様な不平や嫉妬や羨望やの念に驅られながらも……何一つ口に出しては云ひ得もせず、悲しいあきらめに生きてゐた自分が、可哀想でならないのでござります。子供らしくもない、何故母の背に縋つて駄々をこねなかつたか、無理を云つて困らせなかつたか？　この子はまるで男兒の様な。さつぱりとして何一つ、女の子らしいものを欲しがつた事がないなど、父母の寢物語りをきく度に、搔巻の襟に顔おしあて、泣いてゐた子を誰が知りませう、え、誰が知つてくれませう。私はその頃から陰多い少女でございました。そのくせメソメソする事なんかは大嫌ひで、女らしくないと云は

れるのをむしろい、機會に、隨分はねまはつた。世話もやかせず、居るかゐないかわからないほど溫和しくて、ゴムの乳首を大きなりしていつまでもチウ／＼吸つてた妹は、人なつっこい愛想のよい、冠切のふさ／＼と色の白い、誰にでも愛せられる子でした。

## □少女太公望□

私はよく父のお供をして片瀬川へ鯉釣に行つた。

出かける朝は定つて『雲を見てくれ』と云はれます。得たりと邸内の一今はありませんけれど、小高い丘の上に大きな／＼老松が一本横はつてゐました。するとその幹によち登つて四方を眺めます。そして富士山の山頂に風雲がかゝつてゐなければ、もしさうでなければ『つまんないな、つまんないな』と鼻を鳴らしながら枝に腰かけてしまひ、足をぶらん／＼させてゐ

ていつまでも下りて來ない。

麥わら縄と云つて、五六月から釣れはじめて、九月堤が一面火を點じた様な彼岸花に彩どられる頃になりますと、いよいよほんたうのシーズンに入るのですが、片瀬川は夫きな河ではありますと、いよいよほんたうのシーズンに入るので、潮入なので満潮になると、水が逆さまに流れます。干瀬の蘆の根などには澤蟹が澤山遊んでゐます、人の氣配に驚くと、ガサ／＼ガサ、ゴソコソ／＼まるで箕で量るやうな音立てゝ一齋に這ひかくれる。

大抵な人は餌に蚯蚓を用ゐますけれど、あれは氣味がわるくてどうしてもいぢれません。目的物の鯛の外には、海津、うごひ、鮎、鮒、オコゼ、手長蝦は鉄の長さが一尺もある。鰻の奴はうね／＼と手首にまとひつくので、思はず悲鳴をあげた事もある。釣竿の先には小さな鈴をつけてあるから、魚がぐいと引くと琳々々々。あわてゝ繰り上げると手應のある水離れ！ その瞬間！ 落した

魚は大きく見えるとか、針など断つて逸し去られた時の殘念さ！ 心魂に徹して忘られない。

お晝飯には腰に結ひつけて來た竹の皮包のお握飯をひらく時の樂しさ。ほんたうにかぶりつきたいやうでした、美味くて。鱗だらけのなまぐさい手を洗はうともせずにそのまゝ……。よく書家のスケツチ帖の中へなど入れられたものです。

秋は水も空も透きとほるやうに澄んで、暑からず寒からぬ日の麗かさ。母がやかましく云つて冠せてよこす大きな麥わら帽なんぞは邪魔でく、いつかまい／＼つぶろのやうに背中に背負つて了ひます。岸邊にはしほらしい野菊の花や、赤まんま、蓼、水引草、鴨跖草、名も知れぬつる草などからみ合つて、下行く水に影を寫してゐます。踏み入ると羽の茶色になつた蝗や螽蟴が、ばらばらと煮るやうに飛びつく。

丁度枸杞の實が真紅に熟れてゐたのを、よろこんで袂にいつぱい取つたのが  
つぶれて、大目玉を頂いたこともあります。赤とんぼがついくと眉を掠めて  
飛ぶ。色づき始めた柿の梢には百舌がきい／＼尾をふつてゐる。

やがて川の水は夕焼雲の影をひたして、錦を流したやう。遠く閃く金帆の二  
つ三つ。冷たい夕風に兩岸の蘆がさわ／＼啜り泣く。

と、もう釣竿なんぞは投げ捨てゝしまつて、母が戀しくて戀しくてたまらな  
くなります、父は重たくなつた魚籃をあげて、やう／＼歸り仕度をする。

相豆の連山紫に暮れて、折には夢の様な新月の頭上に光りを放つてゐるこ  
ともある。處々の燈影がちら／＼と輝き出す。私は父の前後にまつはつて、ち  
よこ／＼と小走りです、明るい燈の下の食卓の團欒を思ひながら……。

四ツ手網をかついで行くこともある。投網を投げることもある。五月頃にな  
ると、大きな空田蟹が釣れます。青苔と共にもちや／＼毛の生えた大鉄まる

で熊襲の様です。でもゆで、食ると美味しいのですよ。

その外大笊抱えて鎧もつて、ちんぢばんば（蘭）や躑躅や百合の根を、山へ掘りに行くこともある。瀧干狩にはまんぐわをかついで行きます。つみ草や防風とり、三月のお節句には村にゐた時分のお友達が大勢、お辨當持つて遊びに来ます。私たちは俗に『たかすな』と呼んでゐた、今はもう一面の小松原で昔時の面影は止めませんけれど、海岸から吹きつける風力つて凄じいもので、富士山ほどの大沙漠の山が出来上つてゐたのです。そこですべつたり轉げたり、一日遊び暮します。今思つてみれば何のぬけがらだかわかりもしない蟲の殻を、争つて探して口に含んだ、ホーヴキにするとよく鳴るので。

また荒蕪地には草が多い、圓形な束にして、お姫様の簪などとよろこんだ。つばなのは、けたのはパンヤに似てゐるので、澤山とつて座布團の綿に入れました。日向に乾すといくらでもふくらまりますけれど、ちきかたまつて了ひ

小鳥の巣を發見る事も樂しみの中でした。雲雀は地上に、鷦白は低い小枝やぐみの茂みに巣をあみます。細い／＼草の根や脱髪や棕梠の毛を編んだもので、それは／＼巧妙に出来てゐます。

卵は丁度鶉豆みたいで、小豆色の斑點があつて、お飯事に用ひたいほど可愛いけど、孵化たての雛鳥といつたら、眼のまはりばかり大きく、足が太く、赤はだかで血筋が張つて、それで餌を求めて我勝に黄ろい嘴を精一ぱいに開けるさま！ その醜怪さ、二目とみられませんの。

邸内には花壇をつくつていろ／＼な花物を植ゑ込みましたが、私は池のあやめが一番好きでした。咲き揃ふとまるで水の色が紫を流したやうに鮮やかなのです。緋鯉真鯉も澤山あました、よく馴れてゐて足音をきゝつけると直ぐ集つて來ます。が、折々膚や五位鷺の夜襲を受けるので、小さな主人公の夢

は圓まどかではありますませんでした。五位さぎのギヤツ、ギヤツ、とまるで赤兒あかこ、宙そらにさらはれた様やうなあの啼聲なきこゑをきくと、床とこの中なかでおびえてしまつて、足もようのばし得えられませんでした。

翌朝よくあさはきつと、池いけの汀みぎはが鱗こけだらけで、白しろい糞ぶんが點てん々くとしてゐます。かはせみも綺麗きれいな小鳥とりですけれど、ドブン、ドブンと水中みずに飛び込んでよく小魚こいをとらへる。

### □ 歡喜に輝ける夏 □

けれど何なんと云いつても一番ばん待ちかねて樂たうしかつたのは夏季なつの海水沿かいすゐでした。

當地こゝの海うみは遠淺とほあさですけれど割合浪わりあひなみが荒あらいので『浪乘なみのり

す、痛快つうくわいですよ。板子いたこ一枚まいに身みを託たくして、小山こやまの様ような大浪おほなみと共に、つーと岸邊きしべをさして突進とうしんする愉快ゆくわいさ。抜手ぬきでを切きつて泳およぐ、浪なみの底そこをくぐりつこする、流石きみ

女の兒で、頭髪のことが少し心配になりましたけれど、そんな事は最初の中、興がのつて来れば夢中になつて了ひます。唇の色の紫色に變つたのも知らず、歯の根も合はずガチ／＼と鳴らしながら、冷え切つた身體を、足も踏み立てられぬやうな熱砂の上へ轉がしてあたゝめる。ぢり／＼と手足の色の焦げてゆくのが眼に見えて、恐ろしくなつたこともあります。

さうして絞るばかりひた濡れた髪の毛に、そのまゝで家へ歸れば叱られるが苦しさに、炎天乾にしてかはかすのですからたまりません、鹽分がねち／＼とこごつて了つて、櫛の歯も何も通りやしない。

海水着はいろいろあります、おもに横縞や網形や龜甲形のメリヤス襯衣、あれは子供にはともかくも、もう一人前の婦人には隨分恰好がわるい、太い腰、丸い肩、ふくらんだ胸、あんまり挑發的でもあります。で、思ふやうに活動は出来ませんけど、念入のレディー達は外國の婦人服めいた髪の多い——それも

キヤラコなどは濡れるとぴつたり肌に吸ひつきますが——紺のアルバカ製などに、護謨引の防水帽の上から経木帽面深、靴下はいて手袋まではめてゐらつしやいます。

浮袋や網に取つく事を嘲つて、あまりお轉婆の過ぎた報いには、深處に陥りかゝつたこともあれば、波に引かれて横倒しになり、どうしても起き返られず、思ふさま潮をのんだこともある。海水を吸ひこむ時の鼻の痛さかげんと云つたら、もげるかと疑はれるほどです、実験しない方にはお話にななりません。

濡れしほたれた白猫みたいな風して上つてくる時分には、もう手足も抜けさうに草疲れきつて了ふのですが、めげずに咽せるやうな草いきれのほこりを蹴立つて駆せ歸りますわ。海水着を物干竿にかけるまももどかしく、つけてある西瓜の網を手繰り上げる時のたのしみさ。井中に冷え切つた甘い漬液が甘露とも何ともたとへやうなく、見得もなく顔いっぱいに櫛形の大切れを抱えこんで

かぶりつきながら、天下の果報者我一人、といふやうな顔をするのでした。

## 口 お 登 久 さ ん 口

この時分にはたつた一人お友達が出来ました。つい近所の別荘にお登久さんと云つて一つちがひの、色の白い二重腮、眉を剃つた下町風の、可愛らしい福々した娘さんでした。不思議なほどよく気が合つて、はかない遊び事はもとより、食事も共にすれば、夜もどちらかが寝衣抱へてきつと泊りに行くつて騒ぎ。お登久さんの別荘に來てゐる間といふものは、一日片時も離れた事つてありますせんでした。

さばかりの友情も少女心は淡々しいもので、いつしか音信絶えてこゝに幾年……今頃はどうしてあらつしやるでせうねえ？ 根の高い丸醤に襦子の掛襟艶々と、水際立つたマダム振り。帳場格子の中で大福帳やそろばんに親しんで

被居るかも知れません。

あゝなつかしいお登久さん……濃い前髪をフツツリ切り下げる、紺綿子の半幅帶をきりつと貝の口に結んで、袖の長い友禪のよく似合ふ、ふつくりと肉附のよい唇の色の鮮やかな、眼のバツチリした、比較的聲の太い人だつた。お父様の御秘藏で随分な我儘ツ兒なのを、別に羨しいとは思ひませんでしたけれど、その頃尋常の四年生かで、成績はいつも優等だの總代だのつて話をきくにつけて自分だつて人には負けぬものを……と日陰の草の身のうらめしく、そればかりでなく口さがない附近の古女房たちが茶のみばなしに、彼家の娘の學校へも出さないのは何か人中へ出られぬ病氣でもあるのだらう……など、よく耳にしましたが、慣れてはあまり氣にもなりません。たゞ反抗の念を強めるばかりで、いよいよ世間といふものとかけ離れてゆくのでありました。

# 口 紅猪口のおもひで！ 口

そのころまでまだお小使錢といふものを一切もたせられず、また必要も感じなかつた私も、繪の具の上等のばかりは欲しくて欲しくて、ねてもさめても思ひました。あまり美人畫にばかり熱中してるのが父様の御機嫌にふれて了つたので、仕方がないから松の花の花粉をあつめたり、朝顔の花片を絞つたりしてひそかに彩どりました。京都土産の紅猪口をそつと持ち出して、彩色に使用てしまつたのが知れて、どんなに叱られたか知れません。

十一歳の晚秋、ちきお向ふの某男爵の別荘へ、なにがしの宮大妃殿下の御微行で成らせられた事があつた。その時頼まれてお給事に出ましたの、急ごしらへの事とてまるで午勞を白和へにしたやうな子が、七歳のお祝ひの時出來た、華手な藤紫地の友禪縮縮に下着は緋無垢の太ぶきが一寸あまりもふいてゐまし

た。お堅矢には爵金のしごきもふさ／＼結び下げられましたが、丁度疊附の下駄がないので、海老茶の唐天の花緒のすがつた日和下駄をカラコロはいて、お勝手口からそつと上つた事を覚えてゐます。

お茶臺の運び方やお膳部の捧げ方、いろいろ敷へられ、下稽古をしたのですけれど、肝心の御當人一向平氣なもの、心配にも何にもならない。いざといふまぎはまで、男爵の愛孫「やあちやま」つて六歳ばかりのを相手に夢中になつてふざけてて『やあちやま』が袖の上へのつてあらつしやるのを知らずに、ひよいと立つたものだからたまりません。『やあちやま』は轉げて泣き出す、私の一張羅の袖附は二三寸引裂けてしまつたといふ騒ぎ！

この頃から一時俳句にこり出しました。朱を入れて下すつたのはその老男爵で、大變私を可愛がつて下すつたのですから、いくら固意地者の私でもよくおなつきして居りましたの。

はかなさは人も同じか桐一葉  
おきてうすみこえたり稻の出来

億兆の雀肥えたり稻の出来  
せきれいの尾に破れけり初氷

なんていふのが秀逸の部でした。

お正月などには招かれたお書初めの席上で、摑み切れぬやうな太筆握つて、

「一花天下春、萬里江南雪」

など、墨痕淋漓とほとばしらせた。

丁度『嚴上の松』つて勅題の出た年で、日露の風雲は急だつた。

いよいよ開戦となつてからは、この草深い小松原の中にまで響き渡る號外賣の鈴の音に、幾度小さな胸を躍らせたことでせう！ 看護婦になつて少しでも

御國の爲につくしたいと、しみじみ思つた。その頃はナイチングールや、瓜生岩女が理想なんでした。でも岩女はその後東京の淺草公園で、あのちよこなん

と坐つてゐる草取婆さんみたいな銅像をみてから、すつかり嫌ひになつちやいました。

初號以來愛讀してゐた雑誌は金港堂の『少女界』でございました。誌上の歌壇では今の大劇女優の森律子さんがお姉さまの政子さんと立ち並んで、明星のやうに輝いてゐらした。可愛い十三四の洋装のお寫眞やお手跡を口繪で拜見しましたこともありました。その頃から印象の深いお名前なんでしたわ、あの方は……。

## □ 初めて文學に志す □

ナイチングール嬢から一轉して紫清を崇拜するやうになつたのは——忘れません、あの頃の女學世界……御記憶の方もありませう、現今とはちがつてもつと世帶じみたぢみな雑誌でしたわね……、それがたしか四月の増刊に、

『閨秀文壇』て大層華やかな號の出たことを。

懸賞小説、和歌、新體詩、美文、韻文こきませて、百花繚亂の趣があつた。熱しやすい少女の憧憬の瞳はヒタと誌上に吸ひつけられて、みるく美しく輝き出しました。

筆者の名も題も忘れましたが、何でもその中に非常に婦人に文學を推奨した物があつたと思ひます。『天才は望んで得べきものでなく、待つて來べきものでなく、その来るや百年に一人のみと申しますなれど、その一人にならうと我から震ひ立つも面白いではございませんか……。

語を寄す、天下の女學生諸君、卿等の中に我こそ一つ文壇の女將軍たらんと思し召す方はなきや、我こそ月桂冠を得んと志すお方はございませんか。

よしや第一流の境には至れぬまでも云々……殿方もまた大旱に雲霓を見るの思ひで、屹度双手を擧げて歓迎なさるに相違ありません。』

こんな文句があつたと覺えて居ります。飽かず繰返したものでした。これによつて樋口一葉女史だの三宅花園女史、若松賤子さん、薄氷、稻舟なんと云ふ方たちの名も覚えました。ほんたうにあの時代の雑誌の感化力なんて恐ろしいやうですのね。

ところが父はあくまで厳格な癖癖家で、數學的な頭脳を有つた人でした。時には冷酷かと疑はれるほど。

一例をあげれば私の作文なんかでも、あまり誇大な形容詩や奇抜な擬人法など用ゐると、ひどく叱られた位で、文學なんていふものゝ意義や價值はもとより、存在すらみとめてはゐなかつた。だから私は自分が新領土の發見でもしたやうに思つて「女でも立派なものになれない事はない、かういふ道がひらけてゐる」と云ふことを、ぬすんでも行かれてはならないと黙つて胸一つに秘めてゐました。どうしたらなるかといふ方法については、考へてみもしなかつ

たけれど。

その後は紙を噛むやうな漢籍の素讀なんぞ教はりながら、指はパチ／＼とそろばんの面をするべりながら、手習の筆を運ばせながら、私の心はそこにはない。果しもない空想の幻を追ふてゐるのでありました。いつの頃よりかさま／＼な理想の人物を胸に描いて理想の生活をさせて、それを何よりの樂しみとするやうになつた。自然物事が手につかず、妹をうるさがつたり、呼ばれても返事をしなかつたり、うつけたものゝやうに茫としてる事が多く、いくら叱られても直らないので、つひには雑誌も新聞も取り上げられて丁ひました。

私の全身には反抗の念が旋風の如く狂ひまはつた。一圖に親を恨む子となつた。それまではどちらかと云へばお父さん子なのでしたが、自分を解してくれない父は、もう今までの様にへだてなく甘へられる、懷しい人ではなくなりました。ともすれば襟かみしめて、火の様な悲憤の涙をホロリ／＼こぼしたもの

でした。便所や物置の中にひそんで、讀書の禁きんをかしたのが知れて、手酷く折檻せつかんせられた事もありましたけれど、もう體罰たいばつぐらゐが利くやうな年齢としでもありますんでしたし、さうかつてたゞの叱責しつせきならば眼まなこをつぶつて呪文じゆもんでもとなへてあれば、頭上かしらじやうを通りこして了ふぐらゐに、たくわをくゝつて居たのですからたまりません。その中うちでも拳固こぶしは一時的じてきだからいくら痛いたくてもかまはないけれど、お灸きゅうが一番いちばんいやだつたのです。今いまでも襟首えりくびに痕あとが残のこつてゐます。人にとがめられると、おできだ／＼と云ひ／＼した。

かうして父の晩年ばんねんに對する私は、おづ／＼と上眼使うばなづかひばかりして、ろくに物言ものいはぬ子こでありました。

父さんはお前に對して何も望ねがまない。身體からださへ壯健さうけんであつてくれゝば、それが一番親への孝行かうぎょうである。だからもう勉強べんきょうなんぞしなくともよろしい、しばらく文字もじに遠ざかれ！

かう云ひ渡された言葉のうらには、限り知られぬ悲痛の響きがこもつてゐたのであります。

父は秀才と云はれた自分の末路が、かはいさうでならないのでございました。藩の學校時代には、月の桂もと郷黨から望みを嘱されたものが、云ひ甲斐もないこの有様、それも病弱な體質故と、子供たちは愚鈍でも丈夫でなくちや、とはその口癖でございました。幼い時から私の頬には紅味の薄いのを氣にしてゐましたが、妹はその反対なので「林檎ちゃん、林檎ちゃん」て愛しました。

### □ 養鷄園のヒロインを氣取る □

父は閑散な身の上ですし、私もそんな工合なので、慰みがてらに鷄を一時隨分飼養したことがございます。大分發展しまして、鷄小屋を建てる時など、私は壁塗の土出し奴までいたしましたわ、ホ、ホ、ホ。そのため勢ひ戸外でばかり

立ち働くやうになりました、はだしになつて手拭ひ冠つて、紺飛白の上つ張着て、百羽あまりの鶏の世話を取しきつてやつてゐましたが、ほとんど狂的に私はこれらの鶏等が、可愛くつてくたまりませんでした。おひく理想の養鶏園にしやうと、徹かな希望の曙光もみとめたのでございました。

けれども利益を打算してかゝる仕事ですから、なか／＼自分の思ふやうにしてやる事も出来ず、餌が不足であつたり、羽蟲が多く發生したり、設備の不完全なのが可哀想で／＼なりません、悲しい時、／＼やしい時、うれしい時、うらめしい時、私は強く／＼鶏抱きしめて泣きました。話相手にして獨りかき口説きもしました。一番秘藏だつたのは『雪ちゃん』て眞白な丸々とした、鶏冠が紺牡丹のやうで黄金のやうな脚をした、それは／＼美しい西洋種の雌でした。が、それは野良犬のために敢ない最後を遂げました。軀に度々やられました。鶏盗人に忍び込まれました。私はそんな度毎、熱を病むほど昂奮しました。

いやで、仕方のなかつたのは、一里あまりある水車へ餌を買ひ出しに行く事と、卵を賣りに行く事でした。いま思つても冷汗が出る、五六十個籠に入れたのを抱へては、諸家の臺所口なんぞから「今日は如何でせう、極く新鮮しいのですけれど」なんて申し入れたものです。にべもなくことわられた事もある、見せてから高いの負けろのと云はれて、泣きたくなつた事もある。月末には、つけを持つて勘定取りにまはる。

別荘なごからつぶしの鶏を買ひに來られる人もあつた。朝夕手にかけて可愛がつてゐたものを、みす／＼殺されると知りながら、どうして賣つて渡されやう！ でも仕方がない、私は鶏屋の娘でした、え、鶏屋の娘でした。

鶏糞は肥料に賣りますと、四斗樽に一杯四十錢づゝなのです。その半分は私の收入になりますので、五圓なにがしの貯金が出来ましつけ。

父はもとから病氣勝でしたのに、その頃はもう月の中半ばあまりは、病床に

ある事が多くなりました。けれど、病室へは母ばかり入れて、姉妹をばかたくないましめて、決して枕邊へも近寄らせなかつたので、ついしか一度も子らしうお肩たいた事も、薬すゝめた事もございません。傷々しい咳嗽や痰はきの音のする度に、身をけづられるやうな思ひがして、聲高に物言ふこともなく、情ない溜息と共に、妹と顔見合せてのみ居りました。

そんな工合でこの養鶏事業も、思ふやうにはゆかないでの、段々縮少してしまひました。そして私は裁縫の稽古に通ひ始めた。

## □ 友のゆくゑ □

こゝにはお弟子が三十人あまりゐました。私はそれまで全然針なんともつたことはないので、花雜布や糠袋から習ひ始めました。いつの頃よりか、生來の勝氣はかけをひそめて、その頃は少し放心の體なのでした。何云はれても唯、

彼方お向き、はい、此方お向き、はい、といふ調子で、一番年下ではありますたし、物の數にも數まへられはしなかつたが、馴るゝにつれて打解けたお友達も出來、お辨當のおかずを取かへつこしたり、ひそ／＼話の仲間にも入れられるやうになりますと、面白くつて毎朝いそ／＼と、出かける時間が待たれました。

が、毎日の往復、村の悪たれつ兒たちに、いちめちれるには閉口しました。どういふわけだから知らないけど『花車の人形、花車の人形』つてはやし立てるんですの。さうして長い／＼竹竿たけざなをふりまはしたり、古草履ふるぞうりを打つけたり、砂蹴浴さわせりゆびせたり、みんなで通せん坊ぱうしてしまつたり……田舎みなかの人つて不深切なもので、自分の子達こどもがそんな悪戯わるさして人を困らせてゐるのをみても、決して叱らうとはせず、かへつて笑つてゐんですもの。

さうして大概な朋輩ひとともが羽織はおりでなく半纏はんてんを着てますので、私も母わたしにねだつて半

纏の、黒襦子の細襟のかゝつたのなぞを着ました。雨具がないので、雨天にはきつと休みました『張子の千いちやん』て名を取つた。

よくみんなしてお嫁どりを見に行きましたつけ、當地の習慣で當夜はお座敷の障子も何も全部開放して、自由に式場の光景を見物させます。むしろ観客の多いのを名譽とするので、もし雨戸でも閉めてしまはうものなら、亂暴されて大變な騒ぎ！ さうして近隣の若者連中へは彼祝儀として酒肴を贈るのださうで、その厚薄多少により、聞くにたへぬやうなことを云つて野次ります。

嫁く時大抵なことでは傘を用ひません。もつとも當日は『迎ひ新客と』云つて、婿君が角樽や鉄箱かつがせて先方の仲人、重立つた親類一同、此方へ迎ひに来て一渡り酒宴のあつた後、さてつれ立つて出掛けるのである。(婿取りならば女方から迎ひに行きます。)

先方の家ではたいまつを焚いて待ちかまへてゐまして、花嫁さんの門口を這

入る時、わらの束ねたのでお尻を叩きます。

式の最初に花嫁さんには「おちつき牡丹餅」と云つて鹽黃粉のお菓子を食べさせる。これは良人を甘くみぬやうにといふいましめですとか、ホヽヽヽヽ。

お吸物のかはる度、花嫁さんの服装も替ります。何のことはない、まるで衣紋竹みたいね、ありつだけの着物を着替へては出、着替へては出、席のあた、まる暇もなく、お開きは暁の二時過ぎになるさうです。婿君はじめ男の人は袴のみでみんなあぐらよ。

翌日はお近づきにまはります、丸齧に紬小紋ぐらゐなさだ過ぎたのでも、必ず角かくしをかけること、振帶を下げるここと、洋傘をさすことが、花嫁さんの表章なのでございます。だから時節ならぬ時分洋傘さすと、嫁つ子の様だと笑はれます。お茶を一つまみづ、御祝義袋に入れたのに、名前をかいて配ります。児童たちは後からぞろ〳〵尾いて歩いて『嫁御の股に、ねぶとが出来て』

なんて口々にはやし立てる。

私たちのお裁縫場は高い二階建で、四邊はずつかり青麥と菜の花烟でございました。その中の細道を耕のおほひした鉄箱や、紫の深張や、桃色の板などの一行の練り行くさまが、まるで繪のやうに眺められるのでした。

それをみるとて截板たちいたを踏み越え、針箱はりばこを蹴飛けとばし、みんな窓のところへ重なり合つてワア／＼騒ぎましたが、それ／＼虚榮心きよえいしんを挑發てうばつされてゐたものとみえます。お嫁入よめいりのお仕度しだくは何でも新調しんとうの、しつけのかゝつたものでなければ幅はが利かないので、それまでは不自由ふじゆうを忍んで我慢がまんして、いざといふ時一時にこしらへます。

その代り嫁つた先では、知己近隣ちききんりんがお仕度拜見しだくはいみんに寄り集つどひます。とくさう長持ながもちの底から下駄箱げたばこの中まで御披露ごひらういたします。

紋附もんつきが幾襲いくかさね、丸帶おびが何本なんぼん、羽織はおりがなんまい、銘仙めいせんが幾通りいくとほなどとはおろかな事こと、

足袋が何足、たすきが幾筋、手拭が何十本、襦袢、お腰巻の數までがそれからそれへと暗傳されます。

かうした取沙汰や誇りの中に、白粉つけて紅さして髪も美しう結ひ嫁つ子らしく裾の長い着物でも着てあられるのは、せいぐ一月ぐらゐな間であります。農事の方でもいそがしくなれば、いつか日焼に色も黒み、手足も荒れ、そゝけ髪つくるふ暇もなく、切角都會への御奉公できたへ上げた都言葉や、お行儀ぶりも亂れ、見る影もなくすぶり返つて了ふのです。その頃の友の多くは次々に、みんなさうなりました。今では道で行き合つてもあからめ過して了ひます、お互に。

## □ 父を山寺の火葬場に送りて □

父に逝かれたのはその年の七月でした。まるで夢の様な儂ない別れでした。

その時の有様は…………もう、もう、云ふに忍びません。群り寄る蚊軍のうな  
もり凄まじう、薄暗にふら／＼と、澤山な月見草のゆらめいてゐる夕間暮……  
……。

人は大勢集りました、身のおきどころもなくて私は、戸棚の中に一人かくれ  
て塞き上ぐる聲をのみました。心強い兒、涙一滴こぼさぬ、と憎んだ人もあり  
ました。今から思へばその口が引裂いてやりたかつた。

けど物も覚えぬとはあの事でございませう、擲たれたからつて、叩かれたか  
らつて、痛いともかゆいとも感じやしない。たゞたゞ寝たらぬ時の様に茫とし  
た頭脳は…………翌朝夜の美しう明け放れたのが、不思議なやうに思はれまし  
た。あのむし暑い息苦しい、忌まはしいランプの焰の赤黒くたゞれた夜の空氣  
は、私たちの氣分にふはしいものでありましたのに…………。

田舎寺の火葬場は、後方の山の上に形ばかりのものでございました。もう暮

れ切つて四邊は眞暗な中に……伯父の手にもち添へられて、たいまつからう  
 つした焰か、ちらりと寝棺のまはりに紅い舌を吐きはじめた。でもこの時は  
 暮れまだふ心の中にも、同じ煙になど、はかけても思ひはしませんでした。あ  
 きらめ、といふ言葉はいつの場合にも悲しいものでござりますけれど……そ  
 してあきらめきれない事が多いですけれど……この事ばかりはあきらめる  
 事が出来たのでござります。かねて云ひ聞かされてゐた言葉の故もありませ  
 う、所詮はかくとかねて悟したる事なれば……その臨終こそ急なもので、何  
 一つ遺言らしいことを残されるまでもございませんでしたけれど……。

火葬場からの歸途、私は妹を抱いて車に乗せられました。ばらばら落ちる  
 木下闇の雨……雨のびしょ／＼降る晩なのでした、正體もなく寝入つてしま  
 つた妹は、私の腕の上に頭をころ／＼させてゐて、いくらゆすぶつてもゆすぶ  
 つても起きません。青い／＼螢がふら／＼と、田圃から飛んできて行途を掠め

た。その氣味の悪かつたこと。

お察し下さいまし、父亡き後の一家は……まるで火の消えた様なものですわ、寂しさ、詫しさ、物悲しさ、心細さをとりあつめて……。

それにお耻かしいわけですが、かうなればまづ第一に生活上の心配からせねばなりません。それにはいろいろ事情もあり、怨めしい人もあることなれど……。

……。

母の實家の當主は、私達にとつて血統を分けた叔父ではありますけれど、俠氣のある人だものですからその好意によつて、兎も角も一時は彌縫することが出来ました。薄命とは云つても上みれば限なく、下みてもきりがない。母子三人散り／＼にもならず、父様のおかたみの家も手放さず、他人交せずにつかしてゐられゝばと、儂ない事を頼もしがつて……あゝ薄氷を踏むやうな思ひだつたあの頃……月末になると勝手口の障子の開く音に胸轟かせたり、副食

物の不平なんぞ云ひかけてふと心づいて、口をつぐんでしまつたこともあります。毎夜石油の減るのに気が引けたり……。

此様な工合で知らず／＼大人づくらせられてしまつて、人並外れて大柄であつた私は、誰も／＼年齢よりは三つ位づゝ多く見ました。

妹はその年の九月から村の小學校の尋常科へ入學させました。私とはまるで正反対の性質をもつて生れた無邪氣な兒、いき／＼と可愛く美しく、わけても幼い質だつたので、まだ何のわきまへもないのが、つくづく羨しうございました。男の同胞があつたなら……と始めて思つてもみました。一番上の兄が生きてあれば、二十歳にもなるのでございましたから。

我が長き憧憬なりし、黒キヤラコの筒袖紋附に海老色メリングスの袴、お下髪のリボンなびかせて運動會の競技にきそふ樂しげな有様みては、幸福ないもうとよ、どうぞ妹にだけは自分の様な肩身のせまい思ひをさせたくないと、身

に引きくらべて姉らしい涙を落したこともありました。

表面はともあれ、新聞を購読する餘裕すらない苦境でしたから、希望も空想もだんぐいちけて了ひますの、閨秀作家になどといふ抱負は何處へやら!!早く裁縫が上手になつて、東京の立派なお邸へ一二年行儀見習に上るのですよ、と云ひきかされもし、それが微かな光明であるやうな氣もしてゐました。

さうかうする中に翌年の春でした、明治四十年、上野に博覽會の開會されましたのは。

## □ 東京見物の追憶 □

我が故郷とはいへ、私のはつきりと物心ついてから上京しましたのは、七歳のお祝ひの時、産土様の下谷神社へ参詣の爲めと、その次は十二の春、外祖父様の御法要で外祖母様がお迎ひにいらしてつれて行かれた、それつきりでした。

前のときは家内中で出かけました、妹はまだ廣袖の裾の長い着物にくるまつてゐる時分でした。私は根がつれて痛い／＼と厭がるのに、大きな稚兒齧に結はせられ、籠甲の前挿さして、眞白に塗り立てられて、諸方連れて歩かれたものですわ、伯父の家の門内には大きなく石榴の樹があつて、紅玉の様なつやゝかな粒が、美事に割れはせて居りました。けど私には手が届かないんでせう、例の一歳ちがひの従兄が棒で叩き落して呉れたり、門外へ出て近所の惡童たちにいぢめられ、泣きさうになつてると、直ぐ走つて來て救つてくれるし、空氣銃など持つてゐるので、上なくうれしく頼しいものに思はれました。

鐵道馬車のお馬が黒い眼隠されてゐるのは、不思儀で不思儀でたまりませんでした。そして乾いた馬糞のはこりと共に、ばつと風につれて舞ひ上のを、子供心にも穢ないと思つた。

赤い大きな觀音堂の廻廊の欄干につかまつて、もつと鳩ポツボに豆をやるの

だと駄々りながら、心中では「まはり燈籠とうろう」なれ、赤い衣服着せて、觀音様かおうさまへつれてくぞ!!』とよく丹波鬼灯たんばきとうをもみながらうたふ唄うたのことを考へてゐました。玉乘たまのりや猿芝居さるしばゐも見せられました。玉乘たまのりではある可愛い幼い太夫さん達がクルくと巧みに玉たまに乗つてまはるのが面白さうでく羨しくてたまらず、眞似まねをするとしてゴム毬こりを幾個踏みつぶして什舞じまつたか知れません。

十二歳の時は陽春四月、上野の山は櫻花と人とに埋もれて居りました。毎日々々足が櫛古木になるほど諸方見物につれて歩かれました。大初だいじな下襲したぎの縫無垢ひむくの据さそはすつかり切れて綿わたが出てしまつた。またこの時ほど研究心の盛んだつた時代はございません。博物館などへ這入らうものなら、一々根ねが生えてしまつてなかく動かないので、これには外祖母様おばあさんも閉口してゐらしました。

白木屋の飾窓しきゅうやの活人形の美しさに、口開いて見惚れてしまつたり、日本橋にほんばしの小母さんとこへ泊つたら、その翌朝花よちあさはないかだをつかつて、念入りのお化粧つけ

してくれたので、顔がびりくして困つたり、朝御飯の味噌汁の實が甘過ぎて大變美味かつたけれど、我家でないのだから遠慮してゐました。そしてよそのお家では御飯のお代りをする間、お箸をもつて待つてゐるものぢやない、ちゃんとお膝に手をおいてゐるのですよ、と外祖母さんに言ひきかせられ、ひとり非常に赤面した事を覺えて居ります。髪は耳の傍から大きく前髪取つて桃割に結つて居りました。でもその前髪の恰好といつたら、上部の方をきうと引詰てまるで三角形なんですよ。リボンなんぞも隨分滑稽でしたわね。巾五分ぐらゐの細つこいのを輪を少し出して、あとは長くだらりと下げるのでした、先を矢筈に切つたりなどして。オリーブ色の全盛期でした。

## □ 初島田の印象 □

その次が明治四十年の博覧會見物なのでせう。その頃からの思ひ出はいろいろ

ると多くなつて、なかなか精しくは書きつくされません。滞在十日あまりのその時の日誌が、二冊の雑記帳に細かく記してありましたけれど、何處へ失してしまつたんでせう?

髪だつてそれまではまだ髪髾分けて結つたことはないんでしたのに、一足飛びにね、叔母と髪結さんにするめられるまゝ否とも思はず、鏡臺の前でされる通りになつてますとね、やがて出来上つた髪は文金高齧でした。よく皆さんが繪や詩になさる初島田の印象も何もあつたものではありません。重いとも耻かしいとも何とも感じやしなかつたので、むしろ無茶でしたわ、數への十五でしたもの。今こそこんな末細つてしまつた髪も、其時分は坐れば裾に二寸もたまつて、片手には握りあまる見事さ!! 根には白丈長を巻きましたが、まだ幼いのだからといつて、上には紅いちんころがけを掛けました。この頃復活してきた結縫や、銀のびら／＼や薬玉簪や摘み細工の前挿なんて花やかな物は、影

も形もひそめてゐた時代ですから、派手にしてせいじく平打の大きいのや、朱塗蒔繪の櫛ぐらゐ。服装はといへば黒襦子の襟のかゝつた黄縞の銘仙に、淺黃襦子と板締縮緬の腹合せ帶、友禪縮緬の前掛つていふ純然たる町娘の風でした、母の好みで。

その時分はお稽古の材料によく叔母の家の裁縫を借りて縫つてゐたもので、すから、御褒美だつて洋傘を買つて貰つたことがござります。紫がゝつた濃い海軍色で、華奢な柄には洋銀の葛の葉がからまつてゐる。さあ、もううれしくつてうれしくつて、それをさして出たときはもう、行き合ふ人毎みんな自分に眼を止めるやうな氣がしてなりませんでした。

でも海水浴は、その年の夏までいたしましたのよ、随分でせう。海水着が小さくなつてしまつて、綻びて仕様がないのですからやつとやめたのですわ。

## 口かるたのまごひ口

春着の仕度も足らぬ勝ながら、母の譲りの小絞縮緬を拔染にしたりなんかして、私は十六の春を迎へました。そのお正月は随分かるた會で騒ぎました、田口さんといふお宅で毎晩々々十二時過ぎまで。

此家には東京の學生さんが澤山来て居られましたので、田舎少女の私が生意氣にも學生界のいろいろな事を知りましたのは、みんなこの人たちによつてでした。

晝間はともあれ夜分の外出は、母がなかなか許してくれませんので、涙をのんで黙したことも一度や二度ではありませんでしたが、どうでもなくてならない花武者(?)と先方からはもう櫛の歯をひく様なお迎ひなんでせう。得意の絶頂はこのときでしたね、ホヽヽヽヽ。

そのくせ場なれない椋鳥サン、わなくーと胸震ひがついてしまつて、口も利かれず、札など揃へやうとしても、まるで身に魂が添つちやゐません。頬は火照る、耳は高鳴る、湧き立つ胸をおさへて、顔も得上げず居りました。

田口さんの和さんは、都育ちの纖細立ちな品のいゝ、ほんとにお嬢さんらしい美しい方でした。私とは同じ裁縫のお師匠さんへ通つて、御酒德利のやうにいつも一緒だつたお優ちゃんも、小學校時代から小町娘と謳はれた程の綾緞よし、私は瘦せて、色が黒くて眼ばかり光つて、派手な紫友禪の羽織など少しも似合はない、黒ン坊の申し子みたいでしたわ。村一番とて高の知れた髪結ながら、髪は二人とも挑み合つての高島田。元祿風つてイヤに前髪を巾廣に、ぐいとおしつぶして出したのが流行る時分で、今からおもへば随分いやはな恰好ですことね、ひとつ年上でしたけれど小柄な若々しい和さんは、お下髪がお好きで、ふつくりと前髪出して、肩のところに真紅なリボンかけた……大きい人のお

下髪、それがどんなに羨しかつたでせう。

かるたにも飽きると今度はお茶坊主だの、ごろぐ様だの家族合せだのパン食ひ競争だの、随分子供らしい遊びに笑ひ興じた。

指環送りの時隣席に坐つた大山さんて法科の方が、男のくせに餘まり白い柔らかな手をしてあらしたので驚いたことや、誰さまの磯節うたふたお聲の美しさが身に沁みて忘られなかつたことや、何やかや、みんな懐かしい追憶のたねなんでござりますわ。隠し藝の總ざらひなんか始まります時、悲しや無藝無能の身は……父母うらめしくもなるのでございました。お優ちやんはお三味線を習つてゐました。和さんのお得意の唱歌は、

露の玉殘して、はれ渡る村雨の……

和さんには先日、六年ぶりで邂逅いたしました、そしたらもう、二児の母様でした。

「おみ大きくお成り遊ばしてねえ』  
としみぐ／＼有仰つた。

おみ大きく——まるで子供のやうね、でもこの場合これより他に適切な言葉が見當らなかつたんでせう。私はだまつて微笑んだけど、分髪には新ダイヤが輝いてゐて、思ひきり荒い濃紫の大矢絣に二尺の袖も耻かしう……。

「お姉ちやま」

と肩にからまる、友の愛兒を引きよせて胸に抱いて「をばちやまと仰有いな」とそつと数へましたの。

皆さまのお噂も出ましてねえ、背おもへば夢のやうでございましたわ。眠つてた心に強烈な刺戟をうけて、私の再びいろ／＼な雑誌を手にするやうになりましたのは、まつたくあのかるた會以後なんですもの。

## □ 晴の飛躍の初舞臺 □

丁度デカダンだの自然主義だのといふことがやかましく論じられてる時分で  
 したが、むづかしいことはわかりやしませんけれど。文章世界で水野仙子さん  
 や、その頃朝日新聞には大塚なを子さんが小説を書いてゐらしたのも大いに發  
 奮の料となり、また／＼私の野心は以前のやうに燃え出しました。なげなしの  
 お小使錢をはたいては、古雜誌店の店頭などあさつて、それが何よりの樂しみ  
 でもあり、及ばぬ羨望の念に全身の血潮が狂奔して、苦痛でたまらぬ時もあり  
 ました。

とう／＼鬱勃した意氣を發散させる爲めに、筆をとつて投じたのが某誌の短

文欄!!

關門は案外に通過しました。のみならず二度目には一足飛びに天位をさへ占

めたよろこび、賞品に貰つた圖書切手は長らく私の手函の底に秘められてありましたが、後年藤村詩集と何やらに代へられた。

折柄私は烈しい百日咳になんで、お裁縫のけいこも休んでゐたので、これ幸ひと小説のまねごとみたいな物を二つ三つ書き始めた。兩方ともどつかへ失して了ひましたけれど、隨分妙なもので、一篇は新婚の夫婦の極くお甘いところを鏡花張りか何かでうつしたもの。一篇は場所を鶴沼にとり、秋月別荘の令嬢多美子といふ美人がブローケンハートの結果病を得、病床に悶々する身となつたけれど、熱烈な少女心の純な血潮のしたゝりは一句々々、凝つて入神の文字となり、つひに女流作家として大いに名を成した。その戀がたきでお艶といふのは、これも評判の煙草屋の看板娘。

速雄は帝大の學生でした。最初は多美子を憎からず思ふてゐましたけれど、お艶の辛辣な手段に中傷されてからといふもの、此方の色香に迷はされてしま

つて、つひにお艶は首尾よく法學士銀行員の新夫人となつて、この地を去つてしまひます。

多美子は陽炎女史といふ匿名の下にかくれて、絶えて本名を世に出しませんでしたが、お艶夫人はある時友達にすゝめられて讀んでみた評判の小説に非常に感動し、さア氣になつてたまらない、失戀になやむヒイロンの俳句、髪髪と眼の前に現はれる、それがどうしても多美子であるやうに思はれて……。

この寄怪な幻影のために散々なやまされたあげく、お艶はヒステリーを起して了ひます。ところが或る日ふと新聞紙上に闇秀作家陽炎女史の訃が傳へられ、それによつて矢張あの小説の作者が多美子であつたことを知ると、もうくく悔恨の情にせめられて、ゐても立つても居られません。ついに精神に異常を呈し、ふらふらと迷ひ出で、何處から身を投げたのか、浅ましい死骸となつて生れ故郷の演邊へと打ち上げられた、といふ筋で、

「あはれ二佳人が永劫の恨みを止めた鶴沼海岸、天に訴へ地にかこつか、怒濤

岸を噛んで梢に松風颶たり。」

なんて結んだものです。今から思ふと失笑したくなる。でも熱心だつたのですよ。年中ふところか袂かお端折の中を、銳筆と雜記帳でふくらませてゐないことはありませんでした。お庭のお掃除しながらでも、お釜の下を燃きながらでも、絶えずそれを取出しちやア書き入れて居りました。

する中その年の秋でした。某誌で十一月の増刊の爲にひろく懸賞の投稿を募集してあつたので、ふつと應じてみる氣になつたのです。まつたく何の考へもなく、無意識のやうに……。かへつて深く考へてみれば、こんな思ひ切つた大胆な事が出来るものではなかつたのですが、母に言へば止められるに定つてますから、夜々二時間づゝの暇と、それから母の外出中とをねらつて、やうやく半紙十枚ばかりにおぼつかない字でしたゝめ、縦切の前日かに投函しまし

た。

けど、もうこれで気がすんでしまったので、まさかにこれに手みをかけるほど厚かましくはありませんでしたから、そのまゝ忘れたやうになつてゐたところへ、二十日あまり経つと案外にも三等に當選した通知と、十圓の旅券とを送られた。

まあ、まるで夢みた様でばんやりして丁ひましたわ。何かのまちがひであると、今にも取消のしらせが來やしまいかと氣づかはれて、我が物ながらこのよろこびを、感謝なく味はふることは出来ませんでした。そつと遠巻にして眺めてましたの、ホ、。。。

が、やがて「心の日記」と美装して現はれたのは、たしかお納戸の蔵庫を翻たマガレットの女の半身のついた青いやうな表紙で……これこそ私の初解

臺!

活字になつたうれしさはもう前にも味はつたが、今度は評といふものもついてゐて、それには思ひがけもなく、非常に賞められてあつたので、私はもう有頂天になつて了つた。その雑誌を抱いて、もう／＼うれし泣きに泣いたのです。いつそこのうれしさを身にしめたまゝ山へ入らうか、海の底へでも沈んで了はうか、とさへ思つた。我が世の望みは足りたのですもの、望月のかけたる事もなしとおもへば……。

これに思ひ上つたなどといふわけではさら／＼ありませぬが、引きついで一二篇書きました。

丁度縫物にいそがしい師走のこととて、寸暇もゆるされぬのに、そうつと二分心の光りが次の室に洩れぬやう苦心しながら、火鉢もなく更け行く夜半、かじかむ指に筆を持った、あの緊張した心持は、もう生涯味はなれないでせう。

前髪の毛はいつも洋燈のために、ちり／＼と焼けちぢれて居りました。

欲しいものも澤山あつたけれど、お金はみんな母様に上げてしまつた。苦し  
い年末の家計の上には、それがどれほどの緩和剤となつたでせう、のびくくと  
眉をひらいて、おさへてもおさへても包み切れぬ歡喜と、小さな誇りとが私の  
胸に躍つてゐました。代りばんこに足踏してゐましたわ。さうして私はちつぽ  
けなくせに、皆様のお仲間へ這入つちやわるいのぢやないかと思はれて、そ  
れがどんなに心配であつたか知れません。だつて皆さんもう大きい方ばかりの  
やうなんですもの。

早くくく満十五歳になつて了へばいゝとあせりました。下らないことに氣を

もんだものですこと、ホヽヽヽヽ。  
人と手紙の往復をはじめたのも、そのころからのことでした。

## □ 高嶺の白百合 □

何ですか、もうこれからは生ひ立ちぢやなくて、思ひ出の記のやうなものになりますのね。あゝ思ひ出!! 此様なに頼がほてつて居ります。書いていゝのか、わるいのか……御迷惑なさる方があるかも知れませんもの。

瑞枝さんとはそもそも誌上から交りを求められた最初の友。ほゝゝゝ今から思へばね、例の月並な忘れな草のエハガキや、びんくのあんべろるぶに紫インクなど匂はせて……する分甘つたるいいやみなものだつたに過ぎないのですけれど、私すつかりのぼせちまつて、直きにお定り文句の、姉よ妹と呼び合ふことになりましたね。丁度よい機會があつて始めて逢ふことの出来たのは、文通しはじめてから二ヶ月ばかり後のことでした。

一種の不安と期待とに胸轟かせながら、藤澤のすていしょんまで迎ひに行き

ました。以心傳心、お互にそれとはすぐに發見あひましたが、想像とはまるでちがつた、頬骨の高い眼の強い肩のすらりとした、勝氣らしい小作りな婦人で、妹分の私の方が五寸餘も背が高うございました。年齢は二十歳ださうで、聲だけは別人のやうに可愛く、あまり花やかな女ではありませんでしたけれど、私はたゞもう耻かしくつて……何を云はれてもたゞ、えゝ、えゝとうなづくばかり。でも『永久に變じ變はらじ千代ふべき、松の操はよしつきぬとも』こんな歌をそつと袂の中で書いて見せたりしました。

瑞枝さんも薄命な方でお父様には三歳の時別れ——その時分にはお父様のない人なんてきくとむやみに同情して丁ひました——姉弟が多いので早くから里に出されたり、母様の温い乳房の味も知らず、五つの秋から親類先へかゝりうどの身、搖籃の地は桃に名高い駿河の海の片ほとりであつたが、養家は函嶺の山の中、あの双子山（海岸から遙にそちらを指さして）や駒ヶ嶽の麓を通つて

行くんですよ。夏になつたら是非々々遊びにいらつしやいねえ、裏の湖水でボートこいだり、乙女峠へ登りませう、などといろく山水の風景の勝れてゐることを話されたのですが、當時はそれほど氣にも止らなかつたのです。

ところがその年の梅雨晴れ頃からでした。瑞枝さんからはしきりと山上の樂園を説き、是非共登函せよと度々の來状、養家は旅館業を營んで居られるのだから、貴女の様な人の一人や二人、手傳ひがてら来てらしたつて何でもありやしないのよ、とのことでした。

さア、私はもう／＼たまりません。毎日々々お戻縫も手につかず、母に願ひまして、魂は雲のあなたへ飛んでゐました。

その内瑞枝さんの養姉様からもお手紙があつたりしましたので、やつと許されることくなつた、まあそのうれしさ!!! 空想は空想を生み、單身初旅の心細さも何とも思はず、いよいよ七月のある朝、朝涼の中汽車に乗りこみ、かねて

敷<sup>をし</sup>へられた通り園府津からは電車で、湯本の終點に着いたのは十時半頃。そこには迎ひの者が出て居りました。

石<sup>いし</sup>に激して奔馬<sup>ほんば</sup>の如く、白泡たぎる早川<sup>はやかわ</sup>の水勢、高い山、みどりの木立<sup>こだち</sup>まるで別天地でござります。

ぼんやり口開いて見惚れてますのを、うながされて丁度日盛りの、蟬<sup>せみ</sup>の音しきる山路<sup>やまぢ</sup>を登り始めました。

これが名にしおふ昔の東海道<sup>とうかいどう</sup>なんてござります。茂りに茂る夏草<sup>なつぐさ</sup>は左右から道幅<sup>ひば</sup>をせばめてゐまして、おまけにごろごろと大きな丸石<sup>まるいし</sup>が敷きつめてあるから、一層のぼりにくい、でも此石<sup>このいし</sup>がなければ雨<sup>あめ</sup>の日など、滑つて滑つて仕様<sup>しじよう</sup>がないんですつて。するし、チヨロ〜チヨロ! とやたらに行途<sup>ゆくて</sup>を過る蛇<sup>へび</sup>やとかげの、背<sup>せ</sup>の色<sup>いろ</sup>が毒々<sup>どくどく</sup>しく日光に輝いてゐる。木々の梢<sup>こころえ</sup>には大嫌ひな毛蟲<sup>りんね</sup>がウヨ〜、ボタリ、ボタリ、と折々洋傘<sup>わらべさ</sup>の上<sup>うへ</sup>にもおちる。掛茶屋<sup>かけぢや</sup>で休む度<sup>たび</sup>、

金太郎の様に熱し切つた頬を、冷たい山清水に洗ふ心地よさ。馬車も自動車も通する七湯の温泉場を控へた新道の方とちがつて、舊道は静です。駕籠の掛聲、エツシヨ、ヘツチヨ、息杖の音コツン、コツン、それと折々、ボカリ、ボカ、お米の俵などつけた駄馬も登つて来ます。馬といへば可笑しいんですよ。人夫が荷物を運びますのに、やせうまくと云ひますから、私最初はほんとの瘦馬を引張つて来るんだと思つてましたらね、それは『背負はしご』のことなんでした。

脚下に幽かな谷川の流れの響き!! それとも草すれか、さわ／＼さわ、眠りを誘ふやうな微妙なさゝやきがきこえて来ます。左手の山の峠には青葉がくれに、雪の如き素布一條!! あれ、老鶯が! ホウ、ホケキヨ。

箱根の山は、天下の嶮、函谷關もものならず、……萬丈の山、千尋の溪……

……

唱つて元氣でもつけやうと思へば、どうして、どうして、一步に一句、一句

に一步、とぎれて、あえいで……あゝ胸が苦しい。

星ともまがふ山百合や繁茂した灌木や、黃に紫に紅に鶴に名も知らぬさまざまな花が、薬研形に崩れ込んだ崖路の兩側から、おつかぶさるやうに咲いてゐます。密生した箱根竹にさら／＼と風が鳴る。

須雲川に添ふた『烟宿』と云ふ一部落も過ぎ、やう／＼櫻の木茶屋へ着いた頃は、目も眩むばかり、しどの熱汗を絞つて、足元がふら／＼いたします。里程にすれば僅二里半と云ふんですが、名にしおふ函嶺の急坂、山路なれぬ身には随分こたへます。でも健脚だつてみんなに賞められました。

これよりあへぎ／＼城不見坂い嶮峻を越ゆれば……あとはもう一息、直さに權現の一の鳥居、はるかに湛えた湖水が目の前にひらけます。かうなると汗も一時に治まつて、思はず浴衣の袖を搔き合すほどの涼しさ。氣の故ばかりで

はありません。左に折れて森々と天を摩する老杉の鬱蒼たる下道、湖畔は底冷がいたします。

湖沿に神々しい離宮の前に出で、一本松の寂しく殘る關所の跡を通つていよ／＼箱根宿に入る。昔この山路の榮えた頃は……刀さしたり合羽を着たり、三度笠かぶつた旅人の上下引きも切らす、金紋先箱、烏毛片鎌ふりたて、お大名列の通つた頃は……とそぞろに感慨の深い廢驛です。今は避暑客のために可なり賑はされてゐますけれど。

此家がいよいよと思ふと、足がすくんで門内へ入るのがためられました。何だか大きな大きな苔葺屋根の家、黒光りした廣い玄關の板の間。そこから瑞枝さんが走り出して來ました。はる／＼と來ぬるものかな、今こゝでは瑞枝さんより外、私のたよりにする人はないのだと思ふと、不覺の涙がホロリとおちた。でも、それは杞憂に終りました。紹介された義姉様御夫婦、御兩人ともま

だ書生つ氣が失せ切らぬといやうな、若々しい快活な方たちでした。家の中は薄暗くて古風な作りの、お勝手には爐が切つてあつて、太い自在竹に化けさうな大罐子がかゝつてゐます。流し元の井戸からは絶えず水がしやら／＼とあふれ出てゐました。

裏の縁へ出ますと湖水は一瞬の中!!

その夜は過度の興奮や疲勞や、かけひを走る水の音やが耳についてどうしても眠られませんので、よどほし兩人でべちや／＼しやべり通してまして、翌朝瑞枝さんがひざく叱られてゐました。

さて其後は……日増しにお客も立て込む時期でしたので、瑞枝さんは何かといそがしく、夜分にでもならなければ、傍へよりつくひまもございません。御飯頂くつたつても、お風呂へ入るつたつても一人ばつち。それにかうした激しい活動裡にあつては、絶えず何かにおひたてられる様な氣がして、つく／＼

心細さと手持沙汰を感せずには居られませんでした。せめて赤ちゃんおんぶでもしやうすれば、人みしりをする子で手におへません。山上の壯麗な夕景は忘れられぬ印象の一つです。いつも湖ぶちの石崖の上に立つて恍惚と見入つてゐました。憧れてゐた時鳥の聲も飽きるほどきゝました。白晝でもよく啼きますの。最初の中はいくら敷へられても、あれがさうとはどうしても信じられませんでした。何ついへばまあ鶯に似て……わりに可愛らしい花やかな聲なんですもの。

初對面から義姉さま御夫婦は、なつかしくつて仕方ありませんでした。生れて始めて呼んでみる……兄さまだの姉さまだのつて口にする度、不思議なやうな面はゆいやうなうれしい感じに耳がほてつて……。

その中にいろ／＼珍しいことを覚えました。丁度その年は舊華族方が幾組か御逗留中でね、かういふ方面にあんまり接したことのない私は、その人たち

の言語、動作、風俗、習慣、たゞぐ異様でございました。二位様とか從五位様とか、御後室様、おたあ様（母君）などいふ名稱、御意遊ばすとか御寝なるとかいふ優美な言葉。立てば家來が後につき、坐れば前にかしこまる。一寸お庭へお下り遊ばすにも一人の老女にお手をとられて、侍女は後から洋傘さしかけるとふ、お人形様のやうなお姫様もございました。華族様の子といふものはどれだけ偉いのだらう、とつくづく考へることもありまして、つまりまあ、あゝいふ立派な家へ生れて來るだけの徳があるのだから、その點をでも尊敬するのだと、ひとりこじつけておきました。

水の美しい故か、蚊は一疋も居りません。夏の夜、蚊帳なしで寝られるだけも嬉しうござんしたが、盜人の憂はちつともないんださうで、氣をゆるしてつい窓の戸など閉め忘れて寝やうものなら、暁の冷氣ひやぐと身に沁みてたへられませぬ。倒さ富士を見るとして毎朝早起しましたが、容易にみられませんの。

けど富士は寫らなくとも、四邊の森や山や家はみなクツキリと影をひたして、まるで薄紫の練絹を引きのべたやうな、朝の湖上の靜けさ美しさ！それはもう蜘蛛一つおちた波紋だつて、三間位にひろがります。

お裏の離座敷にあらつしやる二十ばかりの美しい若様は、毎朝の御運動にきつとボートをお漕ぎになりました。そのお歸りを見張つてゐるのは私の役で、あの邊までお見えになつたら、しらせて頂戴、お食事の仕度をしなければならないのだから、と瑞枝さんに頼まれてるので、双眼鏡手に御ゆくゑばかり氣にしてゐました。それが朝々の樂しみの一つでもありました。旭をいっぱいに浴びて、オールの先に勇しく黄金の手を散らしなさることもあれば、ある朝は深いく間に包まれてしまつて、一間先も見えぬこともある。

隣家はホテルで、道にも西洋人の往來が多ござります。花の様な金髪少女、プロンドの美少年。薇薔薇色の頬、高鼻、白衣、黒衣、中には夕方なんぞ背高

いからだに日本の浴衣をツンツルテンに着て、紅い帶など猫ぢやらしに結んで團扇片手に嘻々として歩く、若い淑女達もありました。夜はお闇所の邊によく螢が飛ぶ。

少し馴れてから私は瑞枝さんにつれられて、今一つのお離家の方へまゐりました。こゝには某伯爵の若様が、何か御研究のため閉ぢこもつて居られたのでございます。

毎朝牛乳をわかさせ過ぎて灰神樂をあげたり、パンを真黒焼に焦しちまつて、仕方がないからナイフでごりごり削つたり、岡持に入れて運ぶお吸物みんなふりこぼして丁つたりするけれど、何をしたつてお叱言などはございません。お給仕に坐つてましても、だまつてお出し遊ばす時が御飯、おしまひに始めて、「茶ツ」と有仰るきり! 私の方から申します言葉は朝晩の御挨拶と、お風呂にお召し遊ばせぐらゐなもので、お暑いともお寒いとも口に出しては云ふとな

く、また毎日定まつた御用の外には、滅多にベルをお鳴らしなさるやうな事件もないと。なんにも有仰らないだけに私はこの若様が、恐くて仕様がありませんでした。氣骨の折れるつてないんですもの。なりばかり大きくなつて、何しろ始めて他人の中へはひつて一人前の扱ひを受るのですし、それに日に増し朝夕のお勝手元など、まるで戦場のやうな混雜なんでせう、まごくと事毎に、叱り飛ばされてるやうで面食ひましたわ。

で、まあ、ほんとに、ほんとに何といふ幼らしさだつたのでせう?! まだ前途は長いのに、とても夏期中辛抱が出来さうにございません。が、歸りたいなんていへば引きとめられるにきまつてゐますし、……とう／＼たまらなくなつたので、打電するやうに自宅へ云つてやりましたの。(急用が出来た直ぐ歸れ)との。

その電報受け取つた時には、かねて悟したる事ながらギツクリとして、あ、

淺ましい、こんなうそを、と思ふと封を切る勇氣もなくて、そのまゝ泣き伏して了ひました。

どうしたの、と姉さまは驚かれ、電報をみて尙更びつくり、ではかうしては居られますまい、おそらくない中に些とも早く、など、大騒ぎして下さるので、いよくすまなくつてすまなくつて、泣けて／＼堪りませんでした。泣きながら姉さまに帶を結んで頂きました。そしてみんなに慰められたり、はげまされたり……かうして私は半ば後髪引かるゝやうな、半ばのがれ出づるやうな心地で下山いたしました。

そんなに我家の戀しかつたのも、歸るとそのまゝケロリと忘れられて、今度はあの山水のなつかしさが、朝な夕なに偲ばれてなりませむ。それに瑞枝さんからは、御用がすんだら是非今一度來るやうに。もしさうでないのなら、貴女がいやで歸宅つたのだと恨みますよ、などと圖星をさゝれるので、再び遊心は

むらぐと湧きました。

で、再び舞ひもどつたのでございますが、今度はあらまし様子も知れて居りますし、女中達ばかりでなく親戚の娘さんとかが、二人ばかり手傳ひに来て居られたので、大變心強うございました。丁度いゝお仲間なんですもの、忽ち仲よしの三角同盟が成立いたしましてね。

もう大喜びなんでしたの、かうなると一同いどみ心でね、それや大きわざなんでございましたわ。氣丈者の律ちゃんは私と同年でしたけれど、幼稚作りで、まだ腰揚げのある着物を着て、紺襦子の六寸幅帶のよく似合ふ、赤い髪を大きな束髪にして、いつも力んだ様に顔を桃色に匂はせてゐるひとでした。

女學校出身の明ちゃんは、色白で一番の美人でした。思ふさま廻をふくらませて、秋草模様のお納戸地の浴衣、ふくよかな肩のあたりの曲線の豊かな、年は一つ上の十八でしたが、すつと姉さんぶつてゐました。私はひとりではまだ

束髪そくはつがよく結むすへないので、瑞枝さんや明ちゃんに手傳てつたって貰もらつたり、でなければ桃割もいかわにばかり結あげてゐました。

今度私の受持うけいりつたのは一號の離座敷はなわで、某子爵ぼうしげきの世嗣主從せしゆじゅ。

殿様とのさまとこそお呼び申ましてゐましたれ、誠まことにお氣輕きがるな平民的へいみんてきな方かたで、何なんの心づこころかひもございませなんだが、たゞお千代おちよ、お千代おちよ、と呼捨よびきにされるのが情なまけなく、最初の中はどうしても御返辭ごへんじが咽のどにつまつて出でませんでした。

何なにを言いはれても直ただき真紅まろかになつてしまふ、この新參しんさんのお小間使こまさんをとらへて、殿様とのさまは、十ばかりのしやれや警句けいくを代かるゝ連發れんぱつして、ひとり悦えうに入いつてゐらつしやる。私はまた炭かたをつぐことが下手へたなので、いつも長火鉢ながひばちやお貰盆たばこぼんの火ひを眞黒まっくろにしてしまふこと、それとお風呂ふろのお加減かげんをみるのが一番の苦勞くらうでした。

その頃ころはまだ電燈でんとうの設備せつびがありませんでしたので、夜は洋燈らんとう、有明は優雅ゆうがな

朱塗の行燈でした。露けき湖畔には蛾や蝶やいろんな夏蟲が多くつて、宵の燈影を慕ふてお離れのお障子へ、集るのには閉口しました。毎朝お掃除の時、拂ひ落すのが大變です、それやびつくりするほどたかつてゐるのですもの。

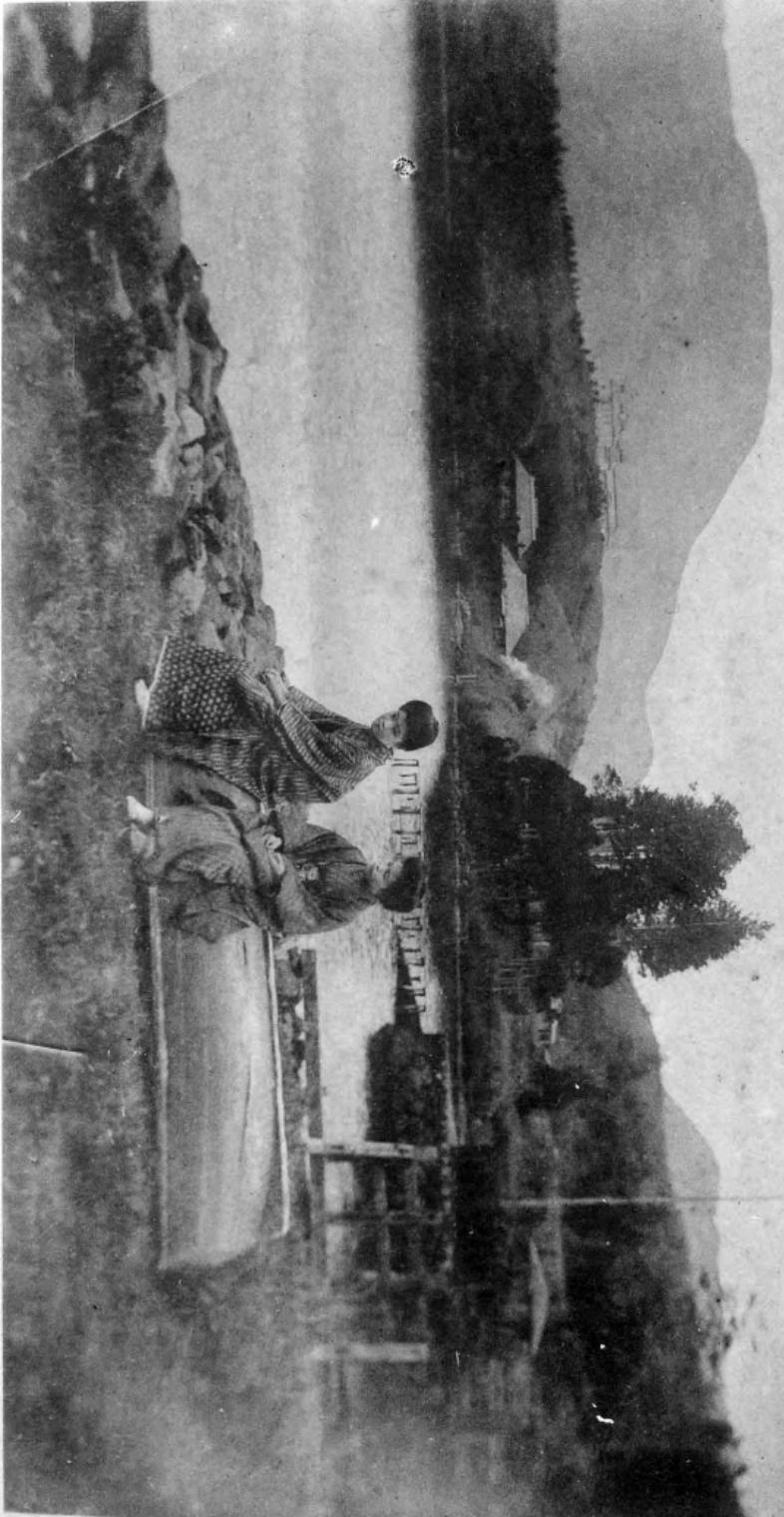
また崇高な月夜の美觀……などと人に使はるゝ身の悲しさは、うつかり湖畔詩人を氣取つてゐるわけにはゆきませんでしたけれど。

舊暦正月の夜には、例年のならばしださうで、流燈會がございました。五色の紙で張つた燈籠に火をともして、幾百個となく湖水へ流しますの、その美しいこと、美しいこと。

サイダだとだまして御飯炊きの婆やに、番茶の出枯しを飲ましたり、もなかの中へ餡の代りに唐辛子味噌を入れて食べさせたり、爐端で夢中で話しこんでもつしやる兄さまの兵古帶に、紙屑籠結はひつける役瑞枝さんから仰せつかつたり、隨分いたづらもやりましたのよ。

ある日律ちゃんと二人、湖水へ洗濯物をそゝぎに行きました。さうしていつもの棧橋につないであつたポートの中へ這入つて、ゆすぶつて喜んでゐたんですよ。するとどうしたはずみか、縄がとけて、風のまにく浮舟の……あれあれと云ふ間に二三間……律ちゃんは小叫びしながら、ざんぶと水へ飛び入りました。たまりかねた私もびっくりしてそれにつゝきました。水深は胸の上ぐらゐまでございましたらう。湖水の底は透き通つて淺く見えますけれど、割合にふかいんでございますの。夢中に岸へ這ひ上つて、したゝる零拂ひもあへず、一目散に馳せかへりましたが、ほんとにあの時は青くなつて了ひました。

またある夜、夜具部屋へ何か取りに行くと、勝手知つたる身の燈火も持たず、心覚えのあたりを手探りますと、それより先に瑞枝さんが同じ物を出しに来てまして、双方暗がりでふれ合つたからまりません。キヤツと云ふなり二人とも、飛び出してしまひました。後では大笑ひでしたけれど、私わたし



水のかはをその化けたのだらうと思つて。  
 新しい『お着様』のあるのは何より厭で、支關の近くに居合せれば、スタコ  
 ラ逃げ出して了ひました。別館の方にゐた學生達は、私が何をきかれても『存  
 じませんわ、私、知りませんの』でもちきりだものですから、ミス、アイドン  
 ドノーなんていふ名をつけました。

夜、四人が一室に集ると、直きにコムバがはじまりますしね、喧嘩もする、  
 怒りもする。泣くやらはやすやら笑ふやら。墓場の様に陰氣な家でろくに大き  
 な笑ひ聲も立てずには育つた私が、こんな複雑な賑やかなグループの中に入つた  
 のは、丁度皆さんが寄宿舎生活でもなさると、同じ様な氣がしてゐたんです  
 よ。面白いこともあれば口惜しいこと、辛いことの數々や、耻かしい目にも逢  
 ひました。どれほど修養になつたか知れませんの、今でも感謝してゐます。世  
 間に對して眼が開きかゝつてきました。

歸る前にはお別れに、みんなに舟遊びをいたしました。姥子から大地獄また蘆の湯の方へもつれられて行つたり、始めて温泉といふものに入浴つたので、私はどんなによろこんだでせう！さうしていよ／＼九月初旬思ひ出多きこの山中に別れをつけました、再會を約しつゝ。

見返ると、いつまでも／＼湖畔に立つて見送る、殘された瑞枝さんの姿が寂しさうでした。瑞枝さんといへば瑞枝さんは私の唯一の保護者でしたし、他事なく甘へもし、なれまつはりもし、先方でも千代さん／＼と可愛がつてくれましたが、でもどうしても兩人の氣性は調和されないといふことを、隕氣ながら悟りました。

私はさびしうございましたわ、その後手紙かくたびに、並べたてる熱誠な言葉がもう今までのやうに眞情からではなく、それをさも眞らしく……頭脳の何處かでは、うそだ、うそだ、と叫んで居ります。何んかすまなくつてすまな

くつて仕様がありませんでしたけれど……ついにはそれも平氣になつて、私は二重の人格をつかふやうになりました。

## □ 肩揚に別るゝ悲哀 □

その他には別に取立て、申すほどの變つた事件もございませんでしたが……否、さうく、紋羽二重の羽織の出來たのはあの年の歳晚でしたつけ。些細なことながら、私にとつては、生れてはじめて紋のついたものに手を通すといふことが、どれほど大きなよろこびであつたでせう。母に強いられて翌年の春からは、肩揚をおとしました。

母は眺めて笑みたまふ  
肩を押へて我はすねぬ。

そと打見やる姿見には

肩幅ひろき大人ぶり。  
大人ぶり。

乙女老いしを祝ぎ給ひ

ふさひぬと宣る口惜しさよ。

熱き涙をかみしめぬ

誰に語らむおもひかは。

ブライド多き十八の

幸なる春の逝くを悲しむ。

こんなこと書いて上げたらば、譜をつけて下すつた詩人もございました。若々しい悲哀！ 甘い煩悶！ などと許して。

夢と送りし一とせは

また遇ふ春となりにけり

かつて落花のおばしまに

耻かしかりし對ひ居や

我が身處女の名をもてば

ほてる和頬のまぶしくて

顔も得上げず別れしが

多感な子が逝く春の哀傷をつくべと覺え初め、髪のほつれ毛咬み切るやうになつたのも、その頃からでござります。スキートホームを書いたのも、その頃でございました。

櫻は散つて、薔薇が匂ふて、瑞々しい新樹の葉面に金緑色の焰のちらりと燃ゆるやうな五月中旬となりました。ある日何心なく受け取つた一通は、當時誌上に爛漫たる彩筆をふるひ給ふて、名聲湧くが如かりし花散る里の君、おまぎれもないそい君からの、求交状でございました。まあ!!と思はず小叫

びしてうれしさに胸を抱きました。

直ぐに御返事を出しました。折り返してまた御文がございました。此方からもまた!!

けれども、とてもく紙の上の記號なんかでは満足できぬと仰有つて……  
あ、忘れませむ、君と始めて相見し彼の日よ!!

私はすていしょんまでお迎ひにまゐりました、ほんやりとプラットホームの柱に凭つて居りました。憂く、うれしく……さまぐなおもひを兩袖に重ねて

……かき亂された頭の中はさながら走馬燈のめぐるがごとく……。

程なく汽車は黒煙を吐いて進んでまゐりました。求むる君やいづくにと、思はず列車につれて二歩三歩。

「あなた、内藤さんではゐらつしやいませんか」先方から馳せよられたのは、一十ばかりの淑女!! 空氣草履の音かろく。

「あの、綾子様」と云つたきり、おん手に絶つてしまひました。が、まあ、柔らかな温かい……あまりに自分との懸隔が耻かしく、思はず手を離しました。その頃流行りはじめたルイザつていふ、頭の高い束髪に結げられて、藤納戸色のセルの單衣、青磯色コントラスト織の丸帯、御胸のあたりには細いく、プラチラの首掛けがさゝゆれて、眉の濃い、御眼の涼やかなお鼻の高い、まあ、わたしはまだこんなお綺麗な方としみぐお口などきいたことはありませんので、何だか勿體ない様な氣が致しました。

ともかくもと、電車の一隅に席をしめる。私はやつぱり島田に結つて、一張羅の變り裾の袷に、紫襦子と緋友禪縮緬と腹合せの帶、胸高に締めて居りました。

初夏の日光は強過ぎて、もう額に汗のにじみますのを、綾さまはパチンと白茶に水色で廣くへりとつたパラソルあけて、入れて下さいました。甘い／＼ほ

のかな香水の香が……。

「ゆけどゆけど、ゆけど松原小松原……つてきつとあの歌詠んだ人は、獨り  
ばつちで淋しかつたんでせうね。私はこの長い砂路もほんの一丁か二丁のやう  
に思はれて……。」

チラリと細い金歯の光る、白い細面を傾けて、のぞき込むやうになさいまし  
た。つねには何の心もなう、踏みつけて通る道のべの名なし小花すら、あれ可  
愛いのね、なんて綾さまのおん眼にとまつたのは、私も急に好きになつた。

ねえ、綾さま、ことしもまた演なんどうの花咲く頃がまゐりましたのよ。さ

わくと風に浪打つ後庭のクローバー!! 丁度白い花が眞盛りなやはらかな草

のしとねに腰投げかけて、胸そゝられる甘い匂ひを呼吸しながら、何をか語り、  
何をか伺ひましたらう?、私は唯もう恍惚と魅せられてしまつて……夢の様

な御別れでございましたわ。御めもじ叶ひしよろこばしさのみが胸いつぱい、

何から申し上げてよろしいやら、いつもの癖とは云ひながら、思ふ百分の一もお話は出来なくなつて。

慎しやかな中にも品位といひ、御服装のお好みといひ、言語、應對、何一つとして……と母も床しがつて後々まで、御贈申し出して居りましつけ。お土産に頂いた品をあけてみたらば、かねぐ欲しい／＼と思つてた繊細なレターべーべーの函入と、夏の涼しさうな肉色と水色のリボンでした。

ほんたうに綾さまばかりは、おん目にかゝつていよくお墓はしさがましました。其後の御手紙にも、いつも優しく面白いことばかり。

## □ 秋 扇 怨 □

言ひ忘れましたが私には綾さまより以前、うも一人立派なお友達がございました。矢張り同じ様な事情から、お知己になりましたので。

すらりと色白の瘦ぎすな、お名は桂子さま、お年もすつとお姉様でしたし、見識もあり眞面目なお優しい、なか／＼しつかりした方でしたから、かへつて私なんかには煙つたくつて、たわいもなく瑞枝さんに甘へるやうなわけには行きませんでした。學校は華奢できこえた虎の門の御出身ださうでしたけれど、そんな氣風は露ほどもなくて、物静かに慎しやかな、お髪などもぢみな日本風、細い指をきちんとお膝に重ねて、姿勢正しくお話遊ばします。はしたない高笑ひや居住ひなんぞ崩されたのは、見た事もありません。國文學の研究とやらを熱心にしてゐらつしやいまして、御手跡や御文章の美しいことゝ云つたら、そのまゝお手本にしたいやう、やつぱり世を早うなさる前兆か、お眉でも生際でもお肩でもいつたいの輪廓の細々としてたよりなく、物寂しい影の漂ふ方でしたが、そのくせ何處か力強い……私は丁度目に見えぬ蜘蛛の圍で、十重二十重にいましめられる様な壓迫を感じました。いろ／＼私のことについては、御深

切に心配もして下すつたのですけれど。

で、何も綾さまに見代へたつていふわけぢやさら／＼ございませんけれど、ついねえ、御疎遠になつて了ひましたの。が、彼君よりの御文は絶ませんでし  
た。またかと氣怯れがして、手にとるのもためらはれるほど。例のいみじき御  
筆使ひにて、御怨じやら御詫言やら、それもあからさまには有仰らぬけれど、  
それがあもう大變なんでござります。私は息をひそめてしまつて……だつて  
何だか恐かつたんですもの。御病重つて御入院遊ばしたと承つても、御見舞狀  
も差上げなかつたので……その内に、その内に、果敢なくなつておしまひな  
すつたんですもの。きつと／＼臨終のきはまで、どんなに恨んでゐらしたらう  
と思ひますと、あゝすまなかつた！　と今でも心を責められますが、この様な  
のはかうして片手の指に折りますばかり。その他求交家連ときたら下篇一律、  
その文殻は『月並集』と名づけて一絡げにしては、臺所の揚板の下の、古い大

きな支那かばんの中へ投り込みく、はてばおしつめてもおしつめても一ぱい  
あふれる程たまりました。そんなのに限つてお定りで、菜だのリボンだの押花  
だのが、開封るとはらりとこばれるんですよ、ほーー。

たまにこれならと思つたのでも、一二度手紙を往復しますと、もう愛想がつ  
きちまつて、何しろ選り好みがむづかしうござんしたから、お友達はちつとも  
増えませんでした。

あら、お話が大變前後しちまいましたが、瑞枝さんはその年の春から出京し  
て、ある技藝學校に入學したのでござります。お義姉様たちは御不服であつた  
さうで、並通の遊學とは事變り、半苦學の状態だとやら。その話をきいた時に  
は赫となるほど羨しうございましたけれど、でもおとなしく断念めて、そして  
自分と二人分、せめては瑞枝さんを成功させて上げたいものと、ほんとに心底  
から思ひました。電車代ぐらゐどうかして助けてますわ、と口に出してこそ云

ひませんでしたが、そのつもりでしてね。思へばあの頃は自他の區別もよくつかなかつたほど、單純と云へば單純、美點と云へば美點……ほゝ、こんのが得てお先になんか使はれやすいんですけれどね。それや人に何とか云はれでもしやうものなら、身に代へてかばつたり、躍起となつて辯解もしたり……上京の度毎には連れ立つて日比谷公園をぶらついたり、活動寫眞でもみたり三越の食堂でお壽司食べたり、半襟でもお揃ひにしたりして、うれしがつて居りました。小柄の女なれば若々しくて、紫紺の袴もよく似合ひ、僅の内にすつかり都會馴れ、女學生化した風姿みては、軽い妬みを覚え、あまり快くもありませんでしたけれど。

その内にまた暑い／＼七月が來ました。

待ち焦れた瑞枝さんの東都よりの歸省は二十日過ぎ、約の如く立ち寄りまして、連れ立つことなりました、樂しかつた湖畔生活を今年も再びくり返さん

ため……。

思ひがけなく國府津のすていしよんで、綾さま方の御一行とおち合ひました。まあ小田原へお避暑遊ばす筈とはかねて承つて居ましたものゝ、こんな場所で……つきせぬ御縁ね、と手を執つて喜び合ひました。さうして小田原までは同じ電車で……。

お妹様は私と同い年だと仰いました。丈なす黒髪をお下髪に瀟洒なモスリンの單衣、眞紅なバラソル持つて……。ふつくりした頤のあたりのたまらない程可愛く、大きな黒味勝の切長のおん眼に、愛嬌の露したゝらむばかり。いづれあやめと引きぞわづらふ、美しい御姉妹の御物ごしは、今でも脳裡に残つて居ります。

函嶺の山路は數日來の大雨に、大變な出水でございました。ザブ／＼ボチャ／＼兩人は面白半分に下駄がけでそれを登つたのでござります。さて、動けな

いほど草臥れてしまつて、その夜は置きどころもない位、足が火熱つて、困りました。大きくなりましたねつて、義兄様たちには頭を撫でられた。

今年は律ちゃんや明さんでなく親戚から来て居られたのは、もつと大きい姉様でした。當分の内はその人たちと、お裁縫のお手傳ひに熱心でした。山のやうに積み上げた浴衣地を、一同と張り合つて傍目もふらず、毎日ぐんぐん仕立てあげて行くのも、樂しみの中でした。たゞその姉さま……芳子さんといひました……とちつとも氣が合はない？ より打解けにくく……そのくせ厭に丁寧な、屹度小妬さんてこんなものだらうと思はれましたわ。それも瑞枝さんと一緒にだつたうちはまだいゝのですけれど、いよいよ活動の時期に入つたので、瑞枝さんは別館の方へ、私は母家に残されたのが、不平でなりませんでしたけれども……けれども。

## 口 泉のローマンス 口

まもなく自分の受持になつてゐらしたのは、中山さんていふ帝大法科の生徒でした。最初の二三日はお互に何の氣もなく過ぎましたが、いつか心づかれたものとみえ、何かにつけては、貴女は内藤さんでせうくと云はれました。嘘よくと一生懸命いひわけしてましたが、ある時そつと引裂いたノートの紙片を渡されたので、何心なく開いてみると『あゝ箱根は一種の神祕的なところ。静かな晩、杉並木から湖にうつる月を見て、關所のあとをそぞろ歩きしたらば、知らず知らず涙がこぼれました。

また天も地も薄すりした夜、靄立てこめて夢のやうな湖上から、水をかくオールの音と高らかな美しい詩吟の聲をきいた時、ぞつと戀風が身に沁み渡つて

何のこと、曾て雑誌に出した自分の作中の一節ではございませんか。まあ、と颯と耻らひが双頬にのぼつた。この文のゆかしさにあこがれて、僕は箱根に來たんです、つて有仰いました。云はれて嬉しくない事はございませんでした。それに文藝には淺からぬ趣味をおもちのやうに見受けられましたので、打解けていろんなお話をするとやうになつたのは、中山さんとばかりでした。

と、女同士つてうるさいもので、矢鱈と立ちざゝなんか致されましたつけ。きかれたつてわるいやうなこと、話しても居りませんけれど。……それにさまぐな尾ひれをつけて云ひふらされる。人の口には戸の立てやうもございません。あんまりな、露覺えもないことをと、口惜しさに我知らず唇咬みしめたのも、幾度か知れません。かうなると瑞枝さんまでが、皮肉な笑貌を向けるんですもの。

もう／＼中山さんのお室へは足ぶみもしまいなんと考へて、縁の安樂椅子に

凭れてひとり泣いてると、いつのまにか傍へ来て、お千代さんどうしたんです、え、え、と問ひつめられても、何でもないんですの、つい、あの、ホームシックなの、とつい泣き笑ひをして仕舞ひます。

それや他の女中達より、この詩的高級一時的面白半分の女中様に對して、敬意を表して下すつたのは事實でしたけれど……私は……あるひは戀の萌芽であつたかも知れません、いひわけ澤山の。はたから何とか云はれゝば云はれる程、好きで／＼たまらなくなりました。えゝ、おとなしい人なつっこい方でね、そのくせ背の高い男らしい凜々しい申分のない風采をそなへて被居る美丈夫なので、一層取沙汰がやかましかつたのでござります。

さうした中に突然中山さんは、御歸京なさらねばならないことが出来ました、急電によつて。

私は胸つぶれてひたかくれにかくれてしまひ、お別れの言葉も交しませんで

したが、定めし芳子さんは凱歌を奏されたことだらうと思ひます。瑞枝さんの微笑も冷たかつた。

口重な私のその頃は何といちめられても、云ひ返すべき術一つ知らなかつたんですから……（たまに警句の一つも吐ければ大喜びで、それが諸方へ利用してみたくつて仕方がなかつた）まして多勢に無勢でせう。仕方なく主なき室に残されたうづ高き金文字の洋書どもをみては、何うしても今一度歸つて入來るに違ひないと、ひとり慰めて居りました。

今から思へば可笑しうござんすけれど、ほゝ。芳子さんと瑞枝さんの權力争ひ!! それや髪の毛が蛇になつて、食ひ合ひもしかねまい時がございましてよ。颯と一閃瑞枝さんのお眼から白いサーチライトが閃くと、面積の莫大な芳子さんの双頬は、天津桃のやうな紅色を呈するんです。三人は同室に起臥してゐましたので、私は眞中にはさまつて、いつもどんなに困りましたらう。女中

達も自然兩派にわかれてましてね。

女中達といへば此家の家風か、いづれも朴訥な山出しや年齢の行かぬおばこ娘ばかりで、黒襦子の引掛帶や鬚長の拔衣紋!! 所謂姐さん風の氣の利いた女など、薬にしたくもありませんでした。從つて頓馬なこと、世話の焼けることもおびたらしいもので、でも各々に間がな隙がな、盜むやうに鏡を忍ばして、お化粧にばかりは熱心でしたけれど、ほゝ、さういふ自分もそのお仲間だけれど、粉袋ン中へはまつた鼠といはうか、油繪具のやうといはうか、串柿の難船とも冬瓜のお化ともたとへやうがない。見やう見眞似で御飯炊きの肥満女まで熱くるしく汗の珠のいつぱい噴き出したところは、何のことはない、まるで荒熊の丸揚みたい!! あら、本統なんですよ、ほゝゝゝ。

え、髪ですか、私は思ひきり根上りに前髪も何もおしつぶれるほど、大きく

巻いた無造作な束髪にしてましたが、惜しいくとみんなにすしめられで、時々桃割にも結ひました。瑞枝さんはよくローマにしたが、目立つので義姉たちの御機嫌がわるうございました。芳子さんは珍型でね、それや失笑されにはあられませんでしたよ。わけても後は坊主襟が露出して、ギリギリ捻った二百三高地式のお齧の周圍に、壘壁のやうに櫛を四枚もお挿しなすつたところは、あまり好い恰好やありませんでしたね、正直な話。

すつばぬくとか、モデルに使はれるとかつて、ひどく私や瑞枝さんを蛇蝎視なさる方もございました、かと思へば門前の行き通りにも、姿やあると物色する好奇な他家の客人たちもありましてね、氣が引けましたから私もつとめて外出しないやうにし、同じ家のお客様ながら別館や離れの方にあらつしやる方たちとは、顔合せるのも此方から避ける位にしてました。

いくら可笑しいことがあつても面白いことがあつても、中傷や告口がおそろ

しいので、芳子さんの前ではうつかり瑞枝さんと話も出来ず、三すくみの形で、もう前年のやうに邪氣のない失策談や、氣焰の吐つくらやらコムバやらに笑ひ興することもありませんでした。ですがまたあのころほど食慾の盛んだった時代もございませんのね。それやア美味も不味もありやしない、三度々々の御飯は夢中にかつこんでしまひます。そして寝しなに餅菓子の十箇位ペロリ平げて平氣でしたからね。

時はこれ明治四十三年、降りつゝく長雨に各地の出水、中にも函嶺一山の被害は……早川の岸に沿ふた温泉場など、崖くづれ、山つなみ、家屋の流失、人畜の死傷、歡樂の仙境一朝にして修羅の巷の惨状をていしたことがございましたでせう! 丁度あの時なんでおざいます。山上にち潭沈たる不安な日がつゝきまして、日にちまいにち、雨に暮れ、雨に明けゆく湖水の眺め! 水量は

五寸増し、三寸まし、二尺、三尺ついに母家の庭一面汎濫し、裏のお離家な

どまるで龍宮城のやうに見えました。

つくづくと日輪の光りが懸しく、ノアの洪水も思はれて、このまゝ人類が亡びて了ふのであるまいか、今一度母さんに逢ひたい!! とそつと鶴沼の方を望んで、夕べの縁に涙したこともござります。

一時は通信も全く不通となり、小田原方面よりの人馬の交通は杜絶しまして、まるで山流しにあつたやうなものでした。

滞在中の避暑客たちも今更歸るにも歸られず、無聊に苦しみ、そのくせピンポンも玉突も遊び事は手につきませぬ。

けれど直接の責任をもたない身には、恐怖と好奇心と相半して、どうなる事とか面白く、いつそ非常の早鐘でもつゝやうなことがおこればよいが、などと心ひそかに思つてもみたりしました。何より心細かつたのは町内中が食糧の缺乏をつけかゝつたことで、飼養の家鴨は一日／＼數が減りました。申すまでも

なく氣候は不順で、チルに綿入羽織重ねても、顛へるほど寒かつたのです。でも、蘆の湖溢出との警報は幾度か傳へられただけで、先は事なくすみました。水に埋まつた地面もおひく現はれてくる。庭石には青苔が一杯ついて、美しく咲きほこつてゐたひなげしや葵や石竹や、ダリヤもコスモスもべろぐと腐つたやうになり、芥交りの深泥がピカピカと上光りして、やたらと滑るのです。裏の廣場には雑草が生々と生ひ繁つた。

もう大丈夫となると立つ人はバタバタ立つて丁ひ、居残つたものは云ひ合せたやうに追試験や文官試験を眼前に控えて、ギウト云つてゐる大學生と新學士連ばかり。ほんとうに寂しい盛夏でございました。たまに下から登つてくる客でもあると、なつかしくつてなりませんでした。

こんな騒ぎにまぎれて中山さんることは………忘れたのぢやございませんけれど、所詮もうお歸りなさらないものと、あきらめて丁つてたのでございま

ところがある日、もう八月の廿四五日頃でしたらう、思ひがけない君の姿か  
 ……三島街道の方から上つたつて、袖も袴も朝露にひた濡れて。……さう  
 して清香咽ぶばかりな山百合の大輪二三枝を、だまつて渡して下さいました。  
 私の胸のわだかまりは温かい涙となつて、一時に溶けて流れました。もうく  
 心残りはございませんでした。これでみんなが見返せたんですもの。御機嫌よ  
 う』つて小さく云つたのが精一杯で、さうしてお部屋へお茶器をつき入れたま  
 、何かお話をさらうとするのを、ふり切るやうに走り出して来てしまひまし  
 た。

うれしかつたのは御土産に、森鷗外様の『卽興詩人』を頂いたんです。それ  
 は今でも本箱の中にござられてあります。お裏のお離家が明きましたからと申  
 し上げたのですけれど、そこは芳子さんの受持だったので、あの女に世話を焼

かれちや恐れるな、とばかりでお引移りなさらなかつたのも、さわぎ易い少女氣にはまあどんなにか……。

やがて山上には秋風が立ち初めました。私もそろく里心が出て、瑞枝さん  
にむづかつてるのをお義姉さんがきゝつけ、切角今までお世話をしたものだから、  
せめて中山さんの御出立なさるまでお上げて下さい、と有仰いました。私は  
ハツと、征矢にハートの眞正中を射抜れたやうに思ふて、返すべき言葉も知り  
ませんでした。

家七室霧にみなかす初秋の

山の素湯めで來しやまらうど

(晶)

子)

さらぬだに佗しきものを、晴れたり曇つたり霧は一面に湖を包んで、陰氣な  
日が多くなり、風も強く、やゝもすれば湖水の波が眞白に湧き立つて、海のや

うな荒い感じを與へる。

いつかみんなでボートに乗つて權現様へつれてつて頂くといふ中山さんとのお約束も、とても果されさうにありませんので、ある日陸づたひに行つて了ひました。えゝ例三人づれで。

老杉森々天を摩す樹の間の石段には水々しい鮮苔厚く蒸して、裳も袂も滴る緑い色に染みさう、冷氣肌に沁めて、人煙遠く神威いや尊とき祠前にぬかづけば、五郎や十郎や頼朝や祐經や初花姫や、歴史的の追憶も深い場所ござりますが、私にとつて何よりも何よりも忘れられないのは、彼處ふもとの泉でございます。

何の氣もつかず通り過ぎてしまふ人も多いでせう。現に瑞枝さんだつて芳子さんだつて。

でも私は……何となく、たゞ何となく、戀の泉!! 戀の泉!! この水を掬

んだ者は必ず甘いあくがれを、人なつかしいなやみを覚え初めるであらう、とさゝやかれる様な氣がして、何だか傍へよるのもためらはれました。それにまた、せんちまんたるだの詩人ぶりだと、弄はれるのがつらうございましたから、そこくに立ち上つて了ひましたけれど、まるで水晶を碎いたやうな清水が、山の根から滾々とつくることなく湧いてゐるのでした。

その四邊で探つてきた撫子や山あぢさゐを中山様のお室にさして上げて、あの眞清水の美しかつたことをお話すると『さうです、さうです。「うゑてる」の泉に似てゐると思ひませんか』つて。けど、そんな物語讀んだことはないんですもの。口惜しうございました。

ところが昨年の晩春でございます、四年ぶりになつかしい思い出のあとを訪ひまして、また瑞枝さんと二人こゝへまゐりました時、樂しみにしてゐた清水はまあ!! すつかり涸れ切つて、みにくい石底には朽葉がからくに乾いてゐるち

やあございませんか。あまりの失望さに私の唇は少し開いたまゝ閉づることを知りませんでしたの。美しかつた昔の面影は見るよしもありません。と共に、生々した官能も、纖細な感情もだん／＼に磨り減らされてしまつた自分と、さうして瑞枝さんとの友情。君とわれ、涸れし泉に似たらすや……』こんな上句が浮んで二度三度繰り返しましたけれど、何にも言はずに別れました。口先ばかりはお座なりを云つてお互に……。

あら、お話を飛んだ先走りして……。瑞枝さんとお菓子をこしらへるとして、臺所一杯粉だらけにして騒いだこともあり、原っぱへ女郎花をつみに行つたり、お辨當持つてくらかけ山へ登つたり、毎日のんきに遊んでる中に、いよいよ中山さんと袂別の日が来ました。

かねて悟したる事ながら、今更のやうに……丁度あの『思ひ出』のケテイイのやうに、旅装を手傳ふ乙女の涙!!

「さびしくつてつまらないんですもの。私ももうぢきに歸りますわ」あなたが  
わらつしやらなくなれば、とあとは心の中で言ひました。

『だから打捨つて行かれない先に、僕歸るんですよ』

と笑つてわらつしやる。

いつかはと再會も約しました。瑞枝さんと二人、離宮の前まで御送りしました。  
て、ああ、心強い瑞枝さんの、早くも歩を返すのが、上なく怨めしうございま  
した。

さて、もう私の歸心は矢を射る如くでせう。けど、同行するからくと留め  
てゐた瑞枝さんは、家庭の事情によつて、それつきり山中を出られませんでし  
た。

ある真暗な氣味のわるい晩、黒い／＼水面の奥にも星がピカ／＼光つてゐた。  
人目を避けてさまよひ出た兩女は、露しげきむぐらが中の舊闕跡の空茶屋に腰  
た。

かけて、瑞枝さんは私の手をとつて、何とも云はずに泣きました。私も泣きました。無理に眼をこすつたんです、きうせねばすまないやうな氣がして。そのくせ心のどこかでは……ひそかに快哉を叫んだのです。あはれ偽誓の罪は深いものを……。

瑞枝さんには曲りなりにももう自分の性格といふものが出来てゐたけれど、私はまだ個性が固まつてゐなかつたのです。思想は浮草の様なもので、風のまに／＼波のまに／＼。些ともつともらしい議論でもきけば、一々それに動かされもしましたから、一部の人達からは可憐とも見られ、柔順とも思はれ、義姉さまたちには可愛がられて、瑞枝があなたのやうな妹であつたら、なんてよく言はれ／＼しました。それによつても御推し下さいまし、私がどんなに慎しく内氣な模範的の少女だつたか……。

え、その年歸ります時には、例の水害に流失した酒匂橋の復舊工事がまだ済

ごらす、渡船に乘るのだと、そのまた渡船が一度ならず轉覆したのなんのといふ噂がきこえましたので、皆さん心配して下さるので、屈強な附人一人從へて、大まはりながら三島の方へと下りました。これでほんとうの箱根八里を踏み破つたことになつたのでござります。非常に霧の深いく朝で、片襷端折つて赤い花緒の結付草履、あの八千草の咲き亂れた山路を花の露にゆあみしながら越えた情趣は、いつまでもく忘れられませむ。あゝ千々に思出多き函嶺湖畔……。

## □ 結婚問題と東都遊學 □

その秋頃から私にもそろく結婚問題が起りかゝつたのでござります。あら、そんなにお笑ひ遊ばすなよ、ほゝゝ。まあたとへにも鬼も十七番茶も出花とかつてねえ、此様な女でもそれ相應の御懇望もないではございませなんだが、私

は他家へ出られる身ではございませんの。何よりも一家を扶養すべき義務を持つて居るんですもの。ですから養子といふ段になりますと、それこそたかぐ小學校の教師か、巡査か腰辨か郵便配達夫でもなくちや、こんな家へ來人はありませんわ。私だつてかなり高度な虚榮熱に浮かされてゐる時代でしたからねえ、はいと申さう道理がなく、母も板ばさみになつて、ほんとに困つてゐた様子でございました。

親戚の者たちは何でも早く自分達の責任をのがれたいのですから、ほとんど強制的ですし、それをとやかくと云ひ免れるのは、僅の才能を鼻にかけ、思ひ上つてゐるからだ、女の身で何が出来るものか、婚期を逸して中途半端なものにならぬうち、今がいゝ見切時だの、斷然筆を捨ろのと、いろ／＼云はれたのでござります。

私も随分煩悶しましたわ。傍からそんなにおとしめられると、すつかりおち

氣もつきましたし、もとよりその時分は原稿生活をするやうにならうなんとは露思ひませんが……前途は……何と言ひませう。たゞ眩しいやうな五彩の放光に、眞面に顔を向けられないやうな氣がして……。

### 「あの山越えて山越えて……」

と空なる幸に憧れて、スキートな高嶺の花の香に心醉し……否、露骨に云へば戀を求めてたのかも知れません。けど、相手がなかつたと云ふた方が適當でせう。だのに、華やかな青春の日の思出もなく、嫌味噌くさい世話女房になりすまして了ふなんて……とても／＼堪えられなかつた。やれ戀愛から成立たなくては眞の結婚ぢやないとか、やれ理想がどうの、スキートホームが滑つたの、ホネームーンが轉んだのと、歯の浮くやうな生意氣の風潮に、乗せられてたのでござりますから、ほゝ。

ほんとにある時分の事を思ふと冷汗が出ますのねえ、それや誘惑の手も随分

はげしうございましたわ。私が所謂そんなに『思ひ上つた』氣質だつたからよ  
うござんしたやうなものゝ、危險です、實際『送り狼』だの、觸れば直ぐと附  
着するから『虱草』だのつて、よく家内中の笑ひのたねにしてましたが、冗々  
しいけれど一例をあげませうか。

最初はいづれもさまゝな傳手を手繰つて近づくのですが、一度でも面接し  
たらもう、百年も馴れた大ころみたいなの。

……(前略) 私事二三日前表記の處に轉居、相變らず一人淋しき生活  
を續け居ゆ。御閑暇も有之ゆ。是非御遊びに御越し被下候様、た  
のしみに致し御待申上居ゆ。併し私と同じくまるで豚小屋同然の陋室に  
御座候得共、その點だけ御忍び被下候は。何日にもても御宿泊被下様、お好  
きな柏葉の徽章を戴く身には候はぬも、何處にても御案内と御馳走だけは  
可仕ひ。

太田、中村、小川などの悪口家連もよく相見え、いつも御地の事のみ話居  
 やし。何と申しても學校時代は一番面白く、もう腰辨の身と相成り、御存  
 じ通りの疋うらと變り果て申してより後は、少しも面白き事など無之、人  
 様は美しき家庭に、やれ妻よ子供よとたのしく御過し遊ばさるべく候に、  
 私などは誰一人妻のつの字も求め兼、いつの事やら、過去の事にでも過  
 せし如く考へ……(中略)千代様などは天與の才色、天つ御空に舞ひ遊  
 ぶ天女のやう。いつくまでも面白き御生活を御つけ遊ばされ候御事、  
 御浦山しく存上居りやし。

何卒かゝる淋しき身に御同情下されて、時折は御文の一本も頑かし被下様  
 伏して御願ひ申上ひ。

これですもの、呆れるより腹が立つより面食ひますわね。うつかり人にでも  
 見せたらば、どんなにか親しい間柄かと疑はれるやうに書くのが、この人たち



で、躍起となつたのもその頃のことをございますわ。男だのお婆さんだの年増だの、やれシヤンだのウイシヤンだのとて、皆さんがよく騒いで下さいましたつけねえ。

ですが一切返事を出したことはありません。何と云はれても沈黙を守り通すのです、金佛様のやうに。それに限ります、一寸でも鬨づらつたらきりがありますせんから。

お人格も知つて居り、母にもゆるされて親しく御交際して居りましたのは森様と月岡様。一は温良玉の如く、一は秋霜白日に輝くが好く……お二人とも鄙奮しやい無茶な私の感情を、いつも眞面目によく導いて下さいました。おかげで都路に踏み迷ひませんでした。今になつてそれがわかります。御深切な方たちでしたのに、森様とはつまらないことから……コレから手紙を下さる時にも女名前のかしだしんにして下さい。君の事を知らないでオカシな中傷、

をする者があつて困るからつて云ひれてから、むらノーと侮蔑と反抗の念が湧いてそれつきりいつともなしに音信不通!! 月岡様は御早世遊ばしました。そのお父様から御報知頂いた時、お氣の毒なことをした、おかわいさうに、と母や外祖母は涙を浮めましたが、私はかへつて平氣でしたの、氣が昂つてゐましたので。

まあそんな工合で、叔父たちの感情を少からず害ねました。けれども私はどうあつても……永くとは言はぬ、來年一杯だけ待つて、下さい。その上での縁談を拒絶するやうでしたら、その代りいかなる制裁をも受けませう、と泣く／＼誓つたのです。ちと無鐵砲なやうでしたけれど、だつて一時の圍みを破つて落ちのびやうためには、言質になどかまつてはゐられなかつたのですもの。前途……前途の事など恐しいから深くは考へてもみません。どうせ成る様にしかなれやしない、成行を天に任せせるのだ、と自暴自棄のやうな氣にもなり

まして、そんな事よりも先づ差當つての問題は、やつとの事で叶つた刑の執行猶豫。この尊いと一年間を如何にして過しませうぞ!! 無論東京へ出たいといふことは、唯一の多年の宿望でありましたけれども、それを云ひ出すまでには幾日幾夜、どんなに思ひなやんだか知れません。

とう／＼母に打明けますと、母は……母は多くを申しませんでした。母さんはお前を甘やかして云ふのではないが、お前といふ人は私たちの考へを以つて律する事の出来ぬ様な・素質と運勢を持つて生れたやうである。どうせ何うしてやりたくても親甲斐もない代り、母さんはお前に對して決して差圖がましいことは云はないから、萬事思ひ通りにしてみるがいいつて。

東京へ出て何をする?! 何かわかりませんが何かしら、捉へ得る物のあるやうな気がしてゐたのでございます。

そこでお裁縫……いつたい私はお裁縫が大嫌ひなんでございます。不器用

な故もありませうけれど、厭々ながらつめてしまふと、肩の骨がめき／＼鳴つて来て、いつも凝りの歯痛になやみました。けれども、最後の目的のためには手段を選ばない!! 私はその嫌ひな裁縫修業を名として、親戚一統に願つたのでござります。……でなければとても、許されさうもありませんもの。

ところがこの反間の苦策はうまく功を奏しまして、裁縫といふことを女の天職の第一とでも信じてるらしい人々は、私の心が文藝を離れてさういふ實際方面に向つて來たのは結構だつて、かへつて賛成の意を表してくれました。さうして免状でもとつておけば、萬一の場合にはお針の師匠をして、御仕裁物處の看板かけたつて間違ひはないつて。まあ……。

思ひがけなく上京説のまとまつてからは、もう嬉しくて、夜もろくに眠られやしませんでしたわ。多くもない衣服の整理をしたりなんかして……いよくとなつてはまた今更のやうに、都會生活に對する危惧心も湧きましたけ

れど……勇躍と不安とにみちくた胸を抱いて、おづく新橋驛に下り立ちましたのは、翌年の彌生中旬でございました。

始めて女學生風につくつて、自分ぢや大ハイカラのつもりでしたが、ばれんのやうに周圍に後れ毛の下つた大廟髪、猪首に着なした銘仙の長羽織、剃刀もあてぬ太い眉、ふくれた頬!! ほゝゝ。あの頃の寫眞をみると失笑しますわ。

さうして父方の従姉の家に身をよせまして、そこから程遠からぬ某裁縫私塾へ通ひ始めることになりました。

## □人生の春□

私達のお仲間……和服部の普通科生は、三十名程度ございましたらう、中に新夫人の方も二三居られましたが、何しろ若い人たち揃ひなんですから、そ

れや花やかな賑やかな笑聲の絶たことつてありませんでしたわ。

私も最初の中こそ、出席簿を呼ばれる度、くすぐられる様な思ひにぞく／＼と、御返辭の聲もふるへたほど神妙にしてましたやうなものゝ、馴るゝにつれては兎角手元の方がお留守になり勝でしたが、常々會長先生は一藝に達する者は萬藝に達するとかつて御持論で、折々その引合に引張り出されて、思ひ設けぬ賞讃のお言葉を頂くことがあるには鼻白みました。

何にせよ多年憧憬的であつた本郷通りを、濶歩する一員となつたのですもの、恐らくうれしいの何のつて平凡な文句で、その心中の得意さが云ひ表はせるものぢやありません。昨日は人の身、今日は我が上……いづれか秋に逢ははで果つべきなんて、箱根の瑞枝さんに、皮肉な手紙を書いたことを覚えて居ります。

近年追分まで電車の開通するやうになつてから、かへつて寂れたやうですが、

その時分はまだ大學の正門が今のやうに立派ではなくて、道路もアスファルトの工事最中。本郷通りのぬかるみと云へば一名物でね、雨の日にや困りましたわ。まるでお汁粉を打ち分けた様なんですもの。けど私は紫蛇の目が大好きで、黒塗の高足駄に頭の上まで飛沫を上げながら、雨中つて云ふと用事もないのに、よく遠方まで買物に出たりしましたつけ。

ほゝ、その頃の私の崇拜の偶像は、あの頑固な一高建兒で、二條の白線、柏葉の徽章、紺飛白の羽織に据高な小倉袴や、マントに風切つて足駄ガラ々。「向ヶ陵に我立ちて、下界遙かに眺むれば。」なんて天下の往来我物顔に横行してゐるのを見ると、つくづく女に生れたのが口惜しうございました。男だつたらどうしたといふんでしやう……。

彌生が岡にそゝり立つ、自治の城影王者の威。爛漫たる桜花の紅雲のたなびいて、仰げば高き煉瓦造りの頂上に、一際秀でし時計臺よ……。あの荒い木

柵にかこまれた構内にも、春が来れば可憐く草も咲きます、若草も崩えます。私たちの敷塲は丁度一高の賄所の前の裏門と向ひ合つて高い二階建築でしたので、ガラン、ガランと小使の爺の鳴らす鐘の音や、野球のマッシュのある日なんか、ワーッ〜といふどよめきが、手に取るやうにきこえましたわ。ぼうつと靄深く立ちこめた夜など、寄宿寮の窓瀧る燈影を遠くのぞめば、まるで大海に船舶でも碇泊でもしてゐるやう。何處からともなく湧く寮歌の反響!! 暢く悠々波のやうに……甘い愁ひのまつはつた高調の曲、悲痛のしらべ!! 血の鮮やかな若人の、無心で酔はされたやうに歌ふ寮歌には、無垢な乙女の魂を引こするやうな魅力があります。

ほんとに朝夕は男女學生の通行で、どつち向いても目を突きさうですけれど、毎日同時刻の往復ですから、行き合ふ人は大抵きまつてましてね、今日はどうだつたのかうだつたのつて、そんな事がよく各々のお晝休の話題に上されまし

たつけ。女學生も、お茶の水や跡見女學校となると、全然畠ちがひなんですか  
ら何とも思ひはしませんけれど、女子美術學校、渡邊裁縫女學校なんていふのが  
がいけないんです。厭なもんですよ、お互にね、盜んではサツと目を走らせ  
て、相手の様子を見てとるんです。

それに私達は終日坐つてゐるのですから、どうしても袴の襞が崩れ勝で氣にな  
りましたわ。もつとも帶附の方の方方が多かつたんですけど、しびれの切れな  
いお呪ひ、薦足なんか内しよで致します時都合がいいもんでついね。先生はお  
宅からはおみ帶でいらして、教場でだけお袴なんです。

一週一度の裁方の筆記のある日はいやでいやで、宿題なんぞ頂いて歸りました  
ても、お答案どころか。でも先生も、内藤さんは他にお仕事がおあんなさるの  
だから、と情實酌量で、大目に見て下さるやうになりました。

何處へ行つてもあんまり敵を作らない私は、こゝでも仲好が澤山出來まして

ね。中でも小村さん、杉浦さん、吉江さんなどは一寸でもお顔が見えないと、淋しくてなりませんでした。その方達もみんな人望家でしたから、美人といふ點で會中の熱狂的崇拜を受けられたのは、桃井さんと江崎さんでした。

お二人とももうお世帯持で、御年齢のほども同じほどでしたが、桃井さんは背の高い、氣持よく體軀のびくした、御氣性もその如く無邪氣な應揚さで、微塵も夫人らしい氣取氣などはおありになりません。江崎さんは小作りでキリツと引締つた、一分の透もない、そのくせお愛嬌のこぼれるやうな方だつたのでござります。

それや好きぐですけれど、桃井さん黨、江崎さん組、つてものが出來ましてね、肝心の御本人同士は水も洩らさぬ御親友で、何にもへだてはありませんのに、江崎さんのやうなお半襟をお揃ひにいたしませうよとか、桃井黨ちやヒロインのお髪の好好に似せるとかつて挑み合ひましたんですよ、ほーーーー。

みんなお辨當箱の少さいのを競つて誇りとする中に、桃井さんだけはいつも平氣で、可笑しいほど大きいのを御持參でした。で、大變それが良感化を及ぼしましたつけ。お辨當といへば私はよく嫌ひなお菜の入つてる時、餡パンを代用してすませましたが、歸宿てからそのお辨當殻の御飯の仕末に困るんですよ。そつと新聞紙に包んで便所や芥溜の中へ捨たりなんぞ……勿體ないことをしたるものでございます。

え、食後の休憩時間なんたら、それや騒ぎなんでございますよ。まるで雀のお國の代表者が百舌のお國の議會へ乗り込んで、討論會を開いたと云つたやうでしたわ。よく笑ひましたつけ。派手な風には染みやすく、私だつて自然浮々しちやつて、それまでは年齢より二つも三つも老けて見られたのがいつか、まあお若い!! と眼をみはられるやうになりました。

真紅な巾廣リボンを……ウキンナつてその頃流行つた髪ですが、ローマを

三つ組みにしたやうなもので、前髪つたら五寸ほどの高さに房々と張らせました。その襟元に大きく結びつけ、まがひ物ながらも濃紫の大矢絣に葡萄色の袴裾長う……一時は新聞のハガキ欄なんぞで、大分やかましかつたのでござります。といふのが従姉の家は本郷森川町、場所柄ではありますし、しかも大きな下宿屋なので。……たゞへ人の耳目のうるさいものを、よくく身を慎しまねばならぬと思ひましたから、前後半年あまりもそこに居ました間、止宿人とはたゞの一度も口を利いたこともなければ、洗面場にも人影のみえる時は決して寄りつかぬやうにしてゐましたから、顔も洗はずに朝飯頂いたことが幾度あつたか知れません。

時々店番を仰せつけられてお帳場に坐ることがありましたが、一々お客様の出入に「お歸んなさい」「行つてらつしやいまし」の聲がまるで、上顎に引かゝつて了つて出ないんですよ。だまつて顔を見られないやうに俯いて、読み入つて

る雑誌に氣をとられてるやうにしてました。隨分可愛氣のない娘だと思はれたでせうね。だがいつたい本郷區は風がわるうございましたよ、夜……宵の口でも何でも、若い女が獨り外出しますと、屹度何かしらん尾行いて來るものね。それも奇妙に寂しい根津や彌生町の方には居りません、賑やかな二丁目の方に多いんですよ。私も最初の中は吃驚して端たなう家へ駆け込んだりなんかしましたけれどね、仕舞ひにやまたかと馴れつこで、むしろ其様な者のうかくと引張られて來るのが面白うもございましたわ。

## □不安、動搖、煩悶の時代 □

ほゝのんきな事ばかり申してますやうなものゝ、これは表面なんですよ。年老つた嚴格な伯母は武士氣質のそれはくく折目正しく、其部屋に同居してます私は、横坐り一つ出來なければ、日曜だつてさうく机の前にばかり食ひつ

つたんでござりますよ。

何しろ食客の身なんですものね、女中達の眼色にまで氣兼されて……何で  
つたつて先立つものはお金でせう。それまでは僅づゝの收入でも我家の會計を  
助けてましたのが、かうなるともう自分一人の身じんまくだけがやうくで。  
でもその頃はまだお芝居の味も知らず、活動寫眞一つ見たいとは思ひません  
でした。所謂カンヅメが唯一の慰籍だつたのでござります。が、此家の從  
姉などは殊に反対の激しい方だつたのですから、その目をくぐるのが苦しかつ  
たんですよ。それや一番うれしいのは、月末に稿料の爲換券を受取る時でした  
わ。あら、これや今だつてさうですけれどね、ほゝゝゝ。

烈しいホームシックにもかゝつて、よく泣きましたわ、すつかり感傷的にな  
つちやいましてね。

えへ、神經衰弱症にでもかゝつたんでせうよ、きつと。少し耳みみが遠くなりまして、電話でんわの話聲こゑなごき、取りにくくて困りました。そのくせインテュイシヨンはプラチナの針のやうに鋭く、すべての事物に對する幻影げんえいや豫感よかんがバツと電光でんこうのやうに腦中なうちゅうに閃くのです。それがまた大抵たいていまちがつた事がありません。胸中むねのなかには白熱はくねつの焰ほのほが燃え盛さかりました。

さうして絶す、あゝこんな事ことしちやゐられない、こんな事ことしちや居ゐられないとあせるばかりで、まるでお裁縫さわいほうなんぞ、手てにつくどころぢやなかつたんです。従つてエスの日ひが重なつたり、それが曝れかゝつて伯母おばや従姉いとこの前に消も入りたく、耳朵みみを熱あつくしたことも度々たびたびでした。

それや不愉快ふくわいで／＼ねえ、しかもだん／＼とつのつて、一刻いつこくもちつとしてはゐられぬやうな焦ら／＼しい不安あんと不満ふまんに身心しんじを攻め立てられ、夜よも安眠あんみんは出来ませんでした。

何よりも職業を持つてゐる女達が羨しくてたまらず、そのくせ、婦人記者と  
して立つ氣はないかの、思ひ切つて文界に身を投じたらのとすゝめられまして  
も、またとてもそれだけの勇氣や自信はございませんのでした。自分に何の才  
があらう、價值があらう!! 殊に學力や教育の點をおもふと……小學校の生  
徒にだつて足らないのです。ほんの雑誌の拾ひ読みや、見覚えきゝかぢりの  
附焼及でどうにかこれまでこぎ分けて來たのが、むしろ不思議でもあり恐しく  
もあつた。

そんな工合ですから、求めてた戀どころぢやありません。戀なんてものは人  
生の、贅澤な遊戯に過ぎないのだ。閑人の寢言だ、生命までもと打ち込むのは  
色情狂の一種なのだらう、なんて極端なことを考へるやうになりました。

「千いさまはお強い!! 悲しいことばかり有仰つて……あゝ何故醒めたる人  
は……」

と可愛い友の一人は泣きました、膝に縋つて……。  
 憧憬の夢から醒めたのを一時は誇りもしたけれど、さりとて現實の國に踏み  
 入つて見れば、そこには詩もない、戀もない。たゞあまりに……あまりに小  
 さき自己の苦悶のみ。過ぎ行く青春のうらみ!! 滅びゆくローマンスの悲哀!!

綾さまはじめ美しいのや無邪氣なのや品のいゝのや、繪のやうな友の數多は  
 持ちましても、誰一人眞實の話相手になつて呉れるやうなのはなかつたのです。  
 それもその筈、生れながらに家に財あり地位あり名望ある室咲きの花のやうな  
 令嬢達と素寒びんの孤獨の私と……まるで別世界の住人なんでござります  
 もの。ひとりはぐれたる私は、その頃のあまりのやつれやうを怪しまれまして  
 もたゞ、夏やせと寂しい笑顔に言ひまぎらせて……。

しかし温室の花だとて、香もあれば色彩もある、美しく傷ましい上流社會の  
 の戀物語りもききました。せめてとピアノに洩らす令嬢がおもひのあはれさ!!

汗にひたりほこりに塗れる暑い／＼都會の夏は、あの強紅な太陽の直射する屋根瓦の輝きや、毒々しい赤煉瓦の色、焼けた雲、燥いた土、傷々しい青葉のあえぎ!! 目もくらみ息もつまつて、毒ある惡魔の爪に搔きむしらるゝが如き胸中の熱氣、涸きに涸いた咽喉に一滴の水も得られぬやうな苦しみ、我と我が身を食ひ裂いて生ぬるい鮮血をでもすゝりたいほど、あゝ、あゝ、私は狂ひさうでした。

で、とう／＼七月初旬、まだ夏休みには二十日ばかり時日がございましたけれど、病氣を口實に私は歸省して了ひました。切角世話ををしてやるつもりでもあゝ不熱心ぢや見込がない、とか何とかひそかに従姉達の話題に上されるのも知りましたので、もう居たゝまれなくなつたので。

病氣上りではないかといはれるほど、例年も夏季になると頬の血の氣の薄れるのが常でしたけれど、此年は一入で唇の色まで白く褪せ、強烈な白晝の日光

のいとはしく、おのゝきやすい眼の中おどくと焦らくと、身のおきどころもない様な苦悶に一夏を過しました。頭上にふりかゝつてゐる生活難や結婚難や……あゝ、たゞひとり小さな胸にはさばきかねる重たい事件でございましたもの。

ところがその九月初旬でございます。從來雑誌に掲載しました數種の短篇を取あつめ、巻頭の文をそのまゝ『スキートホーム』と名づけて、さゝやかなお粗末な著書の出版いたされましたのは。

以前に某先生を介して一寸その事についてお話をあつたのですけれど、私は例のボンヤリで他の原稿のことばかり思ひ違へてまして、何でもよろしいやうにと申上げてしまひ、そんなつもりは夢にもなかつたところへ突然出版届に捺印せよと申越されて吃驚しました。でもね、今更どうする事も出来ず、何とも申しはしませんでしたけれど、それほど思ひがけなかつたので、やがて送

り越された製本を見ますと、紙質もわるく口繪も可笑しく、あまりの見苦しさに興ざめて、むしろ腹立しくつてたまらなかつた。一冊の單行本にまとめるほどならば今些もうちつとどうかしたい望みもあつたし、仕様しづやうもあつたらうのに……第一こんなもの買人かひんがあるだらうかと疑うたがつた。

もつとも後日のちできりますとね、みんなが危ぶんで種々の反對はんたいや冷嘲れいじょうのあつたにもかゝはらず、K先生せんせいが冒險的はうけんてきに引受けて世よに出だされたものなさうでした。ですからそんなにもとをかけるわけにはゆかなかつたんですつて。

K先生せんせい……あ、K先生せんせい!! 先生のとについては、私は何なに言ひたくございません。

——どうせ事ことみな我が罪つみに歸きせられて、あらぬ恨みや憎しみも負はねばならぬ身みでございます。今さら……それも先生せんせいが世よに在す方かたならともかく……亡なき人の上うをとやかくと論あげつらふのは心こころ苦しい次第しじだでござりますもの

あゝして永久に迷宮の神秘の扉の奥深う、閉ぢこめられてしまつた謎の戀!!  
 我が握れる秘密は我が権利なり、みだりに人に語るべからず……。  
 以前から先生のお作物には始終憧れてゐまして、そのフレツシユな才情流る  
 、如き快筆には……一體まあどんな方なんでせうなんて、隨分お噂もしたも  
 のですの、それは綾さまも御存じですわ、ね。

その頃はもう大分熱度も冷めかゝつては居ましたやうなもの、併しこれを  
 御縁に一度ぐらゐはお目にかゝれる機會があるかも知れない、某先生のお宅で  
 でも、などと考へないでもございませんでした。が、直接にはまだ御禮状どこ  
 ろか、御挨拶の手紙一本差上げはしやしなかつたんです。

## □ 所謂才士佳人の奇遇 □

やがて私は秋風と共に再び都門に入りました。山に海に燃ゆるが如き英氣を

養ひて集ひ來し幾下の男女學生、活氣に満ちた本郷通り！ 真新しい角帽や白一本條の人達が袖するばかり潤歩して、美しくかざり立てられた飾窓など眺めながら、いかにもうれしげに若いほゝ笑みを交して居ります。私はひとり目を伏せてその中を行きました。

が、しばらく顔を見ねば心もなごむか、伯母や従姉も快く迎へてくれたのは案外でした。直ぐ翌日から會へ行きますと、皆さんが大變血色がよくなつた／＼つてお取巻なさる。何やかや物珍しくもあるし、スキートホームのために思はぬ報酬も入つたりしましたので、當分は私もおとなしく日毎／＼を針めどに親しんで居りました。

するとある夕刻、思ひがけないK先生からお電話なんです。出版物の事につき是非御面談致したい件があるからこれから伺つてもいいか、つて。どうぞお出下さいと御返辭して伯母にもその旨を申して許しを受け、別室にお席をし

つらへなどしてゐる中にもう入來いましたわ。

第一印象はね、男のくせにいやに抜衣紋で首の長い瘦肩の……青つぼいや  
うな高貴纖の縞の羽織を着てお出でした。先方ではまた私のことを、何といふ  
顔色の暗い沈むだ女だらうとお思ひなすつたさうです、もつともその夜私は風  
邪氣で悪寒がして悪寒がしてならなかつたのですから。

書いたものを通して想像してゐたところでは、どんなにか快活な嬌やかな狎  
れくしい女であらうと思ひの外、あにはからんや僻まで無言の人であらうと  
は、ので後日ではよくその時のことと言ひ出しちやお互に笑ひましたけれども  
私は先生のこと、何と申し上げていゝんだか、一寸ためらひました。御姓を  
いふのは何だか生意氣らしいし、先生と呼ぶにはあまりにお若い!! けど外に  
適當な代名詞もなかつたので、やつぱり先生にしてしまつた。

大層いそがしさうにせかくしてらして、三十分ばかり話てのお歸りを立開

まで送り出した私は、お停に召すのを半ば階段のかげにかくれるやうに立つて見てましたが、

『松島の月はさぞようございませうねえ』

袖かき合せながら申しましたわ、我ながら身に沁むやうなしんみりした聲で。それが耳に残つて忘れられなかつたんですつて。(某伯に隨行て明日からしばらく仙臺地方へ旅行しなければならぬとのお話だつたので)

私はまた長い間の疑問であつた人に親しく遇つてお話をしたつてことがうれしくて、早速お友達中へ御吹聴の手紙書いたほどでした。そして先生の夫人は女子大學の出身とかで、大層美人であるさうなと教へてくれた人のあつたのをそのまま、疑ひもせず書き添へました。

その時の御用件といふのは、スキートホームの賣行が案外にいゝについて、姉妹篇の「ホネームーン」とでも題したもの出版ではどうか、そして卷頭に

表題の如き長篇が欲しいのだから、それを書いては貰へまいかとの事なので、苦もなくお引受致しましたやうなものゝ、なか／＼お裁縫の方がいそがしくてね、そんな暇はないんですよ。先生は御旅行先からも絶えず、執筆の模様はどうか、新作のあくまで痛快ならんことを祈る、といふ意味のエハガキを下さいました。

會では、秋期の遠足が催されるつてみんなさわいで居ります。私はホネームーンの舞臺を何處にしやうか、といろ／＼考へました。その間にもやれ運動會だとか文展へとか、出歩くことばかり多くつてねえ、本月一杯と受合つたその月の日數は残り少くなりましても、まだ原稿の方は一枚も書けてやしないんです。これではならぬから丁度紅楓のころなり、鹽原あたりへ實地調査に出かけてみやうかと、親友の小枝さんに相談いたしました。

小枝さんはまだ肩揚かたあげのある、十八の可愛らしい奥様おくさまでした。いゝえ、奥様つ

ていふと怒られましたけど……ほゝゝ。幼なじみの背の君の事は兄様々々と呼んでゐらして、背の君もまだ某大學へ御通學中、お兩人はある家の二階にお飯事のやうな自炊生活をなすつてゐらしたのでござります。

お友達の紹介で御交際しはじめてから日も浅いのでしたけれど、それはく、詩人肌な感情の烈しい方で、あまりの熱烈さを時にはもてあますほどのことがございましたけど。どこか人を引きつけるやうな魅力があつて、やせぎすの細面な、色の白い眼の大きな、頬だけがばかしたやうに紅く、眉の濃い綺麗な女でした。K先生とは私よりずっと以前からお知己のやうでした。

鹽原行は大賛成で、わたしも是非一緒に行きたいとおむづかるんですの。言ひ出したらきかない御氣性ですから、お兄様も笑ひながらゆるして下すつて、氣が早ければ身も軽く、翌日の朝早くには、兩女はもう汽車中のひとおゝ鹽原！　鹽原！　鹽原！！　何といふ美しい仙境の秋色であつたでせう。

茫茫たる那須野ヶ原を貫く一帯の坦途、三里あまりを車上にゆられくて山深く入るまゝに、あの溪流の音、岩石の配置、血の垂れさうな紅楓の輝き、私はもう恍然としてすべてを忘れて了ひましたけれど、小枝さんは着いた晩からホームシックを起して困つたんですよ。兄様を戀しがつて仕様がないのですもの、口惜しうござんしたわ。けど何のかのと云ひ合ひながらも、あんな山中の宿屋にたつた二人きりで、一晩も一緒に寝た人だと思ふと忘られませんわ、我儘なほど憎まれぬひとだつた。その折の思出の数々は、こゝには略しませう、あまり長くなりさうですから。

さうして三日目に、かちくになつた栗羊羹と、大きな紅葉の枝をお土産にかついで歸りましたわ。九時ごろ上野驛へ着いたでせう、その夜は雑菓子のやうな御家庭の泊り客となりました。

そして翌日鶴沼へ立ちましたんですの。材料もあつまつたし、この機を逸さ

す、家でゆつくり書いたら素戔なものが出来るつもりで。

ところが自宅へ歸るとまた氣がゆるんで仕舞つて、些ともはかり行かせん、毎日ぶら／＼遊んでばかりして。

先生からは、ホネームーンのと故長びくも無理にはいはねど、もうよい加減に御歸京如何にいや、なんて始終うながしてお出でしたけれど、私は鳴をひそめちやつて、御返事も出しやしませんでした。と、堪りかねたものか、あれは——十一月も末つ方、或る夜ふいとお訪ね下すつたので吃驚して仕舞ひました。鎌倉に知人を訪ふたついでだとて。無論原稿の御催促なんでした。私は急に机の周圍をかきあつめましたけれど、とても規定の枚數には足りませんでした。が、如才ない先生のこととて母をお相手にのべつ幕なし、それからそれへとお詫の花が咲き、私がまだ帝國劇場も知らないつてことおきくなすつて、今度是非御案内しませう、小枝さんをお誘ひなさい。二三日中にどうですか、丁々

度文藝協會の公演だから脚本も極く適當でせう、と事もなげに有仰るんです。」  
 私にとつては一大事なことを、もう／＼嬉しくつて嬉しくつてね、その夜は帝劇行のことばかり胸に繰り返して、どうしても寝つかれなかつたほどですわ。  
 おさへ切れぬひとり笑みはあとから／＼脣邊に湧き上つた。

あの、先生にはね、不治(?)といふ程ではなくとも、兎に角難症の御病氣がおありなんでした。お背も高い方でしたが、瘦てらつしやることは帆柱みたいで、何しろ大切な身體の平均がとれてないのですから妙でしたわ。始めて見た人などびっくりしてしまひます。私だつてさうでしたもの。いつも太い太いステッキに御身をさゝへてゐらつしやるので、お口のわるい小枝さんなどは「坊さんの犬殺し」なんて仇名を付てました。何處かお上人様じみた佀のある方でねえ、面長の、お鼻の滅法高い、口元の美しく縮つた、大きい眼は派手で愛嬌のある、それは／＼立派なお顔立でした。額は抜け上つたやうに廣くびか

くしてゐて、お髪は薄く、分けると一層やせて見えるとかつて、極めて細かい一分刈にして、廿五といふお年より打見には十ばかりも更けてゐました。よく見れば何處かあごけないやうな點もおありでしたけれど。

御出身の學校は某私立大學と承つてから、流石官立學校崇拜の私も、もう學閥なんてそんなに氣にならなくなりましたの……現金ですこと。ほゝ。

## □ 初めて帝劇へ □

あの帝劇の快いふうはりした椅子に並んで、ノラ劇を觀ましたのは、それから三日ばかり後のことでした。あてにしてお誘ひした小枝さんからお断りを食つたので（小枝さんたらね、どうしてもきて下さらないんですよ、K先生と御一緒ぢやいやだつて。でももう席をとつて了つてあるんですよ、と出鱈目いふと「そんなら私の代りに音菊をつれてらつしやいつて」とばかりで取つく島

もないんですもの、私も随分ばかねえ、その通りを先生に復命いたしましたが、後日できければ音菊といふのは新橋のなんなのですつて）たつた二人きり！ 面

眩うございましたわ。約束の時間きつちりに日比谷で電車を捨てましたもの、さア、どつちの入口から這入るのかも分らなくてまごつきましてよ。

場内はもう観客に満ちてゐました。まあ何といふ花やかな輝きでせう、ぞよめきでせう、いつぱいに立ちこめた金色の零園<sup>アトモスフィア</sup>氣、そゝるやうに胸ときめかす一種の空氣、歡樂にふるへる甘っぽい呼吸のもつれ!! 寒いくお濛ばたの風に吹かれてきた頬にはほつと紅味の上るのを覺える。私はまるで美しい夢でも見てるやうな氣がして児廻してました。廣く大きな舞臺の前には目醒むるばかりの幕が、まだ見ぬ世界の秘密を包んで重々しく垂れてゐました。

その年齢になるまで新にも舊にも、劇なんてもの始めて見ると云つていゝのですもの。期待を持つも何もなく……丁度人魚の陸へ上つたやうなものです

わ。一向見當がつきません、松井須磨子だの文藝協會などといふ名稱すら、始めて知つたんですから……。そこへもつてきてむづやしいイ・ブ・ゼンの『人形の家』なんて婦人問題が眼前に展開せられたのでせう、たゞもう煙にまかれた形だつたんですねえ。あの幸福さうな家庭をして、良人を捨て子供を振り捨てわけもない理屈を言つて寒い世間へ飛び出して行く女丈夫よりも、人形の衣裳を着て樂しい『雲雀』のやうに『栗鼠』のやうに歌ひまはり刎ねまはつてた無邪氣なノラさん!! 内に限り知られぬ苦悶を抱いて、郵便箱を開けるのを一刻でもおくれさうと、タランテラ踊りの稽古にかこつけ狂氣のやうに踊り狂ふノラ!! カヨワキものよ、汝女! あゝいふ折の心理でなくつちや私には了解されなかつたのですもの、對決の場なんかあんまり意外なのでね。情ないほど低級な思想だつたのですわね。一番身につまされたのは第一幕のノラとリンデン未亡人が思出話の場で、…………しんみりした情味が湧きましたわ。孤獨の

生活に疲れ果て、就職難にあえいでるリンデン夫人にすつかり共鳴しちまいました。ランク先生は好きな人物ですけれど、ねえ、脊髄病で死にかゝつてゐんでせう、何だか先生にお差合のあるやうな気がして、お氣の毒でなりませんでしたわ。どんな心持がして見てらしたらうと思ひます。

閉め切つた大戸の音のどしんと響いたときにも、ノラの行衛より私には取残されたヘルマーの方に同情があつたので……いつのまにか涙が充满たまつてゐました。バツと電燈の明るくなつた時、耻しうございましたわ。

「どうでした。え、ノラは、ノラは？」

としきりにきかれましたけれど、泣き笑ひのやうな笑みを見せるばかり、批評がましいことなんて何一つ言へやしなかつたんです。

また不思議とあの晩ほど知人にかち合つたことはございません。まづ同じボックスに思ひがけない桃代様とそのお父様が来てゐらしたでせう、藤子様にも

めぐり合つたでせう、食堂へ行けば先生の御親友Y様と、同つ卓でおち合つたでせう。Y様は法科大學の秀才で、かねく御噂は承つてましたの、先方でも私の宿に御友人がいらつしやるので、外ながらよく見かけてゐると有仰いました。

私は洋食の食べ方を知らないんですから、隨分弱つて仕舞ひましたわ。キヨト／＼と人様のお眞似するより外仕様がない。どんなに可笑しかつたでせう！まだピフテキなんぞろくに手もつけぬ中、給仕人がさらふやうにあとのを持つて来て取代へて行つて了ふのですもの。これは餘りだ、とY様が見兼て口を出すほど。私は歯がわるいので肉類は戴きにくくて……とは隨分苦しい道解でした。ベルの鳴り渡るのに驚かされて、あはて、椅子を轉したり……チキンライスの御飯粒膝からばらく振りこぼしたり……。

休憩時間に桃代様と廊下へ出たら、意外とも／＼小枝さんの一行とぶつつか

つたちやございませんか『あらつ』とばかりで私は小枝さんに飛びかゝった。  
 だつて口惜しかつたんですもの。私があれほどお願ひしたのに、どうしても厭  
 だの、お金がないの、そんなに遊んでばかしゐちや兄様にすまないからのと、  
 さもなく云ひのがれながら、かうして日も變へずに來てあらつしやるなんて  
 ……あんまりですわ。さもなく間に這入つた私が可加減な事でもしたやうで、  
 先生のおもわくも耻かしく……心から怨めしくてたまらなかつた。否、内心  
 はこの方を望んでたのかも知れないのですけど……。

ともかくも此様な事がへだてとなつて、小枝さんはそれつきり文通も絶え  
 た。すべて血の紅い時代には下らないことが重大事件として取あつかはれるの  
 です。それだけ感情が纖細なのでせうね。だが何故か小枝さんは、先生に私を  
 近づける事を好まなかつたのは事實です。私もまたこんな敵手を向ふにまはし  
 たくはなかつたのですから……。小枝さんの前では私は口は利かれなかつた。

先生を占領されてしまつた様な氣がするのでした。私はその頃からつくづく自分の重い舌を咀ひました。

『寒山拾得』や『お七吉三』の舞踊劇は、踊りやお三味線を解かない私には何程の興もとじめず、最後の喜劇『ヴァニスの商人』法庭の場なども、もう歸途のことのみ氣づかはれて時間の過つのが惜しくてたまらず、浮腰になつてゐました。……たゞ土肥さんのボーシヤ姫の凜々しい美しさと、東儀さんの老シヤイロツクの眼のよく光つたことのみがいつまでも目に残りました。

下足場の人波に揉まれながら場外へ出ましたが、私はまだ夢心地に茫として仰るので……。

丁度樂屋口の階段の下で出逢つた方々が、坪内先生や島村先生であると後できかされましたけれど、その時は何が何やら……。お目に掛からうとした東

儀さんや土肥さんは今御入浴中であるからとしばらく待たされて、長椅子に腰かけてゐた間といふものは、双の袂に包むにあまる胸のときめき!! ガタ／＼身震ひが出てやみませんでした。時計はもう十一時をまはつてらしうございました。

やがて通されましたのはたしか二階で、十疊か十二疊かのかなり廣い明るいお室でした。私は障子の内へ入り得ませんでしたが、強いられて、小さくなつて敷居際に坐りました。何があんなに耻かしかつたんでせう、カラ初心だつたんですねえ。東儀さんに『K君、奥様ですか』なんて云はれてもう一たまりもなく顔が上げられなくなつて仕舞つたのです。『否、友人です。』と先生は澄まして被居いましたけど。もう此方からお話伺ふどころぢやなく、談しかけられるとはつとする程で、前髪の膝に觸るゝばかり俯いてゐました。東儀さんと土肥さんは同年齢であるらつしやるのださうですけれど、土肥さんの方がずつとお若

く、お眉から眼のあたりに一寸冥想的な西洋人らしい様子のある、おきれいなお優しさうな方でしたつけ。

あはれ雪間に咲いた紅梅の、暖かい日光の恵みも知らず、あえなく散り果てやうとしたのが……ああ、劇場と先生とは私にとつての太陽でした。甘く悲しく花やかな熱い涙の復活はやがて、我が世の青春の復活でした。

### □ 窮鳥懷に入る □

観劇の翌晩でございます。まだ脱稿しきらぬホーミューンの草稿抱えて、はじめて先生のお宅へ伺ひましたのは。だつてさういふ御命令だつたのですもの。師走のことなり夜分ではあるしと、三日目の亂れた島田を撫でつけて、お粗末な銘仙の平常服の上へ羽織だけ替へてまゐりましたが、それがいけなかつたんでした。あの愛想よく迎へて下すつた、切髪に黒のお被布の品のいゝ御母堂の

鋭<sup>と</sup>どい眼光<sup>が</sup>、頭<sup>か</sup>から足<sup>か</sup>の先<sup>ま</sup>で價<sup>か</sup>ぶみして被居<sup>らう</sup>とは露氣<sup>つゆ</sup>がつかなかつたのでした。

先生<sup>せんせい</sup>のお部屋<sup>へや</sup>は二階<sup>かい</sup>で、三疊<sup>でう</sup>に六疊<sup>でう</sup>かの小ちんまりした日本風<sup>ほんぽう</sup>。本箱<sup>ほんばこ</sup>や書棚<sup>しょだな</sup>にぎつしり並<sup>なら</sup>んださまぐ<sup>な</sup>な背皮<sup>せがは</sup>の金文字<sup>きんもじ</sup>は、靈<sup>れい</sup>あるものゝごと輝<sup>かが</sup>いてゐました。綠色<sup>みどりいろ</sup>の脇息<sup>きょうそくよ</sup>に凭<sup>いと</sup>つて糸織<sup>いとおり</sup>の丹前召<sup>だんぜんめい</sup>した先生<sup>せんせい</sup>は、五つ紋<sup>いのん</sup>いかしめい昨夜<sup>さくや</sup>の長羽織<sup>はねおり</sup>より、すつとお若く優しく見えました。が、例<sup>たと</sup>いのはにかみやの私<sup>わたくし</sup>先方<sup>せんぱう</sup>の有仰<sup>おうじや</sup>ることに受答<sup>うけこた</sup>へするほかは、下向<sup>したむか</sup>いて袖ばかり弄<sup>いじ</sup>つてゐるのでした。お床<sup>とこ</sup>の間<sup>ま</sup>には某令嬢<sup>ぼうれいぢやう</sup>の彩筆<sup>さいふ</sup>、成るとか承<sup>うけたまは</sup>る、美人畫<sup>びじんが</sup>の一幅<sup>一幅</sup>がかゝつてゐました。

お筆<sup>ひ</sup>の主<sup>ぬし</sup>が妬<sup>ねた</sup>ましかつた。

書き残しの續<sup>つづ</sup>きをどんなでもいゝから、是非<sup>ぜひ</sup>今夜<sup>こんや</sup>こゝで仕上げ<sup>しあげ</sup>てお了<sup>しま</sup>ひなさい。もう餘日<sup>よじつ</sup>がないのだから明日<sup>あす</sup>にも直<sup>す</sup>ぐ印刷<sup>いんさつ</sup>の方<sup>ほう</sup>へまはして、どうでも年内<sup>ねんない</sup>にハルビン<sup>はるひん</sup>の果<sup>か</sup>まで送<sup>たす</sup>本<sup>ほん</sup>する大決心<sup>だいけつしん</sup>なのですよ。と嚴然<sup>げんぜん</sup>と申し渡<sup>わた</sup>され、仕方<sup>しかた</sup>が

ないからお机の端拜借して、墨すり流しましたものゝ、どうしておもうひせあることが出来ませう？ 胸も震へた、手跡も震へた、いくら沈吟したつて句も文章も出るものぢやありません。

御母堂は時々上つていらして、お壽司を取つて下すつたり、お手製だつてつぶし醤のお汁粉をすゝめたりして下さいました。けれど私は一心に筆を噛んでましたので、それどころではなく、上の空で御禮申上げたまゝ、しばらく後を續けてますと、先生はペンとつて有合ふ紙片に何やらさら／＼。

お汁粉は小生代理をしておふくろの手前をつくろひ申すべきや。』ですつて!! まあとお顔を見上げますと、

『嫌ひなんでせう。』

『いゝえ、そんなら頑きます。』私はあはて、お箸を取り上げました。が、先生のこの御心づかひみて、まあお氣むづかしさうなお母さま、と急に怯氣立ち、

切角の好物も胸につまるやうな氣がして……。

一時過ぎまでかゝりましたけれど、まだ一二枚残りました。先生は傍ではげましながら、字書を引いたり、脱字を入れたりして下さいました、何に、おつきあひなら徹夜したつてかまはない、と笑つて被居いますけど、私は宿の方の首尾が氣が氣ではなく、どうしても歸ると筆を投げ捨て了つたものですから、それではとお出入の車夫を呼んで下さいました。それに送られて歸りましたが、私のために皆さまにこんなに御迷惑かけて、ほんとにすまない事だつたとしみく思ひました。そしてその美しいと評判の夫人のお見えなさらなかつたのは物足らないやうな、また何かうれしいやうな氣も致しました。この時までまだ半信半疑でゐたんですもの。

深夜、人靜つた江戸川河畔を、流れに映つた街燈のきら／＼と美しう冷たうございましたこと。柳の落葉は落花のやうに地に散りしきました。夜風はあま

り寒くもございませんでしたが、ショールに頬を埋めて母衣の中からちつと眼をみはつて、私は少し恐いやうな氣もしてゐました。寢静まつても都會の夜は矢張り明るうございましたわ。

心に足らぬ節のみなれど、兎に角書き上つた原稿をすつかりお渡しして了つて、自分の責任だけはのがれてみますと、味氣ないやうなやるせない寂寥を感じまして、花やかな劇場の一晩の樂しかりしこと。懐かしいお部屋のさまなどが、日を経るまゝに思ひ出されてなりません。何もかも忘られぬ生涯の思い出の一つとなるでせう、とは先生へ差上げだ文の端にも書きましたなれど、夢さら先生のお袖の蔭に保護される身とならうなんて……。出版すみにでも成つて仕舞へば、自然御用もなく遠々しくなるであらうと、それを心細く思つたからでした。

それに年末のこととでせう、お裁縫が山積して居ります。塾では一同春着の品しな

定めやら、新年會の御趣向やら、かるた會の取沙汰やらにさやめき合つて居られまして、私も無論出席する積りでございましたから、紋羽二重の紋附なんぞ染めさせまして……桔梗紫の派手なのに褪紅色の無垢を重ねた色彩の目覺ましさ！ 二尺の振りに紅絹うらが牡丹花の崩れ咲くやう!! そんな事を他愛もなくうれしがつて……その他まだ／＼帶も長襦袢も、頼まれ物の羽織も比翼も、妹に送つてやるべき袴もお被布もと、何から手をつけてよいやらまごまご。毎日々々忙しがつて死物狂ひ、お當番すましての歸途には、いつも電燈が輝いてました。

が、時にはもう根氣がつきつくりしちやつて、衣服なんぞ着なくともいから?! と投り出したいやうな事も度々でした。

その内に先生からお手紙がございましたの。

「僕は始終イラーラしてゐてこの半年ほどの間、原稿としての外は手紙らしい

手紙をしたゝめなかつた。「先夜は失禮、例の件は……」てな事でらちをあけた。  
 しかし今夜はさうでない——とかいふ冒頭で、帝劇へ越路の淨瑠璃が來たから聞きにゆかぬか、いづれ日がきまつたら電話でお傳へする、つてわけだつたのです。私はもう有頂點になつちやいましたわ。淨瑠璃なんかちつとも好きぢやなかつたのですけど、たとへ一時間でも先生の聲容に接する事が出來さへするならば……。

けど生憎その當日は一寸宿が出にくくて、大層遅刻致しましたのを先生は、  
 ひどく焦れてゐらしたやうでした。そして御一緒の筈だつたY様が、急に御旅行遊ばしたとかでまた二人きり。三階の花月でお辨當いたゝく時「いつもかう兩人きりだと世間の口がうるさいからね、これから注意しませう。貴女も些」とお友達を引張つていらつしやい。なんて有仰るので、えゝえゝとはうなづきながらも、内心何だかうらめしうございました。それから私は某誌から頼まれて

る家へこれを埋めやうと思つて書きかけといた、先夜の観劇の印象記をお目にかけますと、これは大變面白いから「ホチームーン」の巻末へ入れる事にしようと。それには明日までに入用だから是が非でも今夜中に取まとめよとの嚴命なんでせう。よしない事を仕出来した、と後悔しましたけれど仕方なく、酒場の卓上で書きなぐりました。樂屋のぞきのスツバヌキなんか面白いでせう。ウンと酷評しておやんなさい。口惜しければ化けて來いと云つておやりなさい。東儀君も土肥君も舞臺の上ではノラの前に、あんなに意久地がなかつたんだもの。是非、々々、なんて先生は傍で笑つてゐらした。

越路は、「合邦」か何かを語りました。併しそんな事はどうでもよつかたんですね。恐らく先生も御同感だつたのでせう? だつて斯道には些とも趣味をお持のやうぢやうぢやありませんでしたもの。最後の太夫の床に上りましてからは、誰もく云ひ合せたやうにばらく席を立つて丁ひ、取残されたのは私等兩人。

しかも先生はしきりと萬年筆を繪ハガキに走らせてゐらして、その内女案内人は片端から椅子を疊み込んで來ました。今少し此所に置いて貰へないかと有仰つても、もう扉を閉めて了ひますからと迷惑想に困つてますので、やつとお立ちにはなりましたが、場外へ出ると今度は北側のね、下足場へ這入り込んで、こゝでももう電燈を消さうとしてるのを、ちよつと待つてくれとその光りで何か大急ぎでしたゝめてらつしやるんでせう。私は止めるにも止められず、歸るにも歸られずばんやりお傍に立ちすくんでましたわ。

眞暗な晩でしたの、あの寒いお凜端の赤燈の下で、電車を待ち焦れてゐる間といつたら、氣が遠くなりさうでした。本郷三丁目から正門前まで、歩いて歸るとかなりござりますの。どこの家でももう戸を下してしまつて、軒燈のみ煌々と夜を守り顔に、起きてゐたのはミルクホールと、蕎麥屋と焼芋屋の三軒きりでした。その代りおでんやだの今川焼だの鍋焼うどんだの、いろんな屋臺店

が出てゐました。墨を流したやうな空の西の方には、星が五六つ光つてゐました。

拳の痛くなるほど門を叩きましたら、女中がどてらを着ぶくれて、扉を開けに来ましたつけ。おそるく只今を申しましたけれど、伯母は返辭もせず、

『おそいぢやありませんか』と例とちがつた聲で言ひましたので、私はあはて電燈を消して、長襦袢のまゝ臥床の中へもぐり込んで仕舞ひました。

老人だと思つて馬鹿にして、とか、この頃は毎晩々々何の用があつてこんなに晩くなるのです、とか、お客様でさへ十二時限りに關門はしないのに、とか冗々厭味を云はれましたのを、私は聞こえぬふりに布団かぶつて息をつめてました。つらうございましたわ。私も悪かつたんです、節季師走にのんきらしい先日帝劇、今日はまた越路、とそんな事云ひ惜うございましたから、一すと外へ行くと云ひおいて出ましたので。

もつともその以前から大分形勢不穏だつたので、いづれは早晚破裂すべもの、と私も少々自暴氣味にもなつてましたので……。二三日過つと先生からこんなお手紙。

時計は一時十分過ぎ。ペンを握り、埋火にかざして耳をすます。

寂たる真夜半。白衣の幽鬼どもが墓の戸おしひらいてあるくといふ。どうくと水車の水音のみ聞ゆる、またレコード破りの手紙書く。

一昨夜は異彩ある夜でしたね、僕も淨瑠璃より原稿書いた處の方がつよい印象を興へられたつけ。

昨日鎌倉行、半日を知人の別荘に語つて、夜の九時過ぎ満天の星をいたりいて出た。浪音のせぬ暗い夜、恐ろしく鮮やかな流星を見ました。鵠沼では俾がない。

茶店のオバさん子供を背負つて、提灯つけて、僕の手荷物もつて、スタコラへ。寒い、暗い、なさけない。も一つおまけにカラダが痛い。二十分かゝつてやつと着く。十時だのに、皆な夜半の夢。龜ちゃんは二タ寝入りもしだあととのよし。

上じょうを下したへの騒動。火桶かこんで三人でいろいろの話。——猫は魚をねすんで、おかあさまの逆鱗に觸れ片瀬へ捨てられ候。龜ちゃんが一時間時計をすゝめてあるので、その一時に寝た。

夢もなし。安らかな一と夜。

九時起きる。海岸へ行く約束だのに、龜ちゃんにおいてきぱりをくつた。泣き出しさうないやな天氣、手紙の束を見る。驚きたまふ勿れ。

ねむいのでひるね。晝食は午後三時、あとで甘酒二杯。

龜ちゃんが學校から歸つて来て、からかつて一時間。

もう歸京と云ふと、龜ちゃんが電車まで送らうといふ。

門を出ると同時にさらりと何だか窓らしい。傘をもつて出直す。相合傘、僕は病後はじめて傘をさしひ。一町ばかりで草疲れて龜ちゃんにまかすと、背がひくいので、僕の頭へコツン／＼。

おかあさんも心配してあとから見にいらすた。

五時二十五分藤澤發、二等車は寥々たり。

歸るとホチームーンの校正その他、ウンザリするほど。それと一と角力とつて、今やつとすむ。

幼にしてポンチ繪かきし君がこと

こま／＼さゝぬ火桶いだきて。

あなをかしふツクリ箱でほやこはし

その手で書くやホチームーンなど。

時雨悲しゆきの人はあらざりき  
夕闇せまる橋に立ちしが。

嫁ぎなば大庭姪こそいとよけれど

姉は童子に教訓垂れぬ。

眠かりし夜の二時半、戯れ歌を

書きて悔いけり眼さめたる。

そのうち遊びにいちつしやい。なん下せざいましたが、折り返しその夜お電話にて、あなたの一身上のことをつきへんと御相談してみたいことがある。今夜七時過ぎから閑暇をこしらへてお待ちしてゐるから、これから来ては貰へまいか、とのことなので、私は伯母から外出の許可を受けるまでなく、直ぐまわりますと御返事申して了ひましたわ。だつてもう人の顔色や、後で厭な思ひさ

せられなければならぬ位と、かけがへには出来なかつたのですもの。胸轡かせながら出掛けました。

先生は大層改つてのお話でございました。

そしていろいろ間はるゝまゝに、私も隠さず目下の境遇や、さしせまつてゐ家庭の事情などもお話をいたしました。さうして我ながら悲しさに堪えず、涙がぽろりと膝に落ち始めました。先生のお近眼鏡はきらりと光つて、叱るやうに『襯衣の綻びを縫ふ女は世間にいくらでもある!!』

心にもない家庭の犠牲となるなんて、そんな愚な話はない。つまらぬ義理や情實にからまれて、取返しのつかぬ事をするな。實は自分の手で女作家を一人仕立てゝみたい望みもある。貴女はもう行きつまりかけてゐる。と云ふのは如何にも眼界がせまいからだ。経験が浅いからだ。今の中早く方向を變へないと讀者に飽かれます。

僕は思ふ、僕は信する。「吾も必ず一度は死せん、然れども夫はあらゆるものを見つくし、知りつくしたる後ならざるべからず……」

到底不可能なれども理想はこゝだ。あなたも一つ仲間入りなすつちやどうだ。せい／＼御便宜ははからつて上げます。失望するにやあたらない、あなたはい、手腕を有つた大工が、家の建築法を知らないやうなものだ。指導次第で立派なものになれるんです。先日それとなくお母さんの御意向もさぐつてみましたが、何もかもあなたの奮發次第なんでせう。勉強して修養して、立派な作家になる氣はないか。切角これまでに賣り込んだ名聲を、みす／＼凋落させて了ふのも勿體ないわけではないか。併し今まゝだつたら屹度さうなりますよ。すべてを僕に任せて呉れるわけにはゆきませんか。自覺なさい、自重なさい、あなたの大分を！　あなたに決心さへついたなら、御親類方の苦情なんぞは僕が引受けて、うまく解決して上げますよ。餘計な世話を焼くやうだけれど、見兼

るんです。みんながあなたに對してあまりに冷淡なやうだ。ね、僕を信じてくれませんか!? そつと見上げるとあの大きな美しい眼は、ちつと此方に注がれてゐました。黒く光つて氣味のわるいほど。

私、これほど心の琴線に觸れた、優しい頼もしい言葉をきいたことはないんですもの。まして言ふ人は、好きなく先生。慕はしい、戀しい人……。もう信するの信じないのつて餘裕はありません。けれども、けれども、あまりに夢の様な幸福の、頭上に舞ひ下つてきたのが空恐ろしく、例の物怖ちの心から、はきくとはお返事もしかねて居りました。と、まあ一應よく考へて御覧なさい、お母さんにも相談して! とのことで、涙をぬぐつてその夜はお暇いたしましたが、……いくら考へたつて他にいゝ方法の出やう筈はないんですし、それに……正直どんな事しても先生と離れたくないのが胸一杯でしたから……母に相談なんぞするまでもなく、私の心はきまつてゐました。

しますとその次の日曜の朝、またお電話にて、此間の件につき、なほ御相談申したきこともあれば即刻お出を願ふとのこと。場所は芝浦の、い、すといふのでした。

わたくしは一も二もなく急いで仕度してね、臆面もなしにのこぐ尋ねてまゐりましたわ。そしたらお料理屋でしたの、女中達が妙な顔して出迎へましたつけ。

先生は丁度お風呂から上つてらつしやいましたが、やあ、よく出掛けときましたね、なかくえらい、つて笑つてらつしやるのですよ。来て悪いやうなところへ先生の、お呼び遊ばす筈はないと思つてますのに……。

でもこんな事からして先生は、私を狎れやすい女だと思召して丁つたのかも知れませんが……私の方ではまた先生に對しては……戀しいの懐しいのといふ感情さへ抱いてはならぬもの!! 絶體に人間離れのした崇とい? 神聖な

もの、やうに無理から思ひ込んでしまつてましたので……。

十二月とも覺えぬ、暖かい長閑な日でございました。玻璃戸越しにみる静かな波がキラ／＼光つて、白帆も浮いてゐましたし、春の海のやうに麗かな臺壇がかすんで……欄干に凭ると、眩しさに泪がこぼれました。

この期に及んで何をか申しませう。數ならぬ身にあまりたる御心添へ、何と御禮申し上げてよろしいやら!! あまり厚かましうござりますけれど、御言葉に甘へてどうぞよろしく!! とそれが精一杯の御返事でした。

安心なさい、不肖ながら僕がついてゐる限り、もうあなたを精神上物質上不安の位置に陥いれることは断じてしない。あなたはたゞ全心全力を注いで名文を生めばよい、さうすれば多々益々、あなたを幸福にして上げることが出来る。

あなたの生命は文章、福禍わかれるのも文章!! 一つしつかりしてくれたま

へ。と云ふて決して固くなり過ぎる必要はない、依然として千代子式だ。  
僕は今日以後の作品がどんなに出来るか、たのしんで待つてゐる。

先生、御期待に副ひたいと思ひます、とばかりひれふして物も覚えず。あ  
はれ心幼くも、神とも人間ともわからず、たゞひたすらに頼み渡つたのが……  
先生のおん胸搔きみだす原因でございました。

□ 聖なる兄よ妹よ □

先生と……まあ私は何といふ無茶な人間でしたらう。巾幘界のレコードを破  
るんだ』なんて突飛な眞似をね……。でもお連れ遊ばした先生もおわるいん  
でござりますよ……。

もつとも最初はね、那須温泉へといふことで、そこの宿屋の主婦の仇名が、  
大將軍といふ位で、大變快活な新婦人だといふことや、豪宕な高原の景

色や、雪中の山家の家族的の團樂など、例の口調で面白くお説きなすつたものですから、それや私もお仲間入りがしたいつてね、申しましたわ。

それがいつの間にか、那須はお流れになつてしまつて、その代り何處でも場所は指定に任す、しかし曾遊の地や月並なところはよしませう……奇抜なところであなたの除夜の吟でもきゝたい。なんて有仰いましたが、無論私の口を出すべきところぢやなし……またそれではお話しがちがふ、と云ひ切るほど心強くもなかつたのです。否、何處でもよかつたんですね。一人きりで旅行が出来たらどんなに樂しいだらう、汽車の中はどう？ 先へついでからは、なんていろ／＼空想をゑがいてたほどですもの。つまりは先生の言ひなり次第、従姉達の前へは鶴沼へ歸省する體につくろつて、忘れもしない、歳晩の廿八日でしたわ。十二時半といふお約束の時間より少しおくれて、ワク／＼しながら新橋の待合室へ駆け込みましたの。

「大變待たせましたね」つて直ぐ東洋軒の食堂へつれて行かれた。また西洋料理！私困つてしまつて……カツレツを少さくきさんで、口をモガモガさせてる中にいゝあんばいに發車前の鈴が鳴り渡つた。

給仕の持つて來たお釣錢を、私にあづかつておけと有仰います。妙なことをと思ひましたが、急ぎの場合のこと故ニートのかくしに突込んだまゝお後を追ひましたが、先生つてば私に、會計の役をつかさどらせて見たくてゐらしたのですわ。赤帽にやれの、雑誌を買ふのつて……。

けどお生憎さま、あんばんたんの私にそんな氣の利いた眞似の出来やう筈なく、可笑しうございましてよ。汽車中は随分こみ合つてね、最初の中は席も離ればなれ。少しは心もおちつきまして、そつと窓外を見る風などもしました。無造作に束ねた洗ひ髪のローマがうるさく崩れかゝつて、身動くたびに襟元の

タボンがサナ〜。

行く先は修善寺温泉ださうでござります。先生が隣席へいらしてからは、何だが胸のみ騒いで、膝の上にひらいてる雑誌は唯お飾りに過ぎませんでした。そして袖の相觸れぬやう、一生懸命注意してました。山北で鮎のお鮓を買つて、私もお渡し下さいましたけれど、どうして食物が通るところではなく……スチームは温室の様にあたゝかで赫々とのばせました。

暮れてから三島へ着きました。薄暗い豆相鐵道に乗り替へますと、まあ、まだ四十分も時間があるんでせう。室内はせまくつて窮屈でたまらないので、寒いけれども扉外へ出て、小さな石ころを蹴りながら、其處の木柵に倚つて語りました。一つは人目が眩しかつたからで……。私は顎をショールに埋めて、紙雑様のやうに双袖を重ねて……。おひやかすやうに周圍をからくと落葉が轉げる。

先生の有仰るには、たゞさへ目を引きやすい二人づれ、殊に先生なんて呼ぶ

のは疑問をますもとだからいけないつて。僕も内藤さんだの千代子さんだのつて、耳立つやうな言ひやうはよしませう。あら、だつて先生、私は外になんと申上げやうもないぢやありませんか。あら厭ですわ、兄様なんて、ほゝゝゝ可笑しくてとても口に出やしませんわ。そんならいつそ『亮様』と名前を呼べつて!! 私そんな失禮なこと申せません、てきゝませんでした。その代り第三者的の前ぢや、決して先生といふことは口にしない、と誓ひました。

汽車は暗中に火粉を散らしながら、一時間あまりで大仁へ着きました、直ぐ旅館からの出迎の番頭が飛び込んでまゐりました。驛前の茶店に休憩します時分には、先生の態度は今までとすつかり變つてね、いくらお約束とはいへ私一人で可笑しくて、笑ひを堪えてゐましたわ。妹だか夫人だか、正体の知れない者にされて仕舞つたんですもの。

旅館へは電報で、二室つき頼む、なんて命つてやつたのですから、もつ

と大勢づれだと思つたのかも知れません。馬車を用意して来てゐました、六人乗だかの。極りが悪うござんしたけれど、仕方がないから乗りましたわ。故意か物好きか先生は、幌さへ下させて下さらないんですもの。丁度ね、大仁の町の年の市なんですよ、大變な人出！ 祭禮みたいな騒ぎなんでせう、露店の裸火は火事のやうに空に反射してゐました。その人波をかき分けてゆくのですから、あらゆる視線や、浴びせられる聲々やに、私は一たまりもなく眞紅になつて了ひましたけれど、弱身を見せてはならない、と造りつけの人形のやうに首を据えて……その頃はまだペールなんて、ハイカラなものは知りませんでし

たからね。

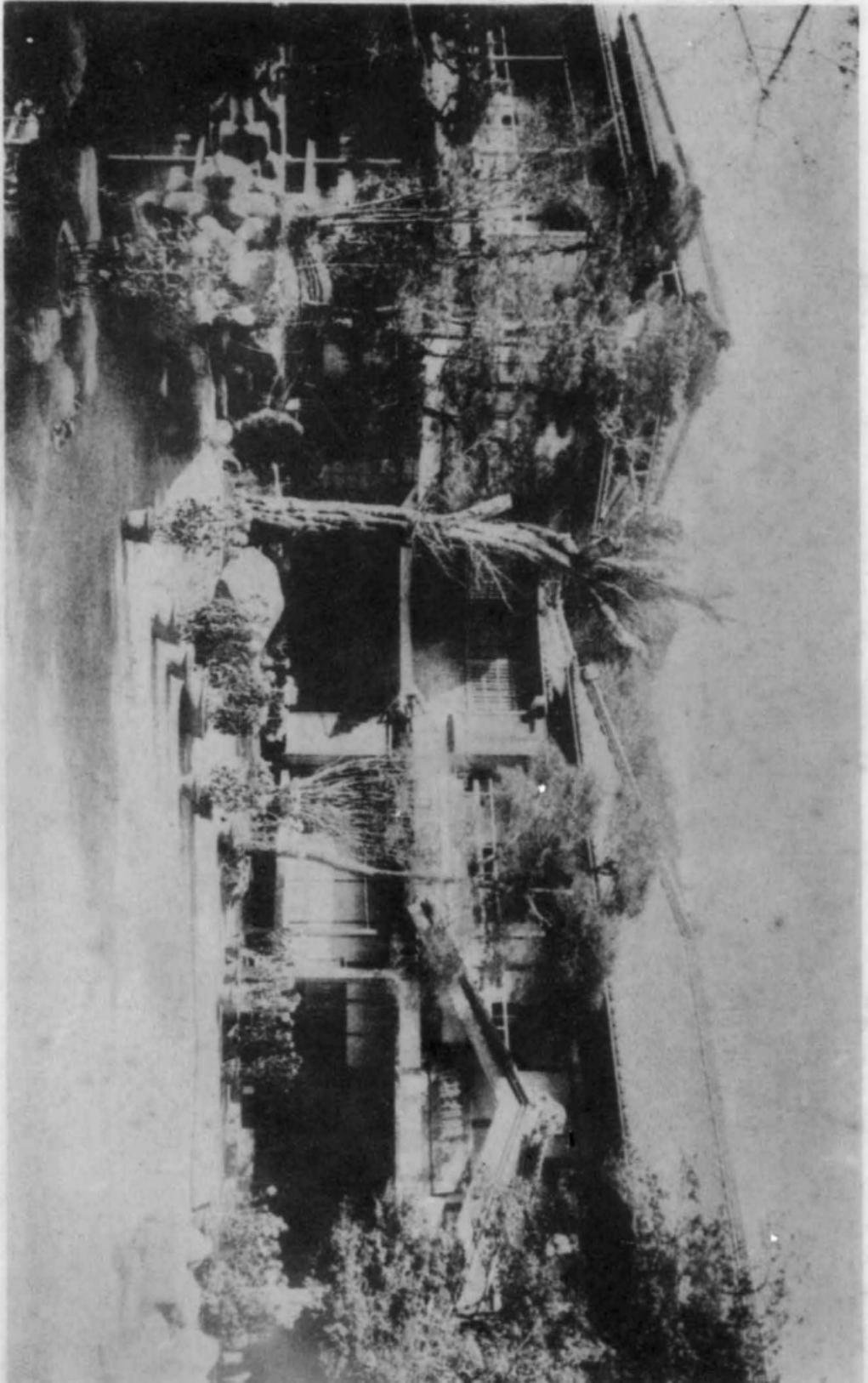
「内心大いに得意なんぢやないか」と言はれた時は口惜しくて「ヒト、どつちが？」と云ひ返してやりたうござんしたが、實際忸怩たる點なきにしもあらずで……。

町を出外れると、夢のやうな薄月夜でした。山廬しの寒いこと〜。感覚のないほどかぢかんだ手は手袋のまゝ、いつか先先のお唇に觸れてゐましたけれど、はつと心づいてもそれを……その頃の私には人の自尊心を傷けるなんてことは出来なかつたのです。冷たくブル〜と戰くばかりで……。

手に提灯ふりかざして、暖やかに取り囲む菊屋別荘の玄關前 夜風に吹かれて來たそれのみならで、赫と頬の火照るのを覺える。

お待受の座敷に通されて、くつろぐ間もなく、宿の者がぞろぞろといろんな事云つて挨拶に來ますので、どうしてよいやら顔のやりばもなくて、これを唯一の楣と手爐にかぢりついてましたが、そのうちに鞆の中からどてらを出すやうに云ひつけられて、私は先生に着せかけましたわ。

やがて湯殿へ案内されると……先生と御一緒の浴室、まあ思ひがけなかつたので……どんなに困りましたらう!! が、平氣!! あまり平氣でもありま



せんでしたが、兎に角一つ湯槽にも入りましたの。これが旅館の常習かも知れないと思つたし……無駄な羞耻や弱身を見せたくはなかつたからです。今ではとてもあんな勇氣はございませんけれどね、ほゝゝゝ。

同室に寝みますのだつても、一時はためらひましたけれど、何事にも先生の人格をお疑ひするやうな態度はわるいと思つたから、そのまゝ裸もへたてずに……。

身體の重みがふうはり沈むで行くやうな布團、糸織の夜具の袖は、シユッくと心地よく鳴りました。泉水に瀧があるのか、庭を溪流が通つてゐるのか、ドウぐといふ水の音は絶えず枕に響いて、まるで子守歌でもうたはれてるやうでした。もう何の不安もなく野心もなく、幼兒のやうな平安な氣分になつて、馴れぬ汽車疲れやら心疲れやらに、ちきうとくと致しましたが……。

何だか暗中じりぐと迫りよる一種の壓迫に堪えかねて、いきなり飛び起き

るや、ぱちつと電燈をひねりました。そしてすばやく綿衣の長襦袢の上へ羽織引掛け、次の間へ刎ね退いたまゝ、やゝしばらく私は恐怖と寒氣と腹立たしさとにふるへてゐました。笑はうと思つても顔面の筋力がこはばつてしまつて。先生は苦笑ひしながらしきりに、怒つたんですか、怒つたんですかと繰り返してゐらした。明るい電氣の下にまぶしさうに眼をしわめた間のわるげな男の姿は、白晝の田鼠を見るやうに醜く思はれた。(それ以來私は先生のおめがねとつた顔を見るのがいやでした、この時を連想されて。)

けれど私も……先生が何をなさらうとなすつたんだか……それまで問ひつめる勇氣はございませんでした。よし憤然と席を蹴立つて逃れ去つたとて、何處に行くべきところがありませう! 體のよい籠の鳥同様な自分の境遇を、一應顧なればならないのでした。どうしたらいいのでせう、あゝどうしたら未練も充分ありました。暁近くまで化石のやうになつて動かなかつた

のを、さもなくに詫びられなだめられて、もとの座に崩れ伏すと、もう夜も白

みかゝる時刻ないに氣がゆるんで、そのまゝ泣寝入りに……。

翌朝ふと日を開くと、障子にチラと鳥の影、次の室にはチン／＼と鐵瓶のた  
ぎる音がしてゐました。先生は枕の上に頬杖して、萬年筆とつてポケツト日記  
へ何か記入して被居いましたが、笑ひながら、今朝妙な夢をみた、君のことを、  
つて謎のやうな夢物語りをなさるので、私は思はず「あら、家の母さんにきい  
てらしたんでせう」と申しました。それは——以前にね、非常に懇望されたこと  
のあるなにがし中尉の事に似通つてましたもので。したらどうだ數蛇で、その  
後は何かにつけて、中尉々々とあてこすられて困つた。

でもね、つくねと見れば見る程、とても昨夜あんな振舞をなさらうとした  
方とは思へないほど、品のいゝなつかしい様子をして被居いますもの、あれは  
夢だつたか、と疑つてもみましたわ。

鏡臺に對ふと、擦り紅めた臉がぼつと光澤を帶びて、我ながらいつもの自分の  
とは別人のやうに、可愛く艶麗に見えました。意識して嫣然と笑ふと、半月形  
の紅唇を洩れてちらり前歯が輝く。

修善寺は隨分寒氣の激しい土地でございます。毎朝霜が厚くて湯殿まで行く  
うちに、スリッパ引つかけた爪先がもげるやう。もつとも室は表二階、風呂場  
は桂川の急流に面して、廊下づりに隨分長うございました。先生は日に五六  
回づゝも御入浴なさるので、お燭徳利のやうだと笑ひましたが、あら私は私は  
あまり好かないのと、それに一つは先生と一緒にやだつたので、成るべ  
く間を見て一人でそつと脱けて行かうとしましたけれど、先生の監視のお眼は  
なか／＼素疾いのでした。

が、お晝寝なんかなすつていつまでもお覺めにならないと、寂しくうらめし  
く物足りなくつて堪りませんでした。宿では朝夕塗板の献立表持つて、賄ひの

お伺ひに來ますの、丁度そんなとこへ來られると困つて仕舞つて……先生……と口まで出かゝつたのを飲み込んで、もし／＼とも起こされず、あなたも言へず、絶對絶命！腹立まざれに、だまつて手強くすぶり／＼した。先生つたら憎らしいほど平氣なもので、一にも二にも千いさん、千いさん。

で、みんな私の事を奥様々々と申しました。最初はあまりの事にはつと氣をのまれて、抗議を申込むだけの餘裕もなかつたんです。先生つてば、何に今にわかるさ、と笑つてばかりらして、躍起となつた私の訴へを取上げては下さらないんですもの。自分一人そんなに騒ぎ立てるのも足元を見透かれるやうで口惜しいから、つい黙つて了ひますと、妙なもので終には氣耻しくもなくはい／＼と返事が出來るやうになりました。

ほゝほんとに若人同士とは言ひながら、まあよくもねえ、庭先へすら一步も出やしなかつたんですよ。隣座敷——といつても左右とも廊下をへだてゝは

あましたが——そこにどんな人が居るのやら、お知己を揃らへるどころではなく、番頭に御機嫌伺ひに來られるのさへ煩らはしくて……する事もないのに一室の内に、顔ばかり見合つて過してたんですね。さう／＼先生は年賀狀をお書きでしたけれど……。私も少しばか手傳ひいたしましたが、何百枚かの中に桃代様や小枝さんへのも交つてゐるのを見出して、口惜しいやうな妬しい氣がむら／＼湧いた。

部屋は南向きのばかに日當りがよくて、少し縁側へでも出過ぎてますと、身體中の血がみんな頬へ上つて了つたかと思ふほど、ふす／＼と上氣ました。で、咽喉ばかりかわいて、サイダーとコーヒーをちゃんと飲んでゐました。蜜柑を焼いて食べませうなんて、二人して手爐に灰神樂を立てゝさわいだこともありました。

その頃の私は、女らしい女といふことが唯一の理想なんでしたから、どうし

たら慎しく上品にみえるか、どうしたら優しく可憐にみえるか、つてことにばかり苦心してたので……けれどもすでに發達の絶頂にあつた處女の、豊満な肉體の嬌羞や艶かしさといふものはかくすることは出来ません。甘くうるんだ瞳は活々と輝いてゐたでせう、唇も鮮かに燃えてゐたでせう。むつちりとふくよかな手首、しなやかに丸い肩！ カフヒーをいれて上げたり、林檎むいたりする風姿を、一種の藝術品として取あつかつて下すつた先生、あゝいつまでもいつまでも、その氣分で眺めゐて下さればよかつたのに！ 眺めてゐて下されればよかつたのに……。

大三十日の晩でした。私はまた夜一夜、まんぢりともせず、次の室の長火鉢に炭をつぎそへく、一心こめて墨すり流し、まき返し繰り返し、長い／＼手紙をした、めました。私はこれほど侮辱されながら、なせ怒つてしまふことが出来ないのでせう、囚はれたる心よとそれがくやしうござりますけれど……。

けど先生もあんまりな！　御たわむれにもせよ、あんまり程度が外れ過ぎる、

先生と呼びまつるその御名にも耻ぢたまへ、とばかり……。

やう／＼筆を擋くと、一番鶴の聲が朗かに響き渡つた。魑魅魍魎ももう影を  
ひそめる頃よとうれしい、火鉢に倚りかゝつてついうとく。丁度羽織の右袖  
の紋の所を、狐色にこがして了つたのも、この時の紀念でした。

先生をゆり起して其文を差上げますと、だまつてお読みになつたが、しばら  
く何とも有仰いませんでした。やゝあつて、

先生と云はれると、實に馬鹿野郎と一喝されたより冷汗が流れる、つて苦笑  
ひ遊ばす。おわかりになつたらそれでいいからと、私は引ねちつて火中に投じ  
ました。室内に充满したきな臭い煙!!　人にでも怪しまれてはと、つと冷たい  
縁へ出て、そつと戸を開けました。颺と流れ込む氷のやうな空氣、まだ星は  
燐爛とまたいてゐましたが、青い曉色は空にも地にも仄かに瀰漫つてこゝに

のみ夜の生命のこもつたやうな、樹立の茂みは物恐しいほど暗い。

先生は眞面目になつて、しんみり有仰いました。わるかつた、僕は君に對して耻づる。それほど敬虔・自重心を持つてる人とは知らなかつた、ありふれた情熱の女とばかり、見そくなつてたのがまちがひだつた。すべてを水に流してくれ！ 僕も幼い時から片親育ちで同胞はなし、ひとりばつちの寂しい境遇だつたのに、急に君のやうな人を得てうれしさのあまり、あんまりはしやぎ過ぎたかも知れない。もう決して君を泣かせるやうな事はせぬ。その代り聖なる兄妹としての僕の言葉は、絶対に背かぬといふ事を誓へ。君がそむきさへしなければ、僕も生涯見捨はしない、つて!! 私はたゞ、えゝくと涙交りにうなづいてましたが……その涙！ おゝ何の涙でしたらう、うれしいのか、悲しいのか……自分ながら形容は出來ませむ。何もさういはれたからつて、急にそれを信じ切つたわけではないけれど……一時のがれ、えゝ一時のがれでも何なん

でもよかつたんです。流石先生もその後は無體な眞似をなさるやうな事もなくなりまして、まづは希望にみちくた、樂しいく新春を迎へました。

兄君としての先生は「破天荒のこゝろみ」や「藝術のための犠牲」を名として、私を人形のやうにおあやつり遊ばした。それはこの旅行中の出来事を骨子として、一篇のローマンスを作り上げやうといふのです。嫁がんとする名家の令嬢、兄君なる法學士にすゝめられて、處女時代に名残りを告ぐべく旅程に上る。折しも年末年始、舞臺は豆相の温泉場、つてので、しまひにや自ら假定の人物になりすまして了ひ、いゝ氣になつてふざけたんですからたまりません。先生も小供だつたんですねえ、ホ、ホ、ホ。私もつい釣り込まれてね、デコ坊ハネ子嬢、そここのけといふ相棒をつとめたんですよ。その時分から幼時の特質だつた勝氣とお轉婆とをまたそろへ發揮してきました。

ガタ馬車に十五里をゆられくて天城山を越え、下田港から伊東へわたり、

月夜の海上を和船で乘切り、初島から熱海へ。伊豆山、湯ヶ原、と到るところ  
で新婚旅行とまちがへられ、または汽船にオイテキボリを食ひ、五右衛門風呂  
の栓を飛ばし、奇談百出したことは既刊『エンヂーナ』中の「名残りの旅」と  
重複いたします故、こゝにはたゞその折の日記の頁をそのまゝ左に……。し  
かしほんの心覺えに記入したものなれば、人にはわからないかも知れませぬ。

## 廿九日

## □日記一週間□

△朝のけしき、浴室、宿の模様、鍋島候、となりの室は實業家、△差向ひに  
なる食事時のきまりのわるさ、おまけに女中がお給仕に來てくれないのですも  
の。△年賀状四百枚、切手貼りで口の中がベタく。△夜、電燈の珠。△わ  
あひ早く寝た。昨夜のつかれで夢も見ず。

朝、味噌汁、海苔・半熟玉子  
晝、さしみ、椀盛、鯛のフライ  
夜、さはらてりやき、茶碗蒸、酢の物。

## 三十日

△けふも霜の深い好天氣、△寝坊した罰でどの浴室も満員、△食後何か甘味ものをと云つたら、餅菓子をコテ／＼重箱につめて持つてきた。見たばかりでも胸が充满、紅梅餅を半個ばかり食べる。△先生がこの日の入浴數五回。△その度にお供におつれ遊ばし、またお迎ひに行かなくつちやならない。同じ廊下を幾度となく往復、人の見る眼もはづかし。△終日居すはり、△先生は間さへあれば私のノートを御覽なさらうとして、滅多な事は書けず。

朝、バタ附パン、コーヒー、半熟鶏卵

晝、さしみ、魚でん、鯛あら煮。

夜、鯛潮汁、ぬた、鳴鍋。

### 三十一日

△日はキラ／＼と昇る。まあ美しい霜、庭の松の木などまるでクリスマスツリーの様。△午後から今日は初めて散歩に。△案外に寂れたつまらない土地。

△頼家の墓、指月殿、二位の政子。△獨鉢の湯、川の中に湧いてる温泉、石風呂。△釣堀の前で先生の知人にぶつかる。御夫婦づれ。某新聞の社會部長さんとか。△暫時立話の間、私は少し離れた道端に立つて、外方向いて知らん顔してゐる。△御運動でござりますか、へ、へ、へと番頭の追従笑ひ、いやな奴。

△全體温泉場へなど来て紙幣ビラ切つて、歯の浮くやうな輕薄なお世辭やモツコにのせられ、いゝ氣になつて尊大に治まり返つてる連中こそ、本當の客馬鹿だと思ふ。蔭では舌でも吐かれてゐやう。△先生にも何處かそんな氣風がおありになりはしないかと歯がゆく口惜し。△何だか直ぐに日が暮れた。△何室か

で謡曲が始まった。いやに今晚はガタつく、三つばかり向ふの部屋では三味線入りで淨瑠璃、三十三間堂棟木の山來、前門の狼、後門の虎、かう攻めつけられてはやり切れない。明日は糠味噌の味が變ります。△私達は月下の散歩。お美しいお月夜！ △金波を碎く桂川の清流。地上は凍て、金石の音響！ 夜風が軒毎の門松にざわつく。△宿では女中たちがバタバタと廊下の雑巾掛などして大騒ぎ。△何かときけば、元日は一日掃除をしないんですつて。福を掃き出すといけないから。△大みそかは例年徹夜といふを口實に、私だけ起きてゐる。△おひく更け行く寒氣身に沁む、火鉢に炭を割れるほどおこす。△百八の鐘が鳴り出す、あゝもう私も二十になるのか！ 何だかうそのやうだ、師走生れの者は一時に二つづつ年を取るやうな氣がする。つい先日の誕生日でやつと満十八になつたばかりなのに。△あゝさやうなら、さやうなら、明治四十四年。お前にももうあへない!!

朝、昨日に同じ

晝、オムレツ、さしみ、てりやき

夜、茶碗盛、牛鍋、野菜甘煮。

### 元日

△いよいよ正月。△霜ほどく、朝焼美し。△女中達がみな髪を光らす。△大好きなお雑煮、お口取の數々も並べられたけれど、何にも頗かれない。胸に物がつまつてゐるやうで。△先生は長岡とやらいふところへ、○○博士の別墅訪問。△玄関まで送り出す耻かしさ。お早くね——とそつと云つたのに、何ともお返事をなさらないで悲しい。△ひとりぼつちの寂しいお晝餐。△午後から梅林へ、ひどい霜どけの山路、十町あまり。△梅樹數千株、遙に富士山、双子山を望んで、花時はさぞと思はれるが、何しろ人つ子一人見えず、物悲しい風の音

ばかり。少々心細くなつてきて早々に下山。<△指先を胸に組み合せて、夕月匂ふ欄に凭りてみつ立ちてみつ。<△やつと五時過ぎお歸り、わざと知らぬ顔して、お迎ひにも出ないでゐる。<△樂しい晩の食卓をかこみながら、いろいろなお話。<△いよいよ明日出立。お夜食の後で荷物の整理。<△まあ、雨が降つて來たつて大變々々。<△すゝめられて温泉を飲む。味はひナメクジに似たり、一口で御免蒙る。<△雨は天をくつがへしたやうな大降となり。泣きたくなる。<△先生、どうしませう、どうしませう。<△人事意の如くならすさ、張子の虎ちやあるまいし、降れば降つた時の勝負だと有仰る。ほゝゝ塞の目みたいね。<△湯ヶ島で遊びませうか、伊東へ出ませうかなどとの説も出た。<△宿では引止策にしきりに言葉をつくす。<△どうも只今はいややは、とぞろぐお叩頭に來られて私はまご／＼、挨拶のしやうにまごつく。<△おそらくお湯に入つてねる、今夜の夢は十九折る天城山へ……。

朝、屠蘇、雑煮、口取（玉子、栗きんとん、二色）

車海老

晝、わんもり、さしみ、小鯛。しほやき。

夜、ぶり味噌づけ、茶碗むし、甘煮。

## 二日

△氣がもめてく、昨夜はおち／＼寝られやしない。曉から起き出して笑はれてしまつた。だつて靜としてはゐられないんだもの。△やつと雨だけはあがつたけれど、灰色の氣にかゝる空模様。△先生ト馬方ハ談判劇烈、宿の主人の仲裁、私はハラ／＼。△昨夜の雨にけふまたこの空合では道路も悪いし、とてもお約束の下田までは行かれぬといふのを、無理にもやれと云ふさわぎ。△七時過ぎ出發、道中の無事を祈る賑やかな聲々に送られて。流石何となく名残惜しい。△途中から下田道へ折れ込む。△青根村、十町吉奈温泉。△鞭の影に散

る雪。△到るところに初荷のビラ、馬の背に炭三十俵。△釣橋、鳥の聲幽なり。

△水車で木を挽く。△三里にして湯ヶ島温泉、よらず素通り。△いよ／＼天城山に入る。高き峰には雲迷ひ、深き溪には水音あり。△一鳥啼かず悲風蕭條。茫茫々と草はうらがれ、尾花はほゝけ、何だか髑髏でも落ちてゐさう。げに、うつゝにも、夢にも人に遭はぬなりけり。△馬車はゆられながら進む、馬の鼻息白く、空に輪を描く鞭おとのみ高し。△やがて黒き杉の並木……。△時々名産の山葵澤を見る。△ゆけど／＼……。△林間に白き煙ふす／＼と立ちのぼる、胸に沁むその色よ……。これ炭焼なり。こゝにも人生ありと思ふ時涙流るゝ。△先生はゴウ／＼と高いびきうらめし。△山々に白骨のやうな、立枯の木を多く見かける。きけば二十年前の山火事の名残とか。△天城トンチル、北の入口、馬の湯氣、茶店の活潑な老婆。△爐邊の會話、丁度一時、用意の折詰やサイダーを取り出す。老婆の手製だといふ苦い黒羊羹。私達のお鮓の殘物を

少しやつたら、うまがつて命のびたやうに喜ぶ。△トンチル二百四十五間、  
 ほんやりと馬車には燈火がつく。右も左も黒闇々、銀の雪がボタリ／＼八塞  
 地獄の底より吹き上ぐる如き冷たき風。△トンチルを出づれば忽ち下り坂。九  
 十九折ならぬ四百三十二曲りの新熟語。△幾度か牛に逢ふ、三四頭づゝ牛方に  
 引張られて。私は恐くて、すれちがふ度氣が氣ちやない。馬は好きだが牛は本  
 統にいや。△湯ヶ野といふ一部落につく、高等馬車!! 高等馬車!! の聲四方  
 にきこゆ、みな車中の二人を見返り見送る。何かの小屋掛から客よせの太鼓の  
 音ドコドン／＼。△馭者の案内で、河津川の清流に望んだ片岡といふ湯亭に入  
 る。△ほこりだらけの階段には驚いた、便所のきたなさ。湯殿はわりあひに清  
 潔、温泉も美し。但し私は入らず。△これより外には何にも出来ないとして牛鍋、  
 真黒々な七輪を座敷へかつぎ込む。むれまへの御飯は熱くて／＼、たゞフウフ  
 ウ吹くばかり。△誰のしわざか襖のらくがき、童子に髭、仙人に眼鏡、八羽織

にスタンプ、イ、氣味だ。△ガタ馬車に乗替、出發し。今迄のとは少し勝手がちがふ。上下左右に車體の動搖一入はげし。△はぢ紅葉と老薄、夕暮迫る山路をゆく、豆腐屋のやうなラツバの聲にはやされながら。△ふと目をあぐれば遙に相模灘の夕潮、酒よりも濃く湛ゆるを見る。金朱を流す落日の夕映、山も海も先生も、みな赫焉として燃えんとする。△河津のトンチル下り坂。チャン／＼チャンと威勢よく鈴が鳴る。△川にそふてうねりくねり。學生二人、馬車を呼び止む。まあ、先生はいちわるね、乗せてお上げなさればいいのに……。△日は全く暮れて水勢のみひとり高し。提灯、プラ／＼頬かぶりの男、追々鏡花式。△茶店の猫。舌なめづりをしつゝ馬車に戻り來りし馭者、ぶうんと安酒の香あり。△「今宵ぬる町の灯ゆびさして、峠の茶屋に君をいたはる」△遠く下田の灯見……。△下田の町。久津輪館、一名浦賀屋。此地では一番の旅館だと馭者に連れ込まれたけれど、修善寺の贅澤な設備を見馴れた眼には、丁度

月と朱益ほどの相違、△先生は襖一重の隣室のふさがつてるのがお氣に召す。乃公の外交手腕を見よやとばかり、何か主人に有仰つて、とうとく其奴を別室へ左遷仰せつけてしまつた。△留宅の間に穴をとられた蟹、フンガイしまいことか、女中達を捕へて無暗とあたり散らしてるのが手にとるやうに聞える。△一寸お湯にでも入りませうと湯殿へ行けば、サア大變。△先生の大失敗、お風呂の栓を飛ばしちやつたところ。アラ／＼アラ、ホ、ホ、ホ、、と轉がるやうに、ひとり逃げもどつて來て了つた。後の事は知らず。△斯瓦矢飛白の羽織着て桃剣に赤い櫛さした、十七あまりの田舎なまり可愛き娘のお給仕。おさしみについてるのが山葵ちやなくてすり生姜。△食後、町へ散歩に出る。活動寫眞にでも入つてみやうと行つたら満員。寒くて／＼寒になりさうなお天氣。向側の料理屋では、皮のたるんだ三味線ペコ／＼。藤八拳の掛聲、ハツトツハツと盛んなり。△宿の廊下で行き合ふ人物、どれも／＼恐しげ。港とて船方の

者多き故ならむ。

朝、前日に同じ

晝、すし、牛なべ

夜、碗盛、さしみ、煮魚、蛸の酢の物、猪口（煮豆）おひたし。

### 三 日

△せき立てられて朝飯をすます。

△高島田の女中張子の虎をきめ。

△小さい

下田の港。

△八時半の出帆ときめたのに何のこと、それから三十分も待たされ

て、やつと切符を賣り出す。

△頻りに住所姓名年齢をたづねられる、土左衛門

の時の用意かと悲観。

△さまぐな積荷と共に解艇に乗り込む。

△天城丸白嶺

あまり。

△エメラルドグリーンの波湧く。

△臭い船室には御免々々。

△客だつて大笑ひ、△ござの上に毛布、鞆枕のゆられ／＼、△あれ山が走る、断

崖に波が碎ける。かもめが一羽ツーいと。△二つばかり何處かへよつて稻取へ

がん

なみ

くだり

つく。△おどかされながら二十分の上陸、私もいつしよにくつついで。心配してゐた船暈はさほどでもないが、流石に一寸でも陸地が懸しくてならなかつたのですもの。△稻取は有名な模範村だとか、けどあてになりませんわ、私には。

△先生は村役場訪問、貰つてらしたのは曆みたいな薄つぺらな二三冊の報告書。これが今に御演説の材料、二十分速成の視察談！ほゝゝゝ、けど世の中つてみんなこんなものねエ。△次は川奈を経て伊東着。こゝでも一寸上陸しやうとしたら、船員がしきりにとめる。△が、他に郵便局へ行くといふハイカラ紳士も一人、同じ舟で。△先生がおわるいんですわ。遅くなりやしない？ しない？ と私は氣が氣ぢやなかつたのに、町中引張りまはしてさ、とう／＼オイテキボリなんか食つちやつた。まのわるい事おびたゞしい。オーラーと得意の轟聲！ △落日を招き返す扇ならで、いくらその太いステッキなどふりまはして、お呼びなすつたつて無駄なこと。みんな笑つてるぢやありませんか、もう

お止し遊ばせよつてば。△すこぐ引返して暖香園。満員とことはられて、その向ひの伊東館へ。△こゝにも室がない。負け嫌ひの先生こらへかね、是が非でも今晚中に熱海へ行くと頑張り、最初網代櫻花やを呼ぶと、二挺六人が入りで十三回。△それより和船を仕立てさせやうといふ相談になると、丁度好都合には沖の初島への歸り舟。△十回と吹く舟賃を、八回に負けさせるその談判ぶり、なか／＼面白い。△私はどうなる事かと、だまつて傍観してゐる。私が一言いやと言ひさへすれば、今夜は伊東へ泊つて明朝の汽船で出發といふことになる。すれば何も急ぎの旅ぢやなし、そんな冒險をする必要もないのだが、先生の街氣に私の好奇、前に油だからたまらない。△終に船の相談まとまる。△早めに夕飯、おひるぬきだつたので、胃袋は空いてるけれど、行途が案じられて一膳でよす。だつてもしや舟中で、デパートメントストアの開業なんか餘り艶消しですもの。△白鷺長き鷺の主人、調子のよい女将。△人のいい老番頭

に送られて海岸に出づ。サク／＼と砂を踏んで……。△月の出潮、波に金蛇走る、詩的！ 小説の口繪!! △おふさつて船に乗る、十人櫓、荒くれ男。△敷物もない舟底へ、それでも自分達の古外套、しめつぼくなまぐさいのを敷いてくれる。こは／＼坐る。△澄みのぼる月影。△瑞麗なる月下に白雪の不二の山頂を見る。△空にはいつか羅の如き白雲流れて、一明一暗、あたかも夢の如し。△沖中で船頭少々ぐづり始めた。その位なこと豫期せぬでもなかつたので、此方は一向驚かず。△先生一喝して曰く、乃公の尊父は船長だい、おれだつてかう見えても、玄海灘を乗切つたこともあるんだぞ!! △私は危く失笑しさうになる。けど船頭なんて、流石は島根生で氣が小さいのねえ、熊襲のやうな大男、白面の瘦男一疋にへこまされてぐうの音も出す。△折しも俄然として天曇り、風位變り、帆を引き下すまもなく、船は木の葉の如く動搖した。頭上から浴びるやうに降りかかるしぶき!! へこれはと千いさん些少たちろぐ。△

しかしこゝで船頭達に弱身をみせては先生の御迷惑と、ふなばた叩いて大いに痛快を叫ぶ。△おかみさんは活潑だ、まつたく!! には驚いた。△初島へつく。何も伊東から熱海へ渡るのに、こんな處へよる必要はないのだが、船頭先刻の言葉の行きがへりから……。また私たちとてわざ／＼見物にも來やうといふとこ、丁度いゝから初島へでも大島へでも寄つて行けと……ほゝ相手がわるいわ。△先生からいろ／＼と初島の風習や物語りきく。船頭よけいな口を出して叱らる。△いよ／＼熱海へ船首を向ける。△現金なもの、もう安心と思ふとふら／＼して、我慢にも頭が上げてあられなくなり、手提袋枕に横たはる。△よく寝入つたな寒かんべ。苦でも引かぶせといてやつてんべ、なんて云つてた。△眠つたふりしてそつと薄目を開いてみる。月天心、渺漫たる浪の上!! 海上の夜風の寒いこと、手足の爪先なんぞ感覚がない。△先生は鼾聲雷の如し。のんきな方つてば。△漁火明滅、△帆は追風をはらんで一直線に走る。△十一

時過ぎ、熟海横礫着。もうなつかしいやら、先生に取縋つて泣きたいやうな氣分になる。△あゝ一月十七日の月はどんなでしたらう、どほんぐと寂しい浪の音。△まあこんな石つころだらけの場所で蹴飛ばされてはたまらないのね——。何、貫一宮さんの活劇はもつと向ふの方だつたよ。△一人だけ船に残つて船頭數人後からぞろくくつついて来る。まるで送り狼、時々そつとふり返つちや、失笑さすには居られなかつた。△御用邸前の青木館、先生は長らくの轉地療養で、我家のやうになすつてる旅館。大歓迎!! △何はともあれ浴室へ。温泉は鹽類泉、石鹼がきしむ。なか熱い。いゝ氣持に温まる。△座敷にはすでに先着のトランクや膝掛が嘲り顔。ほゝ、甲板上へ置きざりにして來たそれが。△でも私たちはかへつて面白うござんしたわね、あの汽船でもつて平凡に此地へ着くより。ほんたうに一世一代の思出ですわ、などと語り合つて笑ふ。△サイダーを飲んで寝る。綿のやうに疲れた身を香ばしい絹夜具

の裡に埋めて……

四日

△二階——けれども三階ですわ。△海の日の出美し。壁にうつつた兩人の影。

△お宮の松、熱海のガイリヤク。△俾をつらねて觀魚洞へ。△サツポーの懸崖にたとへられた魚見崎。△風が烈いこと。△石を投げた事。△陸上松島。△引返して梅林見物、十八町餘、けど細い上り路だから車輪の轉廻がはかどらず。

△誰もこんなところを俾にゆられて行く者はありやしない。みな不思議さうに車上の二人を見るので、車夫は湯玉のやうな汗を流し、私は冷汗。△修善寺の

梅林はまだ蕾へふくらまうとはしてなかつたのに、此地のは雪と輝く眞盛り、殊に例年より早いやうだと云ふ。満地の芳香、潺々たる溪流。△花下の逍遙、枯草にすべる。△成金のやうな人、昨日もうけた金を今朝使ふ。△白鷺の如き傷病兵、新婚の大婦、華族らしい人、御後室様、女學部の生徒。△黒髪に散

りかゝる舞。△歸途來宮の大楠、ほとゝぎすの名所。△水道の爐邊池。△歸途  
 薫養。萬屋の美人の話で大笑ひ。△一体どの娘を張りにいらして? ときいた  
 らどやされた。ほゝゝゝ。△午後一時何分熱海發。輕便鐵道のこと、一名不  
 便鐵道。ブリキ細工のおもちやの方が餘ツほど氣が利いてゐる。△伊豆山で下  
 りる。伊豆山神社、走湯明神を祭る。△源頼朝の新婚旅行地。石橋山で敗れ  
 た時こゝから逃げた。△温泉場は崖下の一部落、磨滅したデコボコの石段二町  
 餘を下りる。△相模屋、千人風呂。訪ねる高松さんは御不在。△大町桂月先生、  
 親しみのある老書生風。大海に面した眺望。大町先生のおすゝめに任せ、今夜  
 はこゝへ泊らうかといふ事になる。△その内高松さんがお歸りになりましたと  
 のことで、そのお室へ行くと、同室の木内さんは私の未見の知己。共に醫科大  
 學生。△きけば外にまだ先生のお知人が四五人ゐられるやうな。いたづらが恐  
 いからと急におち氣立つて逃げ立す。△満員の輕便、等へ轉がり込む。私は

實際伊豆山に未練があつたのだけど、△神經衰弱的の汽笛をあげてピーコガラ／＼。△門川驛着、茶店の婆さんを買收して・買切の馬車に二人並ぶ。△伊豆と相模の國境、△月出づ、あけぼのぞめの空。△三十町、ミカンの樹とあじろがき、△湯ヶ原温泉、一番奥の天野屋へつく、あぶなく満員と謝絶されやうとして、先生といふことがわかり、大騒ぎして迎へ入れらる。△あまり女將の調子のいゝのに煙に巻かれる。此宿でのみ始めて嬢ちやま嬢ちやまつて、ほゝ。△快き新館の木の香。湯殿からの歸途迷子になつて了ひさう。此地の温泉は火傷や負傷にいゝんですつて。△去年先生が此地で越年遊ばした時の、滑稽談などきかされて暇やかな夜食。△おそらく散歩に連れ出される。一寸修善寺に似たやうな地勢。藤木川の清流黄金をほとばしらせ、兩岸に立ち並ぶ温泉宿の湯煙ほのトトと。地上にはダイヤモンドの碎片をまき散らしたやうな霜が輝いてゐる。△これも社會研究と小さな寄席で、豚が風邪聲を振り絞るやうな、

浪花節なるものをはじめてきく。驚くべきほどいやなものなり。△いつか見附の老松の下……。△先生つたらもういや、私の肩につかまつてステッキの代用になすつたり、大きな聲でデカンショなんぞおどなり遊ばして。人が酔つぱらひとまちがへます。△夜は深更まで起きてゐて荷物の整理。

朝、バタ附パン、紅茶、ミルク、菓物。

晝、碗盛、さしみ、ゑび具足煮、かます鹽焼。

晩、まぐろさしみ、さつま汁、玉子焼、小鳥のつけ焼。食後蒸菓子、コー

ヒー。

□ 憎からぬ人のきせたる濡衣は □

五日はいよいよこの旅行の終の日、國府津から先生は新橋まで。私は藤澤驛からお別れして自宅へ歸らねばならぬのが、どんなに心細くうら悲しうござい

ましたらう。汽車中でも我知らずふさぎ込んで仕舞つたのを、一二三日中に必ず訪ねるからと慰められて、夢から醒めたやうにばんやりと。喜んで迎へまつはる母も妹も、もう眼中にはありません。なつかしい思出にのみふけつて口をきくのも物倦く、何事も忘れはてゝ過してゐますと、三日目に先生がお出下さいました。私は飛びつきたいほどうれしうございました。が、先生は聲をひそめて、ねえ君、歸京てみたら大變なことになつて了つてた、君と僕との評判は、つて先輩からの忠告状めいた手紙などもお見せになりました。それは正しく私も知つてる某先生の御手蹟でした。

けれどもそれは覺悟の前ぢやありませんの。私冤罪ならば何と言はれたつてかまひませんわ。『藝術のための犠牲』ですもの、仕方がないわ、ときつぱり申すと、僕はむしろ冤罪でなからむことを望む、つて顔すりよせてさゝやかれたけれど、御誓言にちがつたことはいや、と背を向けてしまつた。そして今一通

は三年以前、先生が御病氣で熱海に静養してゐられた時分のもので、方今天下に其人ありと知らるゝ才人……彼とは是とを並べておいて一對のお雑様にしてみたならば、三千世界の鴉が云々……なんて、あんまり意外なものだつたので、まあと云つたきり頬が紅くなりました。そして何と思つて今までこんな手紙保存してお置きなすつたのか……先生の心中をはかりかねた。まだ互に眉の端をすら仰ぎみぬ先から、二人の上にはそんなあやかしの糸がまつはつてゐたのかと思ふと……さうしてそれを知らぬ顔して、これまで接近なすつたことが恨めしくもあつた。

何處から洩れたものですか、私のお友達……殊に文壇の方面には縁の遠い筈の、お裁縫の生徒たちの耳にまで入つたものとみえまして、みんなからいろんな手紙が舞ひ込みました。

ましてや御交際ひろき先生は、四方八方から蜂の巣をつゝいたやうに彌次ら

られて……中にもY様やU様なんかひどいんですよ。餘り、餘り手痛いたづらなさるんですもの、うらみましたわ。が、よく何々紙上にどんな事が出てゐたの、何々俱樂部の連中がこんな事云つて騒いでるさうだのときかされましても、それが決していやではなかつた。むしろ内心うれしくも痛快でもあつたのです。

世間つて世話焼なものだ、どうでもいい、自然の成行に任せやうぢやないか、なんて有仰る先生のお言葉のまゝに、兩人の間には一日一信といふものが取交され始めた。

厚いく封書のこともあるが、短かいエハガキのこともある。ほゝ、封中は言はぬが花でござんすが……毎朝御出勤前のお樂みの一つであるときいてから、一日でも御失望がましい思ひをさせてはすまないと……。千いさんの使ふ端書や巻紙は、いつもいゝ匂ひがするね／＼と云はれ／＼して、氣がついてみ

るとそれは白粉の移り香でした。

あゝ鶴沼の松原の

蔭に家ありまとひあり

このをりいかに語るらむ

埋火の灰かきながら。

別れておもふ人のこと

何とはなしに胸をざる

今宵せめては我が夢に

君よ來れと念せしが。

返し。

こぼる、髪を搔き上げつ  
凭るになれたる小机に  
今宵も伏して目をとぢぬ。

振りの紅絹うら八つ口や  
秀眉ほころ若き子が  
春の灯恥ぢて鳩のこと。

おぼろ月夜の宵々を

ひとり思ひにかきくれて  
君悲しさのたえがたき。

し  
知り給はずや柔胸に

秘めし小琴の亂調子  
ちの動悸たかき苦しさよ。

ホ、こんな時代もあつたと申しますのですわ。そのくせ逢へば何にもお話し出来なかつた。明るい灯の影に打ち背いて、詮方なさの手すさみに、羽織のひもや、机上の薔薇の鉢植なんぞをむしつてむしつてむしり散らして、血の様な葩のいつぱい散亂した中に、ちつと坐つてたこともございました。眼と眼が相合ふと唇邊に微笑が湧き上つた。まるで蜜をサツカリンで煮つめた様な舌だるいほど甘い／＼氣分にひたつて……ほゝでも別段むし歯にもさはらず

……。

くろかみながく

やはらかき

をなんごゝろを

たれかしる

をとこのかたる

ことのはを

まこと、おもふ

ことなかれ

こひするなかれ

をとめごよ

藤村詩集を頬にあて、その一節を微吟しますと「さうか、そんな事思つてゐ

のか、』つて、先生は泣堇の、

さらば地の神、汝が領に

顔かゝやきて胸冷えて

# 御苑に立てる石彫の

女神に似たる子はなきや

先生のお聲は美しかつた。私には天來の音樂とも響いた。清らかに涼しくて若々しく、熱もこもり光澤もあり、……そしてよく小説を朗讀して下さいましたつけ。中でも金色夜刃がお得意なんでした。貫一や荒尾の白はお上手に出ますけれど、満枝や宮さんのこはいろときたら失笑さすには居られなかつた。先生、活動辯士におなり遊ばしても、たしかに成功でござりますね、つて。けれどもいつか恍惚と魅せられて了つて、伏目にきゝ入るのが常でした。その力を貫一の麻顔に集めて、富も貴きも、乃至有りる利慾の念は、その膝に覺ゆる團の微温の爲に溶されて……」げにその膝に覺ゆる團の微温のためにならかに溶されて……。

## 口悲劇？喜劇？口

え、先生は大概土曜日毎にやつていらした。世人はそれをみんな私のせいにしたけれど、なんの、あれほど弱氣の強い功名心の燃え盛つた青春の日を、浮かべ、戀愛にのみ没頭しておられるやうな先生ですか。東京をお離れなさるのは何か秘密を要する新しい事業のためなので……つまり私はいゝ口實にされて了つてたので、思へば口惜しいつてありはしない。

でも嬉しかつたんですわ、月日の過つのは惜しいけれど、土曜日の來るのは一日千秋と待ち焦れた。前日あたりからもう執事も何も手につきやしない。家を出る口實に苦しみながらも、私は乾度ステーションまでお迎ひに行きますの……目に見えぬ何ものにかひかされて……。

ちつとプラットホームの柱に倚つて袖を抱えてゐる間の胸の轟き、血潮のさ

わざ!! またと世界にこれほどの幸福を抱いてる人間はないやうな気がして……ましてや、ましてや、流るゝやうに瞳まなこをあげて、滑り入る列車の窓を見迎へる時、一二等室の一つに眞面目に取澄ました態度の、先生のお眼鏡が光るんです。私はつとめてゆるやかに歩をうつして、うやくしく一禮しますと、いつも「どうした」と力強い小聲で有仰る。

それはよかつたがある日、黒縮緬の長羽織を召していらしたには失笑しました。しかもね、華手な友禪羽二重の裏がちらつくんです。どうにもかうにも我慢が出来ず、私は顔を上げ得ませんでしたわ、電車の中ですね。だつて見さへすればや直ぐ、くすりとやりたくなるんですもの。他人の目にだつて同じだつたんでせうね。たしさへ細いーー痩せた方が、黒縮緬のどつしりしたのなんて、まるでお芝居の長袖みたい!!

内のおふくろにも困るね、こんな物ものこしらへて仕舞つて……雄と雌めとまち

がへてるんだ、なんて苦笑して被居したけれど、おいやら召さなければやいと  
のに、それほど唇上に御柔順なのか、それとも矢張りお氣に入つてゐるのか、鬼  
に角先生がこのお羽織召したときには、私は決して御一緒に歩かない、と誓言  
いたしました。

ほゝゝゝ雨の降る日なんか相合傘なんですよ。人通りもない冬ざれの田舎  
道だからいやうなもの、自分より背の高い人に傘さしかけてゆく苦心さつ  
てありませんでしたわ。けどさうして片袖濡れるのが、かへつて嬉しそうござい  
ました。

飛行器厭なも持つてはらひも、脚厚で飛ばしたことあります。まる  
でラチもない子供みたやうに、砂走れになつて走りまはつたんですよ。でもク  
ルームと回轉つてばかりして、些とも上天ないうちにすつかり破つちやいまし  
た。殊のついて來たがるのをよく邪魔にしましたつけ、ほゝ。寡言で内氣で

はにかみやである筈の私が、こんなカラ騒ぎをするの見て、母も驚いてみたが、うですけれど、何とも申しませんでした。

日本髪は田舎くさいつてお嫌ひなんで、いつもサラ／＼した油氣なしの、束髪も何か人とは變つた特別の結方。服装などもバツと人目につくやうな、ハイカラ風がお好きでした。御自分でもお粗末な板草履がいつかゴム裏の南部表に、紺足袋が紺足袋にかはつたり、追風が二三間もかはるほど香水を匂はせなすつたり、氣障など目にあまることも多くなつた。私は矢張り昔のまゝの無骨な先生がなつかしかつた。

ところがある日、ふいとお見えになりまして、これから鎌倉の海濱院へお晝餐食べに行くからつきあへと有仰います。そしてもう時間がないから早く早くと急き立てられ、髪かき上ぐる暇もなくいそいで仕度してお供いたしましたが……海濱院の食堂では困つて仕舞ひました。だつてどつちみても西洋人

ばかり、その四邊憚らぬ甲高な話聲や、腕環や耳環のきら／＼と滴るやうなきらめきや、軽快な肉體の香や、ストーブと人との息れに火照た暖氣や、いかにも自由な快活な面白さうな空氣の中でありながら、髪の色や眼の色からして重くるしい冴えない顔色の、くすんだ間色の服裝をした自分等日本人が、見るに堪へぬほど痛ましく悲しい氣がしました。エキゾチックの暗愁に打たれた、とでも云ふんでせう。氣怯れがしてしまつて、ナイフ一つも満足には使へやしません、その内に逆上が頭に上つて、耳が鳴り出す、油濃い料理の匂ひ!! 杯にあふるゝ紅の酒の色!! 私は目眩めいてふら／＼と、思はず卓上に俯しましたつけ。

それから遅子へ……浪さんで名高い、浪切不動へもまゐりましたわ。あの海沿ひの細い崖路を、黒の羽織と紫がもつれ／＼て……。

私はまだ頭痛が癒らないので苦しくてたまりませんでしたけれど、そつと指

さうに額をさゝえて、よく語りよく笑ひましたつけ。けど、餘り強い花の香に中  
毒したんでせう、私は、私は……。

たつた二人きりの二等室内で、ピンと錠なんか下して仕舞はれると、私は先  
生が恐くなつて来ました。もう世上の取沙汰に對しても、このまゝでは済ま  
れなくなつて了つた、と有仰るんですもの。

『お兄様のくせにいけません。』と聲をあげる度、最初の中はあはてゝ身を引か  
れたのが、へ

『こんな兄妹があるものか、千いさんが懲しくつてたまらない。』なんて、接吻  
なんぞされやうとするのが、身震ひするほど厭はしかつた。およし遊ばせつた  
ら！ 切角の白粉がはげるぢやありませんか。牛にでも舐められたやうでベタ  
ぐと氣持のわるい、と飛び退いて笑ひました。が、先生はこんな事を、みん  
な思はせぶりだと解つてゐらしたやうです。ですから些とも、癖易なさりやし

ませんでした。何處までも……私はいふものを、最後まで解しちやあ下さらなかつたんです。萬事に「レコード破り」を標榜して被居りながら、兩人の間柄だけは月並で行かうとなすつた。そのそぶりに充分心づきながらも、私はどうする事も出來なかつた。

いつたい先生は遠望の美の勝つてゐる方でした。馴るゝにつれて私には、いろんな事が眼についてならなかつた。戀人の眼にやあばたも醫とやら申しますけれども、どうぞですわ。なんて數へ立てれば、自分の方にこそ何一つ取柄はなかつた。鏡のない國に育ちはしまいし……つくづくと打まもらるゝ時など、面をおほはずにはあられなかつた。寝むるは曉りときゝなされて……。

幼い時から父母にさへ、痛いともかゆいとも心の底は知られた事のなかつた子でござります。少しばかり心もついた今、どうして、どうして先生の前に、偽らぬ胸裡や自己なんものが披瀝されませう？ それはお求めなさる方が無理

なんでござりますもの……。猜疑でも嫉妬でも羨望でも不平でも、人一倍烈し  
い質なんですのに……。何事も去り氣なく云ひまざらせたり、笑つて仕舞つた  
りするのが癖でした。で、何か秘密があるだらうの、心配事があるだらうのと  
は始終せめられまゝたが、「謎の女」なんて一時世上に流布されましたのも、先  
生が言ひ始められたのでござりますわ。

とう／＼連れ出されて大磯の招仙閣へまゐりました時なんか……屋をゆる  
がして烈風吹き荒ぶ日でした。寒星天に震ひ、大地吼へ、遙にとよむ濤の音!!  
しかも一軒建の難家に、十時過ぎ女中がすつかり戸じまりをして退つて了つた  
後は、ほんとに心細うございました。が、咄嗟の間に、すりぬける位の用意は  
いつでもあつた。如何ほど甘い言葉の數々をさゝやかれても、私の胸には小波  
も立らせませんでした。一日でも離れてあれば、身も世もあられず懸しい人だけ  
れど、かうして差向ひとなつてみると、指一本ふれさせるのも恥みました。ど

んな心強いことでも平氣で言へた。たとへ腕力沙汰に及ばさうつたつて、その袖の下を飛鳥のやうに刎ねのけ、搔いくゝつて、火鉢の灰など目つぶしに引摑んで攻勢をとられた日にや、先生にはどうなさる事も出来ないんでした。私はあの夜ありたけの紅涙しばりつくして、長い夜すがらを泣き明して了つた。

あゝ運命は急轉す、千いさんの運命は迫りつゝあり、煮えつまりつゝあり、奈如とするか。たゞ覺悟一つ、カクゴとは讀んで字の如し、なんて荒尾もどきにやられるのだからたまらなかつた。私の望んでた戀は地上のものではありませんでした。

先生、先生、餘りでござりますわ。何が餘りだ、君はいつたい僕を何と思つてゐるのだ、手紙に書いてくれるうれしがらせは、ありやみんなうそなのか。あら、そんな事が！　ひどい、ひどい。それが眞實ならいつまでかういふ状態で満足できると思ふのか、まことの戀人同士つてこんなものぢやない、と有仰

るの。性慾的交際のともなはない間柄ならば、たとへ如何様に熱烈な親しい異性間であらうとも、それは單に友情といふに過ぎない、つて。そんな事つてないと云ひ争ひましたけれど……肉體に關係のない神聖な戀愛なんてものは空想に過ぎないと喝破されて、かねて恐れてゐた或る物に、ぐわんと突きあてられたやうな氣がした。

私それまでは戀する意味も目的も、結婚だの男女關係だのといふものゝ眞想も、どういふ神秘のあるものか、はつきりと意識することは出來なかつたので……それを露骨に眼の前に打ちまけてきかせられ今更のやうに忌みおのゝかずには居られませんでした。あゝ現實曝露の非哀!!

私戀つて、今までの先生と私のやうなものとばつかり思つてゐました。私はこれ以上何にも外に求める物はない。これが戀でないといふなら……ほんとうの意味の戀をと追及なさるなら……私は、私は、もう人間を廢業したくな

くちやつた!! ハ、、、自由廢業か、それもよからう、死ねるなら死んで御覽。

と先生は冷たい、そのくせ燃ゆるやうな眼をしてぢつとみつめてゐらした。

思ひ出しても傷しく悲しい、靈と肉との争鬭はその後しばらく續きました。

みんな私の理想主義がわるかつたんです。餘り人生を高尚なものと信じつめさ

せられてゐたから……幻影消滅の悲劇にぶつつかつたんです。けれど「観照」

の觀念なんてものは皆無だつたので、明らかに自分を了解し、人を理解し、事

件を解剖するなんてことは出来ません。否、知りません。ひたすらに現實の醜

さ不快さを卑しむ傲慢な心と、怖れ厭ふ單純な弱い心とばかりで……そのく

せどんなに泣かされても虐げられても、どうしても思ひ切ることの出来ぬ執着

が先生の上にあつたんです。先生もまた何故男らしく、私を突き離しては下さ

らなかつたらう。おどしたりすかしたりなだめたり、それもいゝが美服は欲し

くないかの、芝居へは行きたくないかの、そんなこと云つて機嫌をとられ、ば

どしれるほど、口惜しさと憤りとに狂ひ立たずには居られませんでした。

ねえ、千いさんは僕を可愛いとは思つてくれぬのか、なんて肩に纏かれる手を振りはらつて、女に向つて愛を求めるやうな事でどうします、すべてを投げ捨て、膝下にひざまづかせるやうな權威と魔力をなせ持つて下さらない?! 莫迦迎な、そんな人格の人間がこの世の中にあると思ふか?! なければないでかまいません、強ひて求めては居ないんですから。何故いやなのか、と問ひつめられても、それには返辭が出来なかつた。僕が病身なのを危んでか、とも責められた。何を恐れる、僕だつて自分の子ぐらゐ養ふとのできぬやうな意久地なしでした。先生は何でもかでも現實の方面ばかり見て、私は消え入りたい程厭なん何の理解も同情も持つちや下さらなかつたんですもの。

母は……母すらも私たち兩人の間柄については、臆測に苦んでゐたやうで

す。けど、眞想は知りますまい。私も、私もまた表面は相愛の人としての態度に甘んじてゐた。世上の噂は噂を生んで、やれどここで私の丸齧姿を見かけたの、やれ日向の大ころみたいにとち狂つてゐる、その作品はみんなK先生の代作であるのなんのとやかましいことでしたけれど、ついぞ否定らしいことも辯解らしいことも、試みたことはありません。

西片町のY様のお宅へ兩人してお招かれした時なんか、Y様の御令妹やその御學友、先生やY様の口惡仲間も二三人。永い春の日の暮るゝも忘れて、お二階の抜け落ちるほど騒ぎました。

その時皆さまが好奇心と、またそればかりではない女に特有の眼をもつて、私を絶す御覽になつてゐるのも承知してゐました。私はもう口惜しくて衆人監視の中には、少々自暴氣味の自分といふものを投げ出してゐたんです。あの時分の私の胸裡の寂寥さ!! いくら強ひても羅漢廻しやお茶坊主の組に入つて、他愛

もなく笑ひ興する事は出來なかつた。

手持無沙汰に俯いて……それも耻かしいんぢやないんです、氣取つてゐる  
でもないんです。たゞ心から寂しくて世の中がつまらなくて…………が、誰も  
／＼かういふ尊大な取澄した女と思つて被居るらしい中に、丁度隣席にあらし  
て、二言三言慎しく話しかけて下すつたのは、なよ／＼と風にもたえぬ風情で  
あつた、御風姿も優しい須磨様でした。心の其處になかつた私は、定めしトン  
チンカンな應答をして、御失望させましたらうけれど。

私に次いで一同の好奇の瞳をあつめてゐらしたのは須磨様でした。そのお身  
の上には痛切な、ふしげなローマンスがおありなのださうで。

須磨様お歸りになつて後、座中は一しきりそのお噂でもちきりでした。何誰  
も非常な御同情であつた。私はそれが……他人からの同情を羨むやうな、  
そんな子ではないつもりだつたけれど、けれどひそかに妬ましかつた。世にそ

むいたる私はさびしい。

上京して先生とお目にかかる時は、屹度劇場かカフェーかで、御自宅の方へお伺ひする事は滅多になかつた。御母堂に私をお見せなさることをひどく氣にされたので、たまくまゐりましても、下でお母様と少しお話でもしてゐますと、何を言つてゐたのだとか、どんな事をいはれたのだとか、後で根ほり葉ほりされて困つた。

先生が御母堂に對しての御孝心の厚いことは、一寸にも例の汗粉一件のやうなもので、私が母に對する愛情や態度のやうなものではなかつた。ですから私もひそかに畏敬して居りました。うら若い時から未亡人を立て通して、一人子をこれほどまでに仕立て上げられた方、男勝りの賢婦人、あゝいふ立派な方を生みの母にもつたら、と羨しく思はないではありませんでしたが、でもね、それだけ氣兼も甚しいので、御母堂の前に出ると、身體がすくむやうでした。

いつでも、はい、はいと、おじぎのつぎたしばかりして居りました。先生の態度がまた二階と階下ではがらりとちがふのも可笑しうございました。眞面目くさつて私の姓に君などくつづけて……ほゝ。

## □ 春宵怨 □

先生と私、科學的人生觀と藝術的人生觀、偶像破壊者と理想主義者、才士と偏人、雄辯と沈默と、性急と超然と……兩人は何うしても一致せず、平行線で進むべき素質に生れついてゐました。たゞ共通してゐる點といふのは、好奇心の強いのと意地つ張なことだけで、ですからある程度までは非常に話の合ふこともありますが、一度衝突したとなつたら大變!! 理非得失にかゝはらず、互に一步も引きやしないので……しまひにや先生つたらひどいんですもの。私の大切がつてる物品やお紙幣なんぞ、火鉢ん中へなど投げ込んだり——あは

て、飛び掛りでもするかと思ひなすつて——けど眉根一つ動かさず、冷然と見守つてゐる私を、どんなに小面情いと歯がみなすつたでしやう。女の強情ほど憤然で癪にさはるものはない、と云ひくされた。これでも何ともないか、あやまらないか、なんて手首なんか力任せに捨ち上げたりなさるんですもの。が、かうなるともう白刃はくじんを目前に突きつけられても、それを噛み碎く位の意氣は全身上に燃えるんです。

「誰が！ 生きてる中は負けやあしない。」

「馬鹿ばかつ」と手荒く突きやられたあとでは、ちつと覗みつめる眼から涙と冷笑が一所に湧いた。

優しい女を愛人にお持ちなさりやあよかつたんです。私は先生せんせいを……苦しめたかも知れません、まどはしたかも知れません。ですけれど、ですけれど、私の性格は常に非常に熱しやすい涙もろい半面はんめんと、また自分を恨んで死ぬ者を

笑つて目前見殺しに出来るほど、冷酷な半面を持つてゐた。その兩面が先生に對しては、はげしく發揮されたまでなんです。試金石にぶつかつて目ざましい火花を散らしたんです。だから私だつて眞剣だつたのです。命がけだつたのです。矛盾を責められては、泣くより他に仕様がなかつた。泣くたびに先生は激怒なすつた。

「いくら唯一の武器の蔭にかくれて泣いてみせたからつて、女の涙ぐらゐで溶かされて仕舞ふやうな月並な男ぢやないぞ!! 無駄な眞似はよしたがい。」誰が、誰が、あなたの爲になんぞ泣いてみせる。私の涙は私の涙、自分のものだ。と云ひ放ちたくつても、もうそれより先に鼻柱が熱くなつて、瞼がふくれ上つて熱涙がほとばしる、と、もうとめどがありません。しゃくり上げ／＼なんか物云ふのは嫌ひですから、歯をくひしばつて堪へやうとあせればあせるほど、涙ばかりが湧くんです。

嫁かず娶らす天童の、潔きぞ法とおもふもの、許せ、とばかり咽び入る肩を碎くるばかり引攔んで、總身を顛動させながら顔色を變へた人の態みては、流石あまりの氣の毒さと恐ろしさに戦きもしましたが……。

ある夜の夢に、あのね、先生のお棺の前へ毛巻島田に白無垢姿の私が泣き崩れてゐた。

先生がいらつしやらなくなつて了つては、私もう寂しくて／＼……どんなにも辛抱致しますから、どうぞお傍に仕へさせて下さいまし、と御母堂のお袖に縋ると、私を慰めやうとはしないで意久地もなく泣き入つてるやうなそんな女に用はない、と突きやられて、まつはるはづみに髪が解けて颯と散つた。目がさめてからあまりの忌はしさと氣味わるさとに、栗立つた頬を冷たく涙が傳ひました。

丁度翌日先生がいらつしやいましたので、包み切れずその夢語りを致しまし

たら……死んだ夢はいゝんださうだ、つて案外元氣よく、しきりにその話を  
幾度も／＼き返しなさりたがるので、およし遊ばせつたらもう。たかゞ夢の  
話ぢやありませんか、そんなに氣になさらなくとも、と怒りました。

もしも眞實に僕が死んだら葬式の供に立つて呉れるか。いやな事有仰るもの  
ぢやありませんよ、誰がそんな時行くものですか。ぢや病氣したら看護に来て  
くれる？ 煙、お醫者様ぢやないんですもの、私が行つたつて癌りやしないで  
せう。こんなはかない事を言ひ争つたのですが、あんばかりそめ言にまで、甘  
い言葉を欲してゐらした先生！ 何といふ初心さだつたのだらうと思ふと、い  
ちらしくなります。自暴になつたら柳暗花明のちまたに惑溺でもなさるだらう  
といふ様子があり／＼と見えて、思つたばかりでも妬しさが燃えた。

口惜しや乙女の權威地におつと

知りつゝなほも戀しかりける。

あゝ別れられない、離れられない、離れられない!! 懸しい先生を他人手に渡したら、私は鬼女になつて仕舞ふかも知れません。けど、死んでもいい、仕方がない。處女の矜持は捨てません、おゝこればつかりは……。

あらゆる邪推や猜疑も受けた。君はそんな要求の起らない身體か、女性ぢやないのか、とまで吃問された。何をか處女の權威と誇る!? 貞操は肉體のみの問題ぢやあるまいに……否、現に我が唇の觸れたるその手、その額!! 接吻は肉の第一歩であるの、老後の寂寥や老嫗の悲惨やらやを……私はかたく耳をおほふて、脇揉み切るほど身悶えした。

そんな工合ですから執筆の方のことについても、圓満に行く筈がないんです。君の様なのがほんとうののらくら文士氣質といふんだの、食ふや食はずで苦しませておかなければ、なんにもしやうとはせぬ輩だ、なんてよく罵られましたけれど、だつて、私には先生の眞似は出来ません。否、誰にだつて出来ません。

あの療弱な病體をひつさげて、四方八面に奮闘し活動なさることと本つたら  
紙止に演壇に實業界に政治方面に……實にその精力の絶輪さを驚歎  
するばかりで、私幼また氣のすむまでは一行の文草を三日でも四日でも弄くつ  
てるし、約束をすつばかりさうが、天地が目前に崩れかへらうがハ厭つてつむら  
厭なれです。興が向かなきや筆はもてない、つていふ厄介な戦艦者。それがま  
だるつにしくて堪らず、何でもかでも御自分の園中に引張り込まうとなさるの  
ですから、そこに非常な苦痛と壓迫とを感じずには居られませんでしたわ。

それや性急つてく、必要もないのに濫作や駄作をお強ひなさるんですもの。  
のみこみの悪い私には、少し、咀嚼や含蓄の餘裕がなくつちや……いま見た  
こときいたこと、直やさま原稿、變化させたり、汽車の待合室ででも何でも數  
十枚一氣に書き飛ばすなんて、とても／＼そんな事したら、私狂氣になつて丁  
ひます。

とうく、そんな事ぢやとても君には見込みはないよ、とまで宣告された。  
 「文學なんて人氣商賣だ」『根底のない君の名聲がいつまで續くと思ふのか』  
 「長くとももう三四年の壽命だ、』の、文壇知名の士にも隨分末路の慘憺たるもの  
 のがあることやを……。あゝ三四ヶ月前になせきかせて下さらなかつたんで  
 せう。

「天下の讀者背いて去るとも僕一人讀まむ。」その一人にまで捨られて丁つた。  
 何うしやう、何うしやう、何うしやう! 行きつまりたる運命の扉、叩かば開  
 かれむ。されど、されど……。『さうなつたなら君、何うするんだ。小學校教  
 師になるだけの資格もあるまいし、まあ電話の交換局へでも出るか。』『男を  
 離れて婦人に事業といふものがあると思ふか。』『末は老人の玩弄物にでもなる  
 のがおちだ。』

など恐ろしい鐵槌は容赦なく頭上に打ち下される。破壊は新しい建設を意味

すると申しますけれど、棲みなれし幻影の殿堂を無惨にこばたれたまゝ、行くべき方もおもほへす……大切なく、靈魂は宿なしになつて仕舞つた……。

私はやる方もなき懷疑と煩悶のどん底におちあらずには居られませんでした。いよ／＼最後の談判が破裂したのは……青柳の糸ゆるう亂れて、世は爛漫の櫻花に浮かる、好季節!! もう會はぬぞ、僕だつて男だ、未練はない。が、これから何うするか見て居れ、つて。かうなれば憎さが百倍だ、捨るつたつてたゞは捨てない!! ……と席を蹴立つて歸り去つた人、机にしがみついて取ら残された私……。泣きましたわ。それや泣かずには居られませんでしたわ。あはれ父の死に逢ふてすら、かほどまでには流さんだ涙を、この君のために絞りつくさるゝかと思へば、私は口惜しうござんしたけれど……否、この口惜しいといふのがいけないのねえ、いがみ合ふ戀人達!! まるで猿のやうだつて、ほゝゝゝ。でも猿ぢやない、人間なんです。えゝ、乙女は尊とい人間で

す！處女なるが故に私の自尊心は、戀よりも強うございました。が、また一方の心裡は……それと、これと、まるで火水の相戰つてゐるやうな苦悶でした。もう／＼三日三晩、身を慄はして咽鳴したと云つた位では、到底その心持を云ひ現す事は出來ませむ……。

□ 文箱の秘密 □



先生、堪忍して下さい、みんな私がわるいんです。

昨夜は何の涙かとめどもなしにあふれいでて、何を云ひたくつても聲が出ないのに、もう口をきかぬつもりか、なんて有仰るのでいよ／＼悲しく、とう／＼曉近くまで机に突俯し、もうこれつきり先生にはお目にかゝれな

いやうな氣がして、めちゃくちに泣いてゐました。袂へだてた先生の御寐息の氣配をきゝながら、なつかしさに切らるゝ様な胸を抱いて……。女の身の弱さ儻さ、やつぱり先生は勝利者だ。

戀しき人に我からそむいて、あはれ誰が爲立て通す心の意地ぞ。先生のお疑ひ遊ばすやうな、そんな張合のあるやうな操ならば、心やりにもなりませうけれど、たゞ私のは我儘から。でもこの我儘ばかりは許して下さい。いつかも申し上げましたつけ、私決して道徳や貞操やそんな観念に支配されてぢやないけれど、ほとんど本能的に乙女の生涯を守り通したいんです。萬巴むを得ずしてこの矜持を捨て了はねばならぬ時が來たならば、いつそ、いつそ死んで仕舞ひます。

矛盾してゐるから苦しいんです。人形の家のノラを見て泣いた時のやうな、女らしい心持で居られたなら、先方の自尊心を傷つけるが氣の毒さに、情

なくはふり放し得なかつたほどの、昔の自分であつたなら、今もつと幸福であるかも知れないのに……。

見はてぬ夢は破られましたけれど、夢とは知つても、あきらめやうとしても、忘れることは出来ません、先生。いま先生と離れ去つて了つたら、この先どうなる身なのでせう。

あゝ兩人の間のいまこゝに、こんな最後をつけやうとば、夢さら思ひはしませんでした。なまじ花やかな日も多かつただけ、今更暗きに堪えられぬ。母に離れ、友に離れ、筆に離れ、君にそむいて、すねたる性を泣くばかり。私のこの胸のうちは筆にもつくせぬ、口にも云へぬ、何と誤解されても罵られても、言ひ解く術を知りませぬ。

先生、お願ひです。もうしばらく、たゞせめてこの月一杯だけ、がうしておいて下さいまし。母には何にも知らせないでね……。

再び甘き夢に酔はむも、捉ふべき機を永久に逸せんもこれみな君の心一つ  
覺悟一つなり。

この月中はおろか待てとなら來月中でも待つてゐやう。何も急ぐ事はなし、  
考へよ、考へよ、しづかに深く考へよ。これ人生の眞に到達する道なれば  
なり。

思案が定つたら、手紙出したまへ。おつかさんには、先生は當分來ません  
と云つておくべし。



おもふともなしに夜も晝も、考へて考へて考へぬいた。が、私はもう心一つにあまりました。何うしてよいやらわけがわかりませぬ。考へるのはもうよしました、やつぱり今までの主義がよい。ひと日／＼に生きるのです悲しくとも辛くとも、一日の苦勞は一日で足る、暗い未來のことなんか、考へてみるにはたへられませぬ。

醒めたる夢も追はじ、甘かりし樂しかりし花やかなりし日は戀ゆれども、再び以前の私にかへれやうとは思はれませんものを。

もう／＼何うともなるやうになれ、その範圍内においての覺悟もしやう、心もきめませう、勉強は致します。今はたゞこれのみがせめての心やりですものを、いま、でのやうに名譽心になど憧れては書きませぬ。もう世の中に飽きられて、名聲は地におちやうと、忘れられて丁はうと、こればつかりは捨てますまい。散りぎわきたなしと嘲けらるゝかは知らぬけれど

△ 今晚おふくろと帝劇ていげきをのぞく。

△ 傑作成つて三人で、一夜一やを送おくるの時近からん事を。

鶴沼の春色今如何。僕急性感冒に犯されて、人事じんじ辨せざる一晝夜、今日はじめて人心地ひどこへぢくく、而かもなほ外出には數日すうじつの静養せいようを要す。かくの如くしてさらでも遠さかる湘南しょうなんに離れんとす。これを恢復くいふくする一管くわんの筆のみ。未だ拂床ふっしやうに到いたらず、仰臥ぎょうとうしてこれを認む。

桃も桜も散りはてゝ、すでに柳は深みどり、さびしい春でござります。感情の高潮に達した時期も過ぎました、醒めて奥敢なくわびしいおもひに、たゞ涙のみ流れます。けふは四月も幾日なのだやら、日の過ぎるのも知りませぬ。

私は何故かう氣おくれがするのでせう、これが私の本性なのですけれど、今まであんまりはしやぎ過ぎてゐた。ふつと氣がついて物おちをし始めてから、何をおもふても口には出し得なくなつて了ひました。

かうして日に々先生とのへだてが、深くなつて行くのだと思ひます。おん事多い先生はおん胸にとゞまる影もなく、このまゝ遠ざかつておしまひ遊ばすのでせうけれど、取り残さるゝわたしは、それをお引き止め申したいとも言ひませぬ。もうそれだけの勇氣はないんです、指をくわえて見てゐます。

御病氣なんて伺ふと、私がお傍に居たならと憚りもなく思つた時代もありましたけれど、いまの私はもう……今度お目にかゝつたとて、何を申上げませう？ うつむきて物云はぬ子にかへつて仕舞つたのでござります。御氣にさはるばかりと知りながら、何うにも仕方がありません。

今日母は日歸りで東京へまゐりました。私でもすむ用事なのです、められたのですけれど、上京たらおん目もじも許されやうかなんて思つてもみたんですけれど……やつぱりいつそ何にもきいたくない、見たくない、先生からの御消息でさへ。静まつた胸のまた波立つて、熱涙となつて流るゝ苦しさに……。

すこやかなるとき一日一信よせし人の、四苦八苦の熱のときにはいちをき



めしも人情の發露と感服致し居り候  
まことに以てまだく外<sup>いわいしゅつ</sup>出どころの話ではなし、床上に呻吟しつゝあるにて候、御地へは泊りがけにて近々にゆくべし。あはれ、病みて見舞はず死しても送<sup>おくり</sup>らすと申されし人よ。



おはがき有がたう……何の故ともなくまた涙です。

先生が御病氣の最中には、此方でもよつぼご何うかしてゐたんですもの、一日一信どころぢやなくつて。堪忍して下さい。

近々つていつ頃のこと? 翁つてもいいのなら御見舞にも上りませう、御迎ひにもまわりませう。御話したい、御教も仰ぎたい! いけないと有仰るのならもうそれつきり、お目にかかりたいとも申しますまいから、何事

も御免じ遊ばして、ねえ、先生、御願ひです。

晝間のあればばつたり静まつて、月影美しう、羽織を脱いでも汗ばむくら  
ぬ、暖かな夜でござります。あゝもう四月も逝きますのねえ。

卯月末日

K 先生

千代

□離れ行く靈口

先生の御全快後、丁度文藝協會第三回公演がありまして、現代女性の興味  
「マダダ」は松井須磨子の演ずるところ。これは一度是非見べし、見せたし  
と思ふ。との御書狀に接して、心弱くも私の上京いたしましたのは、五月の  
初旬でございました。そして有樂座でお目にかかりました。

氣の早い人々はもうセルの單衣や、紹縮纏の羽織を着て居りました、清涼水底の如き一夜でございました。私は先生が隣席に被居るといふ意識ばかりで、どうする事も出来なかつた。ねち向かなければお顔も見る事は出来ないので、手にもつたペールで口元をおほふて、ちつと正面をのみ見つめてた。折々自分の横顔に先生の視線の走るのが晴がましく慎しかつた。されぐるに兩人の間に交されたのは、平凡な會話でした。伏目勝の中に、たゞ相手の態度をのみうかうつた。

「マグダ」では泣かされましたけれど、でも私は自分一人で澤山だつた。他の女のことなどはどうだつてかまやしない。とは云ふものの、いつかの「ノラ」の時とはちがつて、それ相應に理解もされ、共鳴も出來た。が、あさましく悲しいばかりで、他の若い人々のやうに血潮を湧かして感動し、昂奮しやしませんでした。

一月あまり相見ぬ中に——御病後とはいへ、まるで紙裂捻のようにお瘦せ遊ばした傷々しさを、私は正面には仰ぎ得なかつた。お互に別れてゐた間のことについては、何とも言及し得ないで……むしろそれに觸れるのが空恐ろしく。火照つた頬を心地よい夜氣に浸しながら、柳並木の蔭と一緒にそぞろ歩るいても、もう小刻みに息のはづむやうな歓喜も、観劇の興奮の醒めぎはの悲哀！あのしみぐと懐かしい柔らかな氣分を味はふ餘裕もありませんでした。兩人は別々の心を抱いて、言ひたい事も言ひ得ず、空しく右と左の電車へ乗り移つて了つた。

が、これが仲直りみたいな事になつて、その後先生はふたゝび鶴沼に、濤聲や松嶺をきく身となられた。

私は覺悟してゐましたのに——まあ、こんなにしてふたゝび語る日が來やうとは……けど、いくら何うしたつてもう一人の心の、元にかへれやう筈がな

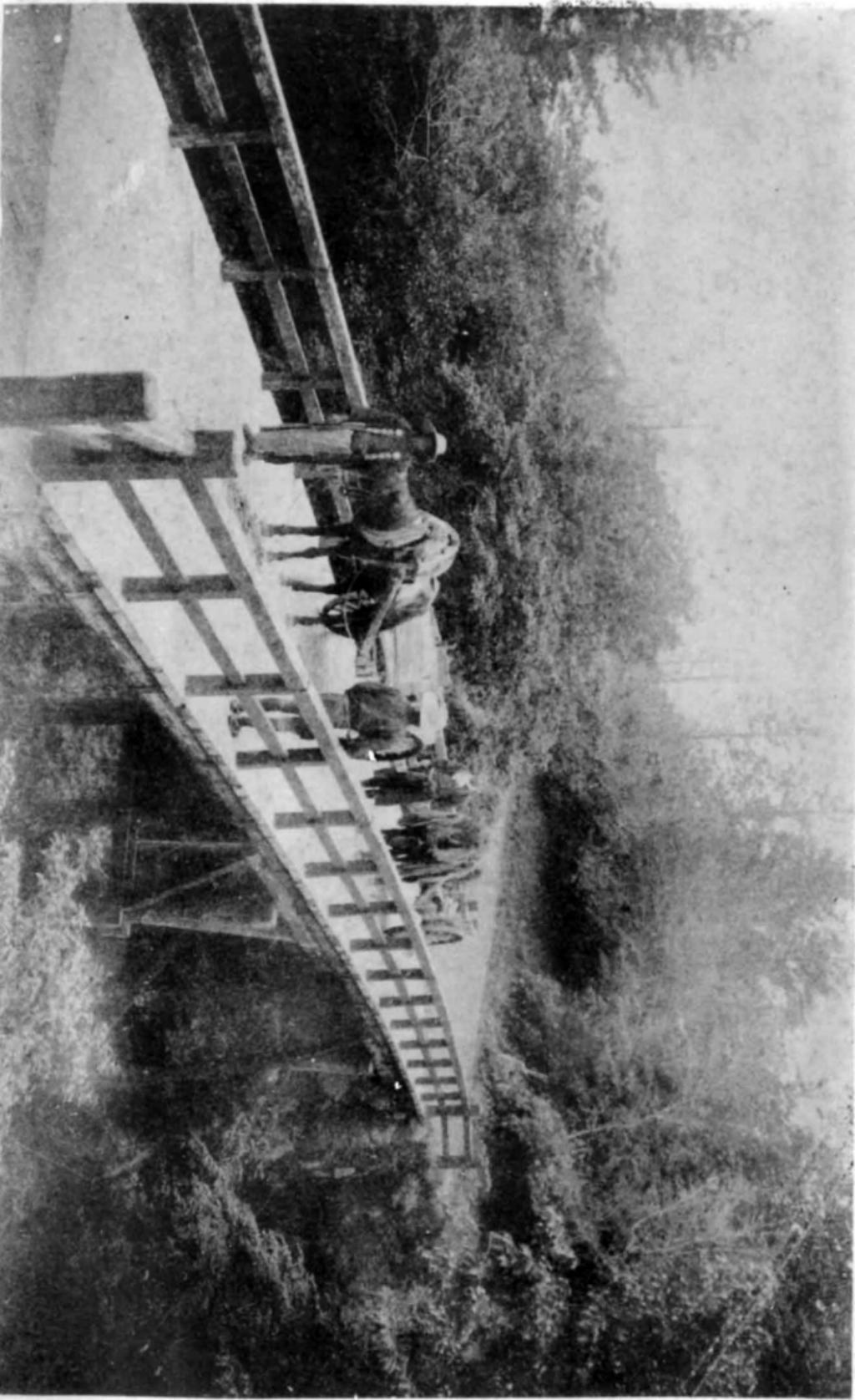
いんですもの。孤獨の暗き涙を笑貌に包んで、向ひ合つても思ひは浮かぬ、浮かぬ。暴風雨の前兆のやうな沈黙の、苦しい不安がつゝきました。先生には一層堪えられなかつたのでせう、旅行でもして來いとすゝめられて、私は那須温泉へ行くことになりました。

□ 燃ゆるはひこひこり花のみかは □

逝く春おそき那須の温泉！ 荒削りのまゝなる山野、原始的な高原、五月も下旬といふにまだ山櫻が散り残つてゐて、藤咲き、躑躅燃ゆ。否！ 燃ゆるは獨り花のみかは、入日情ある夕まぐれ、熱き涙を君知るや？

雲千里平原千里躑躅咲く

那須に生れて十七乙女



春 おそく 桃さく 山の湯の村に

嫁ぎゆくなる人に幸あれ、

君去りて 夕さびしき那須山に

無言の乙女花に閑ゆる。

この三首の和歌をとほしての、清い優しいローマンスを御推し下さいませ。

私も笑ひながら書いてましたが、その心中はおだやかではありませんでした。顔色にこそ出さね、その時代の私は妬心の権化であつたのです。先生の御友人に女の御同胞があると云つては氣がもめ、よく出入なさる三越の食堂に、給仕女の可愛いのがゐるとは胸を燃した。

さうかつて何も先生の御品行などを、疎ばかりも疑つたことはありません。そのお言葉通りにまつたく純潔無垢な青年だと信じてゐました。

だのに私の何につけても、これほど妬み心の深かつたことなぞ、先生は決して御存じないでせう。否、誰だつて知りやしませんわ。自分の眞情は自分でしつかり抱いてゐないと、胸が空虚になるやうな氣がしたから——。友達……：友達なんてものは、うるさいばかりで仕様がなかつた。造花のやうな友達ばかりなんですもの、つまりお飾りに過ぎなかつたんですもの。まことの友情などといふのものは、お互に望みもせず、解せられもしなかつた。

私はほんとに孤獨でしたの、ひとりで考へてました。那須の七日の夜をこめて、如何なる思ひに悶えしぞ!!　!!　あゝ解脱も出來ぬ、超越も出來ぬ。眼もはるぐの廣野眺め!　その際限なく大いなる自然の威力に壓されて、人間——否、自分といふものゝ迷ひや行爲のあまりにく々小なることを自覺や、益々悲觀の度を強めるばかりでございました。

と共に、私は「自然」といふものに對して、一種の反抗を持つ子となつた。

花は紅し、空は青し、とのみ憧憬しては居られなくなつた。人事が自然を征服する、といふ事について考へてもみたけれど、けど龍車に向ふ螳螂の斧、ましてや自然の復讐？ 天災地變の恐ろしさを思ふと、それが今にも自分の頭上にだけおちかゝつて來るやうな氣がして戰慄された。

あゝ、何千坪とも知れぬ裏山の躑躅の焰の中に立つて、茶臼嶽の噴煙の雲につゝくを仰ぎながら、私の心は日に／＼絶望の底に沈むで行きました。

旅宿は例の大將軍の家でした。青々とした坊主頭の、五歳になる「良ちゃん」で、男兒作りの可愛い兒がありました。先生、先生、つて私にまつはりますの。ほゝ、「先生」では笑ひましたよ。これは絶後ではないかも知れぬが、私としては空前なんですもの。それや小學校の先生のこと思へば何でもありますんけれどね、笑止さ、面眩さ、くすぐつたさと云つたら、恐らく「奥様」以上でし  
たわ。

去年K先生に教へていたいたのだつて、「春は、春は、」ウイ！ ウイ!! な  
んて乳歯のくろい口で唄ふんですもの。なつかしうござんしたわ。良ちゃん、  
良ちゃん、と呼びかけるのさへ胸が震へた。だつて字こそちがへ、我が亮様と  
同じ名なんですもの。君戀しさに堪えがたい折々は、物狂はしうこの子を力か  
ぎりに抱きしめて『亮様、亮様』と心に小叫びもしましたわ。人も見ぬのに、  
流石頬のばつとほてるを感じながら。

どうしても思ひ切れぬ、あきらめられぬ。自我を屈することも出来ない。さ  
うして先生を獨占してゐたい！ 表面は戀人のやうに、事實は妹のやうに……  
…。

ほゝ、こんな虫のいゝ話はまたとありやしません。でも私は眞剣に思ひつ  
めてたんです。先生の所謂「オール、オア、ナツシング」だつた。總てか、然  
らずんば無、おゝ然らずんば無！ 私は、私には、とても妥協の餘地なんてな

いんです。男と半分づゝなんていふ、そんな生ぬるい生活は到底我慢がなりさうもなかつた。苦勞をするなら、自分自身の爲にしたかつた。

あゝ何故こんな性質に生れついたらうと、つぐぐもてあましましたわ。そして張り詰めた氣の少しでもゆるんだ透間には、どつちを見ても空虚と寂寞のあるばかりだつた。私はもう、茫寧たる生の苦痛と恐怖に堪えられなくなりかけました。

隣室に人もなき四階の深更、さま／＼な惡夢におそはれつゝけては、はては眠る事さへ恐ろしくなつて、ちつと床の上に端座して崩したこと、幾夜か知れません。

その内に私、大變なことをしちやいましたの。

曾て先生から、御自分の満廿五歳誕辰日の紀念だつて贈られた指環！ 寶石の名も何か知りませんが、竹葉の彫刻のある、華車な可愛いのでした。無理矢

理に手をとらへて填めて下すつたのを、一ふり振ると、するりと抜けて一間も飛んだほど、私の指にはゆるくのものでした。が、矢張り外出の時なんぞはね、一個でも餘計に欲しうござんすわ。那須へももつて来てそつと頬すりしたり食ひついたりして、大切にしてましたのに、ある日ついね、洗面場で一寸抜いて流しのふちにのせたまゝ置き忘れて来て丁ひ、三十分程して気がついて駆せもどつたけれど、もう影も形もありませんでした。水に流して丁つたのか、人に盗まれたのか……。宿の者も大騒ぎして下水の中までかきまはしたり、上手だといふ易者を呼んでくれたりしましたけれど、どうせもう發見う筈はありません。

飛んだ事をしたの、惜しいのといふ念より、私は何かの暗示ででもあるやうに、襟元寒く身に沁みましたわ。筑めてたのは左の中指でした、反を打つて細長い指の根元に、淡白く痕の残つてるのを見ると、たまくなくなつて碎けよ

ばかり、力ませにその爪先を咬みしめた。高い脈がどきん、どきんと歯を傳はつて頭脳に響いた。

### 口 懐疑のはては刃をおもふ 口

歸りましてからね、まあ先生はどんなに御怒りなさることかと思つたら案外で、何に、氣にしなくてもいゝさ、今度はもつと佳いのを買つて上げるさ、とその指先を唇へおあてになりました。いりません、私もう一生指環なんかはめない！ と顔を背けてはら／＼と涙を落した。

指環なんか何でせう、否、名譽が何？ 光榮が何？ 戀愛が何？ 宗教が何？ 藝術が何？ この不遜なる乙女の眼には何物の權威もみとめ得られず、懷疑、不安、絶望のあまりは「死」をのみ思ふた。

自分自身のこの世に生を受けたのさへすでに莫迦くさく……父母が快樂の

犠牲に過ぎないのだと思ふと、笑止な、それで親の恩も何もあるものですか。  
 私はすべての人に妻を嘲笑し、冷笑し、母をさへ嘲りの眼を以つて見る子となつてしまつた。丁度過渡期にある妹の、一日く、に艶めかしうふくらみを持つてくる身體つきや、心理作用をみるのも堪へられなかつた。

もう何事も淺ましくわづらはしいものに思はれるばかりで、私は、私は手のつけやうがありませんでした。先生に對する執着も薄らいで、死んで行く身の心残りになりさうもなかつた。むしろビリケニズムなどと唱へて、頻りに金權や成功やに身も瘦せるほど苛々と焦慮つて被居るのを見ると、たまらなく幼稚にも憤然にも思はれて來たんです。何といふ可愛氣のない態度でせう、燃ゆるやうな讃美と憧憬とに輝いてゐた私の瞳も、こんな冷たい白眼で戀人を批判し、解剖する子となつてしまつた。

唯一つ先生が私に對する權威であり、私がひそかに詠歎のまとでもあつたの

は、先生が曾ては病中煩悶の極自殺までしやうとなすつた事がある、さうして再生の自覺に達せられた、といふその経験が尊とく羨しくつて……そこに何等かの同情か共鳴を求めやうとしたのだけれど、けれども駄目でした。もつと何か深く突込んだ……心にふれる何物かある筈だのに……先生のは理屈だ、痛切な點が見出されない。そんな事で死ねるものぢやない、死ねるもんぢやない!! 矢張り私はひとりなんだわ、一人で生れて、一人で生きて一人で逝く……。誰にも泣いてなんぞ貰ひたくない、石ばんふきでチョークの字を消すやうに、片つ端一人の記憶から自分の名を拭ひ去つて了ひたかつた。どう思ひ直してみてももう世の中に、忍んで生きてゐる氣はなくなつた。生きるのは卑怯者のやうに思はれ出して來た。靈魂必滅論者の私は、死に對する恐怖や未練や、そんなものは何にもなかつた。死はねむり! 睡眠と同じ事、否、否、むしろ夢を見ないだけも勝だらうと思つて……。

その後私の厭生觀は、日に夜に益々深くなつてゆくばかりでした。幾度遺書を書きかけたか知れません。我ながら身ぶるひして、嗜み製き引製いては了しましたが……。

手紙についてもいろいろ考へた。劇薬かビストルでなら死ねるであらうと思つたのですけれど、手に入れやうがないんですもの。

あまり思ひ迫つたやうな手紙なんぞ書くので、先生は顔色變へてやつていらしたこともありました。あまりその反動の強いのに自分もびつくりいたしましたが、何でもありやしませんの。あれも一時の氣分なのよ。樂ひにまぎらして丁ふと、何とも言はずに私をちつとあつめられたお腹には、怒りと涙が光つてゐました。何故そんなに僕に心配させてみたいんだ、つて……。私も思はず御手に縋つて、だつて苦しいんですもの、生きて行かれるやうな道を教へて頂戴!! と泣きましたけれど、そんな煩悶は結婚すればなほるよ、とばかりで

……またかと私はもうをやみなく痙攣する唇を閉づるより仕様がなかつた。

## 口死の影口

が、その頃から先生も以前のやうではなく、段々元気がなくなつて、お顔のやつれも目立つて來た。神經衰弱の氣味のやうだ、頭が重い、重いつて、一日でも半日でも昏々と、眠つてばかり被居いました。

お話する間もなく物足らなくて、私はお枕元にちつと座つて御寐顔を飽かすみつめてゐましたけれど、いつもの様に目を覺ましでは呼びかけて完爾りなるお顔は見られなかつた。先生がいつもかういふ對度を執つてゐて下されば、とうれしくもあり、氣づかはれもした。不斷御勉強が過ぎるんです、實際。仕事をなさるとなつたら、まるで無茶なんですから。一番最後にいらした時が一番お苦しさうで物倦さうで、御食事もすゝます。……早くお醫者にみてお貰ひ

ひ遊ばせよ、日頃の御無理がたつたんですよ、お大切になさらなくつちや駄目よ、と切に申上げましたが、先生はそれしきの事を病氣あつかひなどされ事が大嫌ひなんでした。

そして月末から一週間ばかり、講演會があつて旅行するかも知れぬ、が、その前に今一度來ると仰有つた。けれどそれつきりいらつしやいませんでしたの……あゝ。

さびしいわね、おさへ切れぬ涙がホロ／＼と、うつむく袖に散りました。松の樹の間にちらつく帽子、遠ざかりゆく銀輪のひらめき、例の御別れにもまして、何だか寂しうございましたわ。御氣分は何如でござりますか、お醫者へはいらつしやいましたの、どんな御様子でございました。御自愛遊ばして下さいまし。

一度でもお目にかかる度、相見る毎に戀しさ勝つて——何といふ

意久地のないことかと、私は泣いて居りますけれど。

女つていふものゝ少さゝ、あはれさがつく／＼感じられますの、何申し上げたつて、お笑ひのたねとなるにすぎないんですわねエ、あとで考へれば口惜しいほど、耻かしいやうな下らないことばかり!!だから、だから、もう少し徹底した人間になれるまでは、何にも言ひますまいと定めたのですけれど、それでまた一日でも先生と遠ざかつてゐることはつらいのですもの。

何の彼のといひ乍ら、やつぱりあはれまれてゐたいのですもの。眞の獨立獨歩よりかうして先生のかげにかくれてゐるといふことが、どれほど心丈夫でもあり、また……A様達は『名譽だ』と仰有いましたわ。

たとへ他人には何といはれましても、もう口惜しいとも思はねば、反抗の念も起りませぬ。

それでゐて服従を拒絶するの、勝つも負けるもあるものかとおもふと、自分ながら興さめます。先生のおん眼などには、どんなに笑止にうつってゐることでせう。・

あゝ主義の人、意志の人、冷靜たる「ノラ」が羨しい。いつかは私も奇蹟の夢の醒めたやうに、心機一轉する時がありますかしらん。

勝利のクキーン「マグダ」でさへ、あの誇りのうらの悲痛と寂しみとはどんなであらうと思ひますと、心から自分等女性といふものを呪ひたくなりますわ。

私は何よりも自分で自分と戦はねばなりません。小さな脳みや悲しみのために囚へつくされてる、執拗な自己を打破しつくして、強く大きくならなくちやなりませんわねえ。けれど、けれど、さうして苦んであらゆる物に打ち勝つた後、果して何物が得られるのでせう! やつぱり寂しい。さび

しい誇りとやるせない微笑の生涯。私には堪へられません、心の荒んでしまはないうちに、雪のやうに消えて了ひたい、先生のなつかしい人であるうちに。すれば勝利の死だわ、權威ある死だわ。『大膽なれ、上品なれ、我が生涯は桜の花の散りざわの如くなるべし、』とノートの端に書きつけて、繰り返して居りますわ。

悲觀的樂觀か、樂觀的悲觀か知りませぬ。メソーサーするのは耻だと考へてますから、相變らずキヤア／＼はしやいで居りますけれど、心の底の底のこの涙！ おそらく誰にも解さることなく、私は最後まで笑つて居りませうよ。

昨夜は氣になる夢をみました。あのね、先生が鶴沼で御病氣におなり遊ばして、お宅へおしらせしやうにも、私はあはてるばかりでどうしてもその打電の文言を思ひ浮べることが出来ず、あせりにあせつて座敷中飛びまは

つてた……。

わだし　私のこんな手紙を書いたのは、終に識をなした。「亮一病氣あつし、」の飛電に  
 胸を打つまで十餘日の間、先生からは一度もお便りがなかつた。何度差上げてもく御返事もございませんの。こんな事は曾てなかつたのですが、屹度御旅行中であらうといふことに、一縷の望みをつないでゐました。それにしても筆まめな方で、旅行先からだつて御消息おかしなすつたことはないんですのに。私はさうにも氣がもめて我慢が出来なくなつたので、丁度父の墓参がてら、それとなく出京して見やうと、準備をとゝのへてます中にその電報なんでせう、どつきりしました。が、一時は悪戯かとも疑つてみました。こんな眞似して驚かしといて、丁度行きちがひ位に笑ひ乍らやつていらつしやるのであらうと、私は電車の停留所までお迎ひにまわりましたわ。まあ何といふ儂ないことだつたのでせう！　さうして悶々の中に待ち焦れましたが、夜に入つてもお出がな

いので、御串談にしちや餘り罪が深過ぎる、と翌早朝に……。  
 でもまだ直接先生のお宅へ伺ふのはためらはれて、社の方へ電話かけてみま  
 すと、どうやら御病氣のことも事實らしいので、今はとおそるゝ飛んでまゐ  
 りました。

が、たとへどんなに御重患であらうとも、まあ談話でも禁せられてる程度で  
 せうと思ひましたのに、まあ、變りはてた……と云はふより、呼んでも叫ん  
 でも反應のないやうなその御様子!! いつも短かいお髪が五分刈ほどにのびた  
 頭は、氷袋と氷枕に埋もれて。

私は涙も出ませんでした。先生、先生、内藤でござりますよ、ござりますよ、  
 とすりよつて申しましたけれど、看護婦さんも言葉を添へてくれましたか、全  
 然お見分にやならないやうでした。何を申上げませう、どうしたらいいんでせ  
 う、私は息をつめてしばらくお枕元に坐つてゐました。御母堂はじめ御看護の

方々が、御病人のお寐召を取代へるのだつてお立さわぎになりましたけれど、よけいな手出しをしてもわるいし、たゞ少し片隅に退いて、ぼんやりとみてゐました。

後できしますとこの時の私の態度が、いちじるしく御母堂の感情を害したのださうでしたけれど……私だつて……私の身にもなつてみて下さいまし。こんな瀕死の御重態におちいるまで、何としらせても下さらなかつた御うらみをこそ申上げたい……。打電なすつたのも、御母堂は御存じないことなんでした。他の方のお取計らひなんでした。私はその人のお情が、しみぐ身に滲みでられもうござんした。

先生へあてゝ差上された度々の手紙は、みんな御母堂が開封なすつたんでしたけど、言御病氣といふこともしらせては下さらなかつたほど……いはゞ日蔭の身なんですもの。たゞもうどうしたらいいかと思つて、呼吸をしてる空は

なかつたのでござります。私はどうしてあんなに自分を卑下してゐたか……思へば敷へ子が師の君の御看病なりお夜伽なりしますのに、誰に憚るわけもない筈ですが、世間ではもうそんな關係ではゆるじてくれなかつたんですもの。それに私は先生が、あんな悲しいことにならうとは、どうしても信じられなかつたんですもの。御全快後のことまでも思ひやつて——私が我物顔にお附きしてゐなんてことは、御見舞人の手前に對したつて双方の得策ぢやあるまいと思つたものですから——。それに御母堂が引とめてでも下さることか、つい二三日前までは私の手一つで困つたけれど、看護婦は呼ぶし、婆やは來たし、社の方からは二人づゝ毎日つめてゐて下さるので、狭い家ン中が一時におもちゃ箱引くり返したやうな、と問はず語りを遊ばすんですもの。お前なんぞに用はないから早く歸れと、追立てられるやうにもきこえましたわ。お蕎麥をとつて下

かつたので、強ひて箸もつけました。

## □狂風一過落花慘憺□

で、その日は一まづ叔母の家（母の實家）に歸りましたが、足も心もまるで空を泳ぐやうで、そのくせ叔父や叔母の前には、露ほどもそんな弱身を見せたくはなかつたのですから……他人事のやうに笑ひながら語りましたわ、先生の御病状なども。

が、我慢にも晩餐が咽喉を通らなかつた。眼を白くしたり黒くしたりして。……ほんとにあんなに苦しい御飯を食べたことがなかつた。不思議なほど胸が板のやうに突張つてた。

悲しいともつらいとも、すべてが自分の上とは思はれなかつた。たゞ息苦しに轉々反側、氣の狂ふほど長い／＼一夜を悶え明しますと、翌早朝に電話が

かゝつてまゐりました。私は夢中で受話器に飛びつきました、てつくり御容体の急變と。

と、看護婦の聲でした。△△先生（社の重役）が貴嬢にお目にかゝつて些と御相談があるさうでござりますから、直ぐいらして頂きたい、とのこと。私は早速飛んでまゐりましたわ、だつて御見舞にすら氣兼しいく上らなければならぬところを、お呼び出しなんですもの。天下晴れてお門がくじれるとうちしかつた。

看護婦さんや何かはまだ朝飯の卓に向つてゐました。来てゐらつしやる筈の△△先生はまだお見えになつてません様で、御母堂は例の通り叮重に、私を取あつかつて下さいます。私はまづ何よりも、先生の御容体を伺ひました。けれどだまつてゐらつしやいます、長煙管で煙草すぱ／＼召し上りながら。おし返して伺つても黙つてらつしるので、妙なと三度目を云ひかけながらふと見上

げると、お顔の色がもう變つて居ります。

きと蒼白の唇咬みしめて、切髪をふり亂し、この恐ろしい惡魔、妖婦！ 母子共謀して悴をだましてお金をまき上げたの、もう今がいゝ見切時と思つて突き離したの、今度の病氣の原因もお前さんのことが口惜しい／＼でにきはまつたの、私の著書を發行なすつた爲に先生が、大變な損失をなすつたの、初めて此家へ來た時なんぞ洗ひざらした銘仙の、ひどい服装でゐたちやないか、それが今度のその令嬢風はなんだ！ その衣服もその帶も、みんな悴のこしらへてやつた物だらう、イ、イ、一腹の立つ。何だ、お前なんかちつとも美人ぢやない。その顔の何點で悴を迷はせた。藝術家の假面をかぶつた淫婦、男殺し、八ツ裂きにしてもあきたらぬ……。

私は飽氣にとられてしまつた。お、お、何といふことでせう、熱湯の湧くやうにこみ上ぐるいきどほり、くやしさ、つらさ、はづかしさ、あまりのこと

云ひ返すべき言葉も知らず、身をふるはして泣き伏しましたが、社の遠藤さんも看護婦の伊藤さんも、いつかのまにか座を避けて了はれました。ちりくと御母堂につめよられた時には、私は思はず後退りして、逃口はないかと、四邊を見ました程でした。だつて恐かつたんですもの、實際殺氣を含んでた。

強情張りな私はよく幼時父から拳固を頂戴いたしましたが、親のしもとには手加減があります。何を泣くか、賣女！　賣女の空涙！　梓の命を償へ、償へ、親子の仇！　とめちやくに打ち据らるゝ煙管の雨は、肉も裂け、骨も碎くるばかりでございました。私は聲さへ立て得ませんでしたけれど。さわぎの大きくなればなるほど、自分の耻ですもの、先生のおん名にもかゝりますもの。袖はちぎれ、ピンは飛び、櫛は折れ、髪は崩れ、食ひつかれた左の手の甲からはたら／＼と血が流れた。見幕に恐れてとめ人もございませんの、障子や襖を蹴破つて戸外へ飛び出すのは容易ことでしたけれど……あらゆる熱罵を浴び

せられてもなほ……二階には、二階には先生が死にかゝつてゐらつしやる！わたし見捨ては出られませんの、いま怒つて飛び出してしまへば、もう先生にはお目にかゝられないかも知れません。今一度、たつた一目、とたゞそれのみに引かされて……黒髪を引摺れても、なさるゝまゝになつてゐました。離れじと柱に片手をからめて……。

けど、二階へ駆け上つた時には、もう堪へに堪へたため涙が一時にどつとほとばしつて、

『先生、先生、先生は何もかも御存じですわねえ、』とばかり人目も忘れて御手に縋りついた。

その中誰かの急報によつて、△△先生が駆せつけて下さいました。が、私はもう二階は下りないと頑張つた。下りたらもう御母堂が二度とあげては下さるまいと思つたので……併し御母堂の腕力つたらえらいものなのです、とう

／＼引きすり下されて丁ひました。よくまあ重なり合つて轉がりおちなかつた  
ものですこと。

△△先生も御驚き遊ばしたでせう。狂氣のやうな兩人のその姿ですもの、初  
對面なのも忘れて私はもう、

「先生、口惜しうございります。」つて其處へ泣き沈んで仕舞つた。御母堂には御  
母堂の云分があります。中へ這入つて△△先生も、どんなにお困りなすつたで  
せう!! 此方をすかし、彼方をなだめ、兎に角その御調停によつて、私は先生  
の御看護を許されることになりましたの。△△先生の御言葉とあれば、何にも  
違背は致しませぬ。私がわるうございました、どうぞ悴の爲にこゝにゐてやつ  
て下さいまし、と御母堂は私に對して手をお突きになるんでせう、氣味がわる  
うございましたわ。あら、勿體ない、私こそ…………どうぞ何事も御不承遊ばし  
て！ と疊に食ひついたまゝ申しました時、流石無念の血涙ははら／＼と……

…あゝすまない、私は母にはほんとにすまないと思ひましたけれど、けれど何物も先生には代へられなかつた。

引詰に髪を束ねて、泣き腫らした顔を伏せて、お傍に侍してゐると、Y様が御見舞にいらつしやいました。それまでは何誰にも面會謝絶だつたのですけれど、もうそれにも及ぶまいといふので……。

Y様も「E君」と呼びかけられたばかり、お袴の膝をにじりよつて、ちつと見詰ていつぱい涙をためてあらした。先生は時々ふとあの大きな眼を空にみひらいたり、繁々人の顔を見廻したりなさるのですが、眦からは絶ず涙が流れますのを、私たちはハンカチで、そつと拭き取りました。と、探るやうにその手を搔き抱いて、力をこめてなかくお離しにならません。

『先生、先生、わたくしでございますよ、ね、先生』

『お千代さんだよ、内藤のお千代さんだよ、わかつたかい、わかつたかい。』

と御母堂が有仰ると、微かに——わかつた、と御返事があつたやうにきこえましたので、

『あら、わかつたと有仰つて！』と思はず喜びの聲をあげましたが、意識がおありになつたのか何かわかりません。お寂しいのか苦いのか、人の手に縋るやうな事は誰に對してもなさいました。私は、私は妬けたんです、看護婦の伊藤さんは美人でしたから。

何でも先月の末あたり、大變物事に激しく歸られるとその儘枕も上がらず……。病症は結核性腦膜炎、七日あまりを人事不省であらつしやるのですが、昨夜は殊に御容体がわるく、御看護の人たちは一睡もせぬほど、何やら興奮して謔言ばかり口走しられたさうでござります。それが私に關したことだつて……まあ！ 悴はお千代さんを怨んで死ぬる!! ほゝうらまれたつて……怨まれたつていんのです、私は何も自分にやましい行爲はない!!

誰やらが白ぢやないけれど、

「男一人の運命にもなつたと思へば、女はうれしうござんすわ。」

けど私の知つてゐる先生は、そんな方ぢやあなかつた。御母堂！ 先生の御心殘さるゝは、私の他にはないと思つて被居いますか？ お、御無念におわさう、さぞ口惜しうおありなさらう、先生。人並勝れて生きんとする努力がいかに熾烈であつたか、とてもと宣告されたからはむしろかうして、お人心地もないのがかへつてお幸福かも知れない。

先生の召食り物はお薬でも牛乳でも、そつと少しづゝ匙ですくひ入れるのでした。時ならぬ時分ゴクリと音して咽喉へ通るのが、氣味のわるいほど傷々しかつた。

お附添してたつて、痛いとも苦痛とも有仰るんぢやなし、氷嚢のお世話でもしますほかには、手のつけやうもなくたゞ三人が代るゝお顔をのぞくと、あ

れ、ま、大きな露とろどが止度なしにほろりくと。

お泣きでない、お泣きでない。何にも悲しいことはない。もう直まきによくな  
る、いまに癒なほるよ。と幼おさない子供こどもでも賺かすやうに、ほら、お千代さんだよ、う  
れしいか、うれしいか。などと御母堂ごぼうどうのかき口說れる度たび、私は冷わたしたい汗あせが額ひたいを  
流れた。針はりの蓆かじろに居るやうでした。だつて、こんな女めのがついてちやいつまでも  
死しびに切れないだらうの、悴せがれが死しびねば死靈しりやうと生靈いきりょうが貴女あなたにとつつくの、寫眞しゃしんへ針はり  
を突つツとほして呪のろつてやると、眞顔まほんぱうに言はれて、看護婦かんごふも私も御返事わたしごへんじに困こま  
ました。

『お千代さん！』

とお眼ひかが光るとびくりとした。身體からだ中の肉にくには腫はればつたいやうな、重くるし  
い痛みがはびこつてゐて、帶おびの結目うしろなどに腕てはまはせなかつた。

その夜は看護婦かんごふも御母堂ごぼうどうも、連日れんじつの御疲勞ごひらうに正体じょうたいなく……。今はとて臉おもてに

あまる涙を押のることもせず……先生のおん手を私はひしと、我が眼や顔におしつけた。胸にかき抱きもした。

「私は、私は後悔していいんだか、喜んでいいんだかわからぬ。先生、私は勝つたんでせうか、負けたんでせうか?」

死におくれたばっかりに、あゝ死におくれたばっかりに……心強く手をあげて逝くことの出来るうちに、何故死んでしまはなかつたらう。私がかうして先生の御臥終の床に侍べらうなんとは……あゝ、あゝ、あゝ!!

しかもその宵は丁度父が七年目の脾月命日……。おそらくあの晩ほどの複雑な悲痛な萬感にくれまどふやうなことは、私の後生涯を通じてもう二度ありますまい。何事にも理性の判断の手つ取早くなつてしまつた此の頃……。いつもあゝした頃の氣分がなつかしい!!

## 口悲しき・終焉口

それからとうへ三日目の午後三時十七分リ……。あゝ、あゝ、私はもう  
 いふべき言葉を知りませぬ。暗紫色に變つてゆく爪の色、絶々に細りゆく脈搏、  
 散大する瞳子、生きながらに冷え行くぬくみ、あの苦しさうな呼吸のもつれ！  
 見るに堪えぬ、と云つてどうすることも出來ませぬ。御病床の周囲をとりかこ  
 んだのは、△△先生に御母堂、主治醫、遠藤さん、看護婦、それに私は頗るきわ  
 なゝきかはるぐに御手を握つて、羽楊子に水を含ませては、御唇を濡らした。  
 と、その瘦せ細つた手首でお胸のあたりをかき拂ふやうになすつたかと思ふ  
 と、二三度身もがきして、そのまゝがつくり息は絶えた。男泣きに遠藤さんの  
 泣聲が突き走つた。「殘念だつ」と看護婦も堪らず泣き伏しました。私は、私は、  
 私の哭泣の涙は、悲しいばかりの純粹のものぢやあなかつた。もうこれで誰に

奪れる心配もないといふ、たとへやうもない安心があつたのですわ。

死骸から引き離されたのも夢心地でした。御母堂が落度もない主治醫に食つて掛られる、あまりの見幕に一同景色ばむ。私は恐かつた。その内新聞記者が来る、僧侶がくる、葬儀社がくる、近所の人もあつまつた。廣からぬお家ン中はまるで蜂の巣を突つつきこはしたやうな騒ぎ。

こんな事にや馴れないから、誰だつて餘り馴れてものないでせうけれど。  
魂がうはづつちやつてゐるので足元も定まらず、矢鱈に柱に突かゝつたり縁から滑り落ちたり、立つたり居たりぐるぐるろく。

が、せきたてられて看護婦と一人で、おどくと死出の旅路の晴衣、結ばぬ糸に経帷衣を……。それもとちつてゐて叱られてばかり、おちついて涙拭く間もありやしないんです。御母堂はいつの間にやら頭を圓められ、すべくとした細長い綺麗な尼様、面變りがして別人の様。思はずあつと思をのんだ。み

んなに奥様々々と呼ばれてらつしやるのが耳立つて不調和だつた。

その日の暮方、袖附の引裂けたお召縮緬の單衣の、膝も袂も袂もなえしはたれて、亂れ毛を口にふくみ、顔の分らぬほど深く俯いた一人の若い女が、江戸川の終點から悄然と電車に乗りました。それが私でございました。餘つ程妙な風采だったとみて、車中の視線がみな集りました。叔母達の前に何と顔を合はさうかと、それも一つの苦悶であつた。手の甲をみると、痛々しい歯形の生傷が氣になつた。

何處へ行つたとて、私の靈のかくれ家はなかつた。思ふまゝに涙を落して、悲しむことすら出來なんだ。苦しい笑顔——伏し沈む忍び音。もう一々先生の御先途さへ見届けて了へば、一刻も留まるべき家ではない、と、心に誓つた最初の覺悟はどこへやら、その夜十一時過ぎ震へる足を踏みしめて、私は再び懇しい家の門口に立つた。心中のすだれがさら／＼と夜風に鳴りました。開け放

した二階からは花やかな電燈が、颶と道路の半ばにまで洩れてゐた。よくあの障子に寫つた、二人の影法師のことを思ふと堪らなかつた。

先生はもうちやんとお寐棺におさめられて、高い臺にのせられ、お床の間の前に安置してございました。のびてた髪も短かく刈られ、白衣が神々しくよく似合つて、不斷瘦せてた方ですから、御やつれがそんなに口立ちません。美しいございました。否、美しいと云はふより、勿體ないほど清らかに崇といその御死顔！ 私は御禮拜するのも忘れて、そと手を組んで胸にすえ、眺め入りました。魔除だつてお棺のふちには、刃物がのせてございました。それがさしみ庖丁たつたのは目障りでした。

御母堂は見る人毎に主治醫のことを、罵り訴へてゐらした。まるで有仰ることが正氣の沙汰ぢやないんですけど、知らぬ人はみな眞實にして驚きあきれてもました。私のことあるやうにか、と思ふと居た、まれなかつた。

それや雄々しかつた御心をかくまでくづほれさしたも無理ならぬ。その絶望御悲歎は、恐らく天下にくらぶる物もあるまい。たとへどのやうに御逆上遊はさうと、同情せずには居られないのだけれど、けれどそれは理論です。私たち兩人の間の感情はそんなものぢやあなかつた。先天的に仇同士の血でも受けてたのかも知れません。

お通夜にと残つた人數はほんの五六人。佛臭いとでも云ふのか、座には陰氣な空氣がみちくしてゐた。續きては絶え、絶てはつゝき、縷々として眞新らしい御位牌にまとひつく香煙、蠟の炎はゆらめきつゝじいと佗しい音立てゝ燃えた。

捧げたお水に浮ぶ蛾の死骸もあつた。それを取代へるとて階下へ立つとき、はじめて私の頬には湯の如き熱涙がたぎりおちるのでした。その度に顔を洗つた、眼は火のやうに熱かつた。

私は人に泣顔みられるのが、何よりもいやだつたので……。だから御母堂には泣きやうが足らぬとて……泣きやうが足らぬとて御憎しみを増すばかりだつた。それは婆やにきゝましたの。桂庵から來た婆やで、海千川千の食へる代物ぢやなかつたけれど、私にはお門ちがひの同情をよせてくれてゐて……先生のお妻あつかひにしての。けど私はだまつて薄暗い臺所の流元で、混々と湧く涙は金盥の水と共に流し去つた。

父のお通夜をした時は、たゞむしやうに眠たいばかりで正體はなかつたけれど、悲しみといふも單純なものであつたけれど……。あゝこの激せる心、狂せる心……何とも得しらぬ、搔きむしりたいやうな胸中の奥の物狂ひ！もし御母堂が並通の優しいお母さまででもあつたなら、私は、私は意地も張りも崩折れて、突きつめた眞似でもしでかしたか知れません。おそらく黒髪を切るぐらゐ朝飯前だつたでせうよ。せぐり来るおもひを前歯に噛んで、悲痛の面は

扇團のかけにのみかくした。

## □ 冷たき額に接吻けて □

その翌朝でした。やつと、やつと、人きを得て……四邊を見まはしながら、つと先生の傍へよりました。お顔に覆ふてあつた白布を脱ると、頬すりしました、強くく額を吸ふた。ヒヤリと冷たくて苦いやうな氣がした。あゝこれが、これがあとにも先にも先生に差上げた、たつた一つの接吻でした。否、

男子といふものにゆるしたたつた一つの……。

「先生、私は永久に先生のもの、先生は永久に私のもの……やつぱり先生は勝利者ですよ。」

沸ゆる涙ははらーと、御胸の上に合掌させた、御手のあたりへふりそゝぎました。あゝ死骸にかかる歎きの涙は、火になつて燃ゆるとやら申しますのに

その中に御母堂が上つてゐらしたので、つとのがれて、私は何氣なく窓の外を眺めた。唇にはいつまでも熱を盛つて、その時の苦い味が去りませんでした。死毒とでもいふものかと、あまり氣味がよくはなかつた。

晝間は叔母の家へ歸りました。汗と涙といつしよに拭ひながら、襦袢の白襟を掛け替えたりした。少し眠らうと思つても、些との間もちつとしては居られませんでした。

二日目の晩のお通夜には、遠藤さんがお酒に酔ぱらつて、泣いたりわめいたりなすつた。いろいろ故人の噂も出ました。どんなもてあまし者でも狂人でも老人でも、死にさへすれば人々に悼まれる。何やかや愚痴や繰言のつきぬもの。ましてやこれは……否、思ふまい、思ふまい。失ひしもの墓へども、再び我に歸り來す……。

私はもう泣きはしませんでした。口元が無意識的にびりくと痙攣してくたまらなかつたけど……。いつたい私は先生の御生前からよく、泣いてるのか笑つてゐるのか譯のわからぬ顔をするくと云はれましたわ。

翌朝は御出棺が早いのでござりますから、夜が白むと共に私たちは仕度に取りかゝつた。

あとからくと止めどなく涙の流るゝ頬へ白粉も塗つた。髪はお下げに純黒のリボンをかけました。生れてからまだ締めたこともない、叔母から借用物の重く厚い丸帯に、身體中壓せられたやうで息苦しかつた。赤十字の光る小さな制帽をエス卷の上にのせた看護婦の胸には、從軍徽章や勳章が輝いてゐました。私はその左腕に黒紗を縫ひつけて上げた。

その内御讀經が始まつたので二階へ行くと、いつのまにやら羽織袴の人々が満ちてゐたので、面眩ゆくて私は看護婦を小楣と頼んで、小さくなつて居まし

た。

いよ／＼最後の名残をと△△先生にうながされても、私にはどうしても立ち上る勇気がなかつた。看護婦にたすけられてやつと進んだが、ちつと見守つた眼は忽ち狹霧にかきくれて見えなくつて了つた。私はそこへ崩れ伏した。あゝ、あゝ、先生、先生、どうして逝つてお了ひ遊ばした？ 縋りついて離れたくない。あゝその冷たい死骸にとりついてなりと、一緒に何處まで、何處までも……。

柩を閉づる丁々の響!! よしやあの針を自分の胸に打ち込まれたとて、これほどの絶痛絶痛はあるまいのに……。

やがて葬列の陣に乗せられても、涙に曇る瞳は何事も見分け得なかつた。お寺まではあまり遠くはないやうでしたが、何處をどう練つて行つたものか、まるで覚えがありません。

静々と昇かれゆく幾對かの生花、朝の風にひるがへる銘旗、黒痕あざやかに記されたおん名、柩といふ字を見るに得堪へず、眼さへあげれば露がこぼれた。

もう運命の手は何處まで私を翻弄してゆくかわからない。逆らはずなさるゝまゝになつてゐるもの、かへつて面白いやうな気がした。

「私たちは親族席に座りました。これが本當の親一人子一人といふんですね。御母堂の他には御血縁の方なんてのは、お方もお見えになりませんの。お式はいかに壯嚴華麗に行なはれやうとも、物足らずお思ひなさりはしまいか。先生、先生、あゝせめて——否、言ひますまい、言ひますまい。この期に及んで何をか……」

四邊はたゞ眞暗なやうに思はれて、お焼香のお香をつまむ手もわな／＼ふるへた。

傷ましくもうれしい弔辭の數々や、在すが如く呼びかけ給ふA法學士が棺前  
の御演説など伺ふと、もうぐたまらなくなつて、切角それまで耐へに耐へた  
甲斐もなく、ハンカチ顔におしあてた。みつともない、いくら悲しい場合でも、  
取り亂した姿といふものは第三者の前には、悲惨なる滑稽としかうつらないも  
のだ、とはよく知つて居ながら、どうする事も出來なかつた。

## 口 尸を焼くの爐 口

式後私たちは火葬場へまはつた。疲れに疲れた心身は、もう何事を考へる力  
も失つてゐあしな。すうつと身體を這ひ高い所へでも運ばれてゆくやうな気が  
して、がくりと首を前に落しては、時々はつと心づいても、大きな眼は開いた  
きりなので、この上どうしやうもない。真先へいらつしやる御母堂の青い坊主  
頭がふら／＼ゆれる。思はずはたりと扇子を落した。後の車夫が拾つてくれる、

より返つたら△△先生のお偉であつた。私は仕方なく果敢な笑ひ様をした。  
とうとく行途の烟中に、大きな赤煉瓦煙突が見えてきてからといふもの  
は、いつそ早く着けばいいと思ふ自暴自棄な心と、何處までもくこのまゝひ  
た走りに世界のはてまで、燃れ盡はれてゐたい様な氣分とごつちやになつて…  
…。

赤煉瓦の建物は、まるで懲役人の衣服のやうだつた。休憩所に這入つたとき、  
そこの一隅に農夫體の中年の男女が五六人、車座になつて手拭顔におしあて  
ながら、梅干の様な眼を泣き腫してゐた。それを少しあきれ心地で見守りなが  
ら、同情の念などは露ばかりも起らなかつた。涙も出でぬ絶望は私の心を領し  
て了つた。

薄暗い煉瓦疊みの場内には、鼻の髣を刺すやうな陰森な香ひがみちくへてあ  
て、懲坊は丁度、あの、すていしよんで手荷物を積んでおしてく車ね、あれに

よく似た——ボロ／＼と松樹の皮みたいに鱗立つた鐵の臺を、竈の中から曳き出して來て、平氣な顔してお棺をその上へ載つけた。おゝその魔の如き扉の奥……あ、あ、あつ、二足三足よろめき寄るとたん、ガチャリと大きな音がした。

永久に、もう水久に、私等の手から先生は奪ひ去られて仕舞つた。へだてた鐵扉に取縋つて、力まかせにおしてみたいやうな氣がした。今夜この扉の中で……あの黒鑄びた赤熱の鐵片の上で……あのお棺も御遺骸も……もうあの氣持を、回顧する勇氣はございません。

△△先生は重くるしい笑顔を遊ばして、

「帝劇の樂屋と落合の火葬場！ どんな氣がしますかね。」  
と弄かひなさる。颯と色なき頬にもはぢらひが……。おゝげにその最初と最後!! あまりにつらき對比ならずや。生者必滅會者定離！ うつむく足下には

ら／＼と、冷汗か涙か白露の玉が散つた。

その日歸宅後、直ぐと善後策についての御相談がございました。一同立會の上、お手まはりの手文庫なごも開かれました。

△△先生は私の意見もお問ひになりましたが、私に、私に何の云ひ分や望みがありませう。たゞお寫眞一枚と……私それまではまだ一枚も持つてなかつたんですの、嘘のやうですが眞實ですわ。頂戴つて申すと、一緒に寫せと強ひられるのがつらかつたので——、それとお預けしてある原稿がみんな返して欲しい、と願ひました。

それらの物や、また私から差上げた手紙や端書はそもそもの最初から、残らず一束となつてありましたので、それも返していただきました。そして私の第

三の著書、「エンゲーデ」については、お氣の早い御計畫好きな先生、もう定價から貢數、表紙書や廣告文の原稿まで見出されましたため、これは是非共完成させるやうにと、△△先生も御力をぞへ下さいまして、取まとめられることになりました。

その時その由を△△先生が御母堂にも御話なさいましたら、何と、何とまあ有仰いましたでせう。賣れるか賣れぬかわかりもしないものに、一切かゝづらふことは出來ぬ。とにかく無い御挨拶たつたちやありませんか。故人の志も何もあつたもんぢやない！ と私の面には颶と血が上りました。けど、何もかも△△先生にお任せして丁つた。

私は出版上のことなどなんにも知りませんの。それまでの物もどういふ工合になつてますのだか……たゞ親戚から補助されてゐました分、月々二十圓といふもの、それはこの一月から先生がお立替下さいましたので、物質上で返

せる御恩ぢやないけれども、けれども、「エンゲーデ」の印税、御母堂へ八分、  
私へ四分といふ分配法は、△△先生方の御配慮でもあり、また私の故先生に對する、せめてもの心ゆかしであつた。

えゝ、御母堂の其後のことについては、私は、私は何にも云ひたくございませむ。たゞとけがたい一塊のうらみが、横たはつてゐるばかりでござります。

□ なくてぞ人は……□

いとほしや先生は一夜の中に、淺ましき白骨と變りはてたまひて、小さな白木の箱におさめられ、御母堂のお膝に抱かれて、再び御書齋へお歸りになりました。私にはどうしてもこれが先生とは思へませんでしたわ。鐵扉の中から曳き出された時にはまだ火氣があつた。そしてあの、骸骨の形狀をしてゐらしたやうですけれど、浮世の風にあたると共にばらくとくづれて了つた。竹製の

長いお箸で拾ふんです、思ひ切つて挿まうとしても涙の目で、目指すのがいつも外れた。そつと音立てぬやう、誰しも謹んで心づかひをいたしましたのに、隱坊つたら残つた灰をふるつて持つて來ましたが、それが這入り切らぬとて、その赤黒く脂切つた太い指先で、無造作にぱき／＼と壓しつめるんですもの、驚いて膽先を冷しましたわ。

御母堂だけ倅でお先へ、遠藤さんや看護婦や私たちは、柏木停車場まで道に迷ひ／＼歩きましたつけ。優しく慰めてくれる人より、皮肉な冷笑の方が快く思はれ出して來たのもその頃からの現象です。さうして絶ず、私は一人になつたのだ。しつかりしなくてはならぬ、しつかりしなくてはならぬ、とばかり胸の中へ云ひつゝけてゐました。

先生の御書齋には額仕立ての大きな御寫眞と、御演説なすつてる所の、卓に片手をついた、横顔の御半身の肖像畫とが飾つてございました。それが見れば

見るほど先生に酷似なのです、しかも私の大好きな一番お眞面目な時に……。今にもお聲がさこえさうです。私はこれあるがために、どうしてもあの二階を下り得なかつた。何だかウソくと氣味の悪い、などとどうばう猫あつかひにされながらも……。

惜しからぬ身を死にも得せで、また鶴沼へ歸りましたのも、母や妹に心をひかれたからではなくて先生故にと云はるゝのが口惜しかつたからです。えゝこの上は、石に食ひついても生きねばならぬ。意地になつても生きねばならぬ。あゝ意地つ張り！ 意地つ張り！ 女の意地張りは不幸ねえ、この意地さへさらりと捨てゝ了ふことが出来たなら、どんなに心安く世を渡れるか知れないのに……。

過ぎし事は一場の夢と悟りて、或る時期を過ぎ候はゝ、更に新しき天地を御開きなされ候こと然るべく候。彼の人病中の御看護より死後の通夜、會

葬、遺骨拾ひ、二七日(にち)の佛參(ぶつさん)まで遺憾なく眞心つくしなされ候こと、定め  
て故人も嬉しく感じて地下に感謝いたし居られ候こと、ぞんじ候。  
然る上は今後如何様に身を定めなされ候ても、故人に對して不實らしき取  
沙汰(さた)は萬々無かるべく、ヨシや右様申し候者ありとも決して然らずして、  
實に晴れて世に披露したりし人々も及ばぬばかりの心づくしの始末は、何  
時(とき)にても小生證人となり申すべく……。

△△先生からこんなお手紙頂いて、嬉しいやうな腹立たしいやうな、すまないやうな、面眩(おもはゆ)いやうな、何とも云へぬ氣分に泣(なみ)されましても……あゝ、あゝ、いたましい逝きにし人の上をおもへば、何事もいふに忍びませぬ。もう、もう私はすべてを先生に捧げつくして仕舞ひますわ。

夢(ゆめ)ですわ、夢(ゆめ)ですわ、美しいはかない、そして悲しいおそろしい、いやないやな夢(ゆめ)でしたわ。醒めたる人のゆくへやいづこ……。あはれと見ずや、かく黒



髪も執着も共に絶ちがたき子を……。  
 お形見にと與へられた先生が御遺愛の萬年筆と、お袱紗一枚、銘仙の綿入！  
 夜毎日毎に頬すりし、胸の空虚におしつけては……あ、「燃ゆる思ひの苦し  
 さに、知覺なき衣かき抱き、鼻にぬしなき香をかぎて、人なつかしき思ひする  
 ……。」

## □諒闇の秋□

諒さま、かんにんして頂だいな。

御父様の御病氣は如何なの、御伺ひもいたしませんのに、かへつて御案じ  
 たまはり、御ゆるし遊ばして。

わびしい濱邊に秋風の音づれ！　あゝあゝ、乙女二十のたざる血潮は、も  
 う冷え切つて了ひましたけれど、ひとり胸ばかりは火の様に、熱い、熱い、

身もだえしては物狂はしう、ふら／＼と柱に倒れかゝるものも幾度でせう、つらいわ、つらいわ、露さん。もう何を考へるのもいやなのです。何をするのもいやなのです。いまにどうにかなるでせうよ、ねえ、貴女もうしばらくは沈黙を守らせておいて下さいな。

最も強い人は孤獨の人——ですつて。露さん、私は何にも云ひますまい。誰も誰も、私の胸の中に立ち入らせはしない。

もし堪へられなくなつたらば、一思ひに死んで了ふまで。ねえ、だつて一人生は、きつと待つて、下さると思ふの。あゝある時は、ありのすさびに憎かりし、なくてぞ人は戀しかりける。

お目にかかりたいとも思ひますけれど、露さん、いつかあなたは泣いて下すつたわねえ、お袴も脱らずにくづ折れて……。あの時、うれしいと身

に沁みて思ひましたけれど、けれど、一緒に泣く事は出来ませんでした。どうせ世にすねた女は、可愛らしいあなたのお手に、お膝に縋つてなぐさめらることは、のぞんだとて不可能なのでござりますもの。

立つになやまば

わが肩に

凭れとさゝやく

妹の

思無氣なる

面見れば

放しともなき

諸手かな

(341) 秋の闇諒  
彼の紫の山裾に、足なやむ詩人の言葉を思ひます。どうしてあらつしやる

でしやう？あの君とK先生とは、文壇のいゝコンストラストだなんて、た  
かれたこともあるさうですのに。

お父様をお大切に、あなたもおいとひ遊ばして。さなきだにわびしきもの  
を諒闇の、悲しい秋に逢ふものでござりますわねえ。

うなだれて咲く花。

高なわの君へ。

うすら淋しい秋の日のひるさがり。照らす日光もどんよりと、すゝり泣くや  
うな風のこゑ、うめく様な浪の音。雲は低く垂れて凋帳の色、悲愁の氣天地に  
満つ。

私はもう身動きする氣力もなくて、眼珠の光澤も失せた魚か何かのやうにぐ  
つたりとしてゐた。

あはれ断ちがたき追慕の情に君戀しとばかり、幾度か胸かきむしつて嗚咽し

たものぞ、身の生存を味氣なしとかこつたことぞ。生き残りたいと願ふ未練の、  
露はどもあつたのではないけれど……。

眼前にみた「死」といふものが、恐ろしくなつたのもありません。厭生の  
念が少しでも、薄らいだわけでもあります。たゞ時期を待つてゐた。えゝ適  
當な機會にぶつかるまでは……。私は自分の因由で死ぬるのに、戀人の跡  
を逐ふたなどと死耻はかきたくなかつたから——。その一念に引きずられて、  
一日／＼を過してきました。が、生きてゆくには母子三人。食べずにも居られない。  
もう貯金簿の高も知れてゐる——こゝに思ひ至ると、突然發作的に飛び起きて、  
机に向ふ事もありましたけれど、徒らにむらくと呼吸が切迫し、慟悸が増進  
していくばかりで、どうすることも出来なかつた。

死ね、死ね、死ね、筆を握つて倒れるのは本望ぢやないか、何故惑亂し、昏  
迷しつくすまで努力しない。とあえいでも苛つても、あまりの息苦しさには、

我知らずもがき出さすには居られなかつた。墨でもペンでも指輪でも算算でも、手にあたるほどの物はみな滅茶々々に噛みつぶしてしまつた。私は眼を据て兩手を握りしめたんです。唇から血を噴きながら、室内轉がつて歩いたんです。けれど、けれども、母の前では何氣なく口から出まかせの申談など言つて、せんが、母に心配事なんぞさせますのは何より厭だつた。

やつと出版用の原稿が書き上りましたので、久しぶりで出京しました時分には、私はまるで狂犬のやうに、足にまかせて傍目もふらず歩きまはつてゐたかつたんです。一刻もちつとしては居られなかつた。あてもなく市中を彷徨して、遂には夢見心地にさまよひゆきし雨の夜の江戸川河畔よ。……何の故にか行かう、たゞ戀しき人が終焉の家を見んがために。

くいりなれたる格子戸はかたく閉ざされ——あの二階には灯のかけもなく

立寄つてすかせば見も知らぬ人の表札がかけられてある。

かねて悟したる事ながら今更のやうに胸へふれて、……先生、「と心で呼んでみましたわ。悲しい水車のガツタンコ、ガツタンコ、の響！　あゝ私は、私は一生水車の音を阻つてやる、とたまらずほろ／＼と泣きながら、立ちすぐんで了ひました。

夜おそく、ふいと瑠璃様のお宅の御門叩いたときなど、その顔色といつたらこの世の人とも思へなかつたと、今では笑ひ話にされてゐますが……。

お馴染も薄い須磨様の御邸へふら／＼と迷ひ込みましたのも、須磨様、私は手を執つて泣きたかつたの。悲しめる者相會ふて、思ひ出語りするばかり、胸なぐさむはあらじかし。』と。

しかし、しかし、須磨様も御變りになつてあらつしやいましたわ。縋らうとしたものから突き放されたやう、慰めも得せず得られもせず、空しく歸つてひ

とり泣いた私は、須磨様が憎くつてたまらなくなりました。ゆるして頂戴ねえ。  
往くところとして氣を滅入らせぬはなく、目にふれ耳に入るもの一として、  
追憶のたねならざるはなく……その哀切と寂寥は遂に極度に達した。  
新郎新婦の寫眞なんぞがむやみと癡に障つて、はては涙の止まらなかつたの  
も、その頃のこととござります。

## 口 大 阪 行 口

さうする中に、あれは十一月の中旬頃でしたらう、突然大阪毎日新聞記者、  
(一) 氏の訪問を受けましたのは。

私は何の氣もなく應對いたしましたが、その後大毎紙上には尾竹紅吉さんと  
二人並べて東都女流文士間の謎の少女とか題し、數日にわたつての物々しい問  
題にされて了ひました。

ところがそれに意外な反響があつて大阪中貴嬢の評判でもちきりだから、この機を利用して遊びに來ぬか。大歓迎で勿論その來阪に關する費用及び一切の責任は本社で負ふから心配なく、一つ新春の紙面を賃はして貰ひたい。これは社長はじめ編輯部一同も切に熱望してゐる次第である、と○○氏から數度の來状。無論ねえ、心を動かされないぢやありませんが、實現されやうなんとはゆめ思ひませんでしたのに、社の方からは案外の乘氣で、御相談はずんぐ進行し、とう／＼○○氏の迎ひに來られたのは、臘月もおしつまつた廿八日……雨もよひのうそ寒い日でした。

旅裝といつたつてトランク一つ持ちはせず……さう長くはない旅程のつもりでしたから、ほんの着のみ着のまゝ……雨嶺あたりへでも一寸遊びに行くやうな氣分で出ましたのよ。家を出る時母に向つて留守を頼むとも何んともいはず、たゞ「矮鶴ちゃんを大切にしてやつて頂戴ね」をばかり俾の上から繰り

返したつて、いゝ一つ話にされた位ですわ。けれどもいよくすていしょんへ着きますと、何か嬉しさにどくどくと胸がをどつてくちつとしては居られず、汽車中でもよくはしやぎました。それに今度はK先生の様なおつれでないんですから、何の心づかひもなく狎れ切つて、思ふまゝにふるまひましたわ。

國府津驛で一時間半あまり、急行列車を待ち合せる間の退屈まぎれにおちさん（これは大阪の娘さん流の呼び方ですわ、お半の様だなどと冷かしちやいけません。）てばよせばいゝのに物賣い小僧に弄かつて、重い蜜柑の網袋を下げさせられてしまつてそれをぶら／＼させながら、海岸を散歩いたしましたのよ。

あゝ國府津!! 國府津の海の思ひ出よ、汝は我をして悲しましめ喜ばしめ傷ましむ。無限の思ひをショールに埋めて兩袖を胸に搔い抱いた時私の眼の中は熱うなつた。砂地踏む君が御靴と我が草履、雁行した痕をいつまでも波が消さず、に、デモ詩人、泣味噌文士に何かのヒントでも與へたら面白いでせう。ホ、、

、でもその日の靴の主はもう少しお額が光りかゝつてゐますのですよ、御安心あそばせ。シカシよく似合ひますでせう、近頃は若い奥様に限りますつてさ、ねえ皆さん。

空も暗い、海も暗い、山に夕陽の色もなく暗懐たる夕暮である。小雨がポツリポツリ落ちて來た。天帝咀ふか我が初旅を。いそいで驛前の茶店へ引返す。列車はぎつしり、二等は勿論一等も満員。やつと寝臺車の片隅におしこめられて、何はともあれと食堂車へ逃げ出す。

料理待つ間の手すきびに卓上の盛花をむしつてみると、おぢさんが名刺の裏にサラリと走り書の暗號電報を下すつたけれど、よくわからないので何、何、つて伺ひ返すとひそめた積りのお聲が『わしの後の頭の禿げた人ね』と大きく飛び出しちまつた。危く失笑しかゝつてカチヤリとナイフを取落す。それはもう此方でも先刻から見惚れてゐたんですもの、丁度電燈の下で照り返しのやう

に光つて、ね、盆の窪の方ばかり濃くつてそれを長くして撫でつけて、まるで蓑龜のしつぼみたい。まあどうしたんでせう、年齢はまだそれほどでもないらしいのに、可哀想に。

私の後の方にはね、また束髪やローマや丸鬚の素人作りの仇者が一團をつくつて、それに隣卓の赤ネクタイが流眸をやる様子つてないんですもの。あまり其方にばかり氣をとられて、首が痛くなつちやつたと云つたら、その赤ネクタイがお氣に召したんでせうつて。オーナー嫌だーー、知らないわ、そんなら私もう行つちまふ。と、つと立つて人なき喫煙室の一隅に崩折れた。年こそ變れ今月今夜……去年の今ごろは丁度あの眞暗な豆相鐵道の構内の木柵に凭つてゐた時分だと思ふと何だか夢のやう……先生は冷たいお墓の下だのに、私はかりあんまりのんきらしい。……おぢさまにうながされて席へもどると、例の禿頭の一行為先客様でしたの、しかも隣席の。でも今度は帽子をかぶつてたので

人ちがひかと思つた。實は先刻も先刻とて汽車の二等切符を玉石混合だなんて罵倒して、それでも一等となれば流石に例令田吾作でもづぬけた金満家とか、薄馬鹿でも高位高官とか、何處にか取柄のあるものだの何のつてお話したあとだのに、今晚はまた何方をみても、よだれをたらしながら他愛もなく居眠つてる年増の奥様や、目尻とお口髭と眉毛とが四十度位の角度に下つてる滑稽な旦那様や、炭坑の自動車のつてきこえよがしに盛ンにヨタを飛ばし合つてる氣障紳士や、人格がゼロのやうな御連中ばかり。いさゝか悲觀しちやいましたわ。おぢさまの額が赤く光り出す、何故だか知つてらして? 魔睡剤のおかげよ。魔睡剤つてブランデーのことよ。

沼津でハイステベリの下りたあと、まづノート横になる。おぢさまのオーバ取上げて枕に代用してヴェールかけて。横さまに車窓打つ雨の音。あゝ月下旬の夜汽車、それをどんなにか期待してゐたものを。

目はくつついで了つても、高ぶつた神經はビン／＼躍つて、幻せめの様な苦しさ。

何物かに驚かされてはつと飛起きる、濱松に停車たので。十一時半、全身寝汗でびつしより、スチームが強過ぎるので熱くつてたまらない。つと窓を開けて顔を出す、逆上た頬に小雨がしぶいて好い氣持、眠かつた目も一時に覺めて了ふ。おちさまはまた食堂へ魔醉剤召し上りにいらしたのよ、きっと。いゝわねえ、男の方は。

二時十五分前名古屋着、すつかり眠入つちやつて、何にも知らなかつたけれど、汗がタラ／＼流れるのに悪寒がして、クシャミが續けさま、大變溫度が下つておちさんは上衣を召す。

その次は米原へ來て目が覺める、四時。暁の冷氣、窓玻璃をとほしてひしひしと身にせまる。露の凝つたガラスを手巾で雑布がけしてのぞいてみたら、雨

は晴れたらしく、天地まだほの闇き混沌たる中ながら、多年憧れし近江の湖水の薄光りするを見出した時のうれしさ。昔流行つた鐵道唱歌の文句をそのまま、粟津の松に言問へば、答へ顔なる風の聲、朝日將軍義仲の、亡びし深田はいづ方ぞ』

あれ灯が走る、水田が飛ぶ。

京都を通過ると室はガラ空、寝臺の帳の中からもノコノ起す出す氣配。化粧室へ入つて手早く身じまひ正すと、鐵の鍋でも冠つてたやうな頭がスーツと軽くなる。流石行途の望みに胸の小琴は高鳴り出して……。

明方五時半過ぎいよ／＼梅田驛着、ふらつく足をふみしめて下り立つとボイイが赤帽に荷物を渡す時、例の蜜柑ね——國府津から提げこんできた——の網が破れてそこら中へ轉げ出してしまひ、おまけに奥様々々を連發されて大まごつき。いやだ／＼と思はず地團太ふみましたわ。それはまだいゝとして驛前の

旅館に取あえず伸をつければせますと、こゝでもまるでね、東京下りの新夫人かなんかのやうにあつかふんですもの、私くやしいから若返つて早速髪をお下髪に結ひ直して了ひましたの。

まだ明け切らぬ薄墨色の雨の都……恍惚二階の欄に凭つて見下してゐます中に、油然と湧き上るのは先生戀しの情でした。もうたまらなくなつてポタポタと涙がおちました。おひさんの方へは背を向けてましたから御存じないでせうけれど……。先生は影身に添つて、下すつたか！ この時からしてこの旅行中片時も恋の眼の前をお離れなさいませんでした。あてもなく空を見つむる眼にはあり／＼と、その僕がうつりました。私は何事も忘れて、その僕ない幻影をのみ追ふた。大阪市中を引きまはされた千代子は、魄のぬけがらに過ぎないんでした。その日お晝餐には日本ホテルで、本社の社會部長△△氏や通信

部長××氏と食卓と共に致しました。食後ストーブかこみながらの愉快さうな

皆様の談笑を伺つてゐるうちに、譬へやうなき空虚のやうな寂しみにおそはれる。一度胸に食ひ入つた寂寥と云ふものは、何物によつても癒されることは出來ないのかしら？思ひ出の子、涙の子、あゝそんな弱い子になりたくはないけれど……。火氣にのぼせて恍惚した頬をさゝへつゝ人知れぬ吐息をついた。

私の宿所と定められましたのは、濱寺の大毎俱樂部……本社の別荘みたやうなものです。婦人はとめないつていふ規定なんださうですけれど、特別のおはからひをもつてね、婦人室が新築されたりして、お待受の暖爐が赫々燃えてゐたけれど、まだ塗りたてのベンキが臭くつてゐる。早速二階へ引越しました。

音にきく……の古歌で名高い高石の濱の仇浪を目に見晴らす眺望のよい日本座敷、小松原はほの舟雨に寝んで、まるで薄墨書きの一畳のやう。接

伴役としては社の婦人記者森ふさのさまが入來いました、お年は五つ六つ上ら  
しいが、いかにも乙女（めいめい）した温和しさうな方で、御修業盛りは東京に過され  
たとかで大變（たいへん）ひがしでいき 東京最員（ふとん）でね、女同士の打解（うちと）けやすく、忽ち御懇意（ごこんい）になりました。  
その翌朝（さくあさ）八時頃（じごろ）、雨戸（あ）を開（ひら）いてに來た爺（じい）やが獨り言（ひとりこと）のやうに「オーマイ（まっしろ）」と云  
ふ。すはこそと「痛快（つうわい）」を半分（はんぶん）叫（さけ）んで飛び（と）起（お）きた。

水天（すいてん）髪（は）うづつ眞（ま）にこの事（こと）、地平線（ちへいせん）との區別（くべつ）が此（こゝ）ともつかなくなつて、まるで  
海（うみ）の中に小松（こまつ）が生えてるやうにも見えるし、あれ、彼處（かれこ）へ轉（まわ）ぶやうに驅（か）けてゆ  
く犬（いぬ）ころが空中（くうちゅう）へ突進（とつしん）する様（よう）にも見える。

きけば濱寺には珍（めずら）しい三年以來（ねんい）の大雪（おほゆき）のこと。さしづめおぢさんならば愉快（ゆきよく）  
快（くわい）ちやねえ、ハツノハツと泣（な）ぐ様（よう）なお顔（かほ）遊（あそ）ばして咲笑（こせう）なさるところだが、寒（さむ）  
がりやの私（わたし）、「大きなお手爐（てぬか）抱（い）え込んで室内（おく）深（ふか）うちかまつて了（しま）ふ。」  
が、やつぱり春（はる）の淡雪（あわゆき）ねえ、見る（み）くうちに浴（お）け出して雨（あめ）にも勝（まさ）る玉水（たまみず）の音（おと）

いよ、色榮のべき筈の翠綠がイヤに青黃いのは氣になるわ、ヒヨロノ一男の顔  
ほ  
色みたいだわ。大阪にはこんな男が多いんでせう、澤山居さうな氣がして仕様  
がない? さうぢやないんですつて。ホ、ホ、お氣に障つたら御免なさい、  
關東つべいはどうも口がわるくるてねえ。

ひどい雪解の松の雪の下をくぐつて、十一時頃から森さんと大阪へ出かける。

□ 五色の酒に酔つて苦しむ □

ホ、道頓堀の旗の酒場へはひり込んでね、あら、冷かしちやいけません。  
ですがまつたくかういふ時には、縞セルの袴に金ぶち眼鏡、トルコ帽やマント  
でもはおつて、后で風切つて歩かなければ似合ひませんやうね。たゞさへ俯き  
勝のつゝましやかな森さんは、さもなく御迷惑さうでした。けれども私は……  
もつと火の様に強烈な酒でもあぶりつけてやりたかつた心の中……。いづ

方に向つて訴ふべき？ あんな眞似まねでもしなければ、我慢がまんが出来できなかつたんぢやありませんか。青色酒ペーミンツに赤いキュラソー、何とかスキーとやらきらひとやら、五種しづの酒さけを五段ごだんに注ぎ分けて、崩れないところが自慢じまんなんですつてね。可愛い一寸ばかりのコップですの、赤い麥むぎわらの管くわがついてますの、夫おとこでチューン吸ひますのよ。まるで子供こどもだまし、シャボン玉玉でも吹きやアしまいし!! 咽のせ返つたり何かして、おぢさまお髭ひげが泣なりますよ。ホ、ヽヽヽ、森さんは一日ひとくちつけてみて泣き出だしあなお顔かほ！ それに勢いきひを得てチユツチユツと飲のつてみると、美味おいしいかあないけれど案外味淋あんがわんみりんや日本酒にほんしゆより口當くわあたりがいゝので、一息ひとくちにみんな吸ひ上げて了しめつた。つまらない虚勢きよせを張はつたものね、だつて森さんがあんまりしほらしいんですもの、ちと齧しゃくに障さつたんですね。

「あなたはむしろ古いわゆるいタイプなのね」と突つかると、

「え、それを望んでゐますのですもの。」

と勝利者のやうにお答へなすつた。私は何か、飛びかゝりたいやうな氣がむら／＼つとしました。ほゝ、「故郷」のマリイちゃんみたいな方なんですよ、無茶なマグダの氣焰にあてられてらつしやると可笑しくもなつちやいました。

マツチ箱みたいな小ちやなバーでね、幸ひ他に客はございませんでしたが、私何しろ生れて始めて、お酒らしいものなんて口にしたのですもの。すつかり醉がまはつて了つて、夜の千日前歩きはメチャく。顔が燃えるやうに熱くなり始めて、身體はぞく／＼寒氣立つて、頭はドキン／＼大波を打つ。大阪府知事の更迭がどうしたとか、大火の焼あとがどうだとか、千日前の復興、呂昇がどうのといんななぞ話伺つたけれど、右から入れば左の耳へ通り抜けで了ふ。たゞ無暗と氣ばかり大きくなつて、矢でも鐵砲でも持つて來い。なんてまさかね、いひはしませんけれど、ほゝゝゝ。何か思ひ切つたことを言つておぢさ

んを驚歎させたやうに覺えてゐます。

足の方は紙で作つたものゝやうに軽く、ともすれば高足をふみくら返して、難波の停車場へついた時には、やれ〳〵と思ひましたのよ。おぢさんてば、丈夫かい〳〵、濱寺まで送つて行かうかの何のつて心配して下さるのを、私を醉どれあつかひにしてらつしやる、する分れと怒りました。

でも南海電車の中では眠つてゐるゝ、思はず森さんのお肩へ顔を伏せて了つた。ゆり起された時びつくりはね起きると、湊で濱寺とおどかしたのよ、森さんは笑つてあらつしやる、おひどいわ。いくらみはつてもみはつても瞳が溶けて了ひさう。乗合の客なんかてんで眼中にありやしないけれど、ムク〳〵とそこらの物が湧き上るやうに見えて仕様がない。ふと氣が着けばくつきりと正面の細長い鏡に映つた夜の顔、薄絹のベール越しに頬ほ芙蓉の色をさながら。我ながら美しいと眠い日も一寸醒めました。

濱寺へつくりと何んがない。けどほてつた頬を氷のやうな夜風の撫づる快さに、歩きませうよ歩きませうよと森さんをせめて、暗い夜道に踏み出しましたが、松原の中をあちこち迷つてしまつて犬には吠えられ、ぬかるみには踏み込み、する分森さんを困らせました。まるで鳥目のやうに手を引かれて……。

やつと歸りつくと前後も覚えず、倒るゝやうに臥床へ入つて仕舞ひましたが、ぐつすり寝入つてふと目をさますと、森さんはお床の中でもまだ讀書して被居いました。もうすつかり酔の醒めに反動に、ひどく興奮してどうしても眠られないので、その夜はとうと終夜を明しましたつけ。私の「處女主義」を、亡き愛人に志を立て通して獨身を守るといふやうに解釋して、氣の優しい森さんは泣いて下さいましたけれど、私は否ちがひますといふ意味の、高らかな笑ひ聲を立てました。森さんは賢母良妻主義なんでした、「服従は女の耻辱ぢやありません。」そんな事もお言ひでした。

## □ 銀燭映ゆる金屏の影 □

あ、濱寺會！ げに花やかに光榮ある一夜でございました。

私こんなお席へつらなる事つて、殆ど冒險的なのでござりますわ。何たつて

鶴沼の田舎娘よ、御挨拶の仕方、

お盃の受けやう一つ知らない者が、あんな上

座に据えられて、よくまあ顔も伏せず居られましたことね。だつて好奇に輝く私の眼と心とは、そんな餘裕を與へてはくれませんでしたもの。氣取る事も

何も忘れて了つて、たゞもう恍惚と座中を見まはすばかりでした。來賓は本社

の重立へた方々をはじめ、大阪名物、否、例の文展の花形、島成園女史など、

まだうら若い閨秀畫家、大柄な撫子の紋柄のある、くすんだ色の紋縮緬のお被布に、薄青つぼい縞セルのお袴、血色の好い丸顔の眼の大きな、飾らない大阪

言葉で、だす、だす、と有仰るのが可愛らしくて仕様がない。が、なか／＼し

つかりした、精悍らしいところもあつて、悪びれぬ御態度に感心しました。

藝妓？

え、五六人來ましてよ。(有名な富田屋の八千代も來る等だつたので

すが、それは不參でした。)みんな南地の一粒選りとの事で、一たが、それや新橋

あたりのとはちがひますねえ、ヤボよ。スツキリと水際立つたところは見られ

ないわ。が、中に目も覺めるやうな舞子が一人、花の枝の露に撓むだ風情。初

々しい高韻も細い頸の折れやしぬべきと傷々しく、黒地羽二重の振袖に牡丹花

の大模樣。純白の下襲には同じ金絲のぬひのあるのを、するくと引裾長う、

金扇かざして舞ふ時、まあ何といふ美しさでしたらう。冴え切つた撥さばき、

唄はなうてとやらいふお琴が美音。節も手振もそんな事、私にはわかりはしま

せんけれど、もう見ても、見飽きぬほどこの雛妓が氣に入つて丁つたので、

傍へ坐らせて、外の方のとこへ行つちや不可ないのよ、いけないのよと云ひき

かせた。

年は十五だつて、大きいこと。蝶々のやうな吉彌結び（帶）が、肩揚の深い優肩越しに、秀でた揉上げのあたりをのぞいて、重さうな金色の花櫛や銀のびらく、眩ゆいほど燭の灯にきらくと輝き渡ります。臙脂の濃い可愛い受口は、白い顔にまるで花片のとまつてるやう、お酌と葡萄酒の瓶を持つと、その花菱の紋ある袖から香水の香がばつと立つ。

皆さんてば、森さんと内藤さんは關彌（名）を傍へ引つけて、盃洗の代りにしているんだなんて。ホ、ホ、まさか、何ば何だつてこんな小さい妓に餘り助けさせるのも可哀想で、熱湯を飲ませるやうに痛々しかつた。

「私、こんなコップに五杯ぐらゐ立てつけだしたら、酔まんのだつせ。けどな、お客様のお相手してまんのでは、同じ分量やてなかく、利かへんの。貴様、何ともあらへんわ……。」

なんて笑つてたけど。

それに引かへ私達は、なめる様に唇つけるばかりでも、數量なればいつか頬に出て、お座敷の障子の棧が、クルくとまはり始める。皆様が御夫人御同伴でなかつたのは、ほんとに殘念だつて森さんは繰り返してあらしたけれど、私はさうは思ひません。有體に申しますとね、一體女は女同士の相客をあまり喜ばぬものでござりますわ、ましてかういふお席で。どうせ夫人方とはお話が合はないんですね。ですから人數は少かつたけれど、かへつてこの方が打とけて親みも加はり、氣安かつた。

併し殿方にはどうあつたでせうか、皆様豫想外に静肅に御酒もすみ、御飯となつたので、何だかお氣の毒で仕様がありませんでした。宴會でこんなものではないんでせう、淑女に對する禮儀を守つてゐらしたのかしら？ あら失禮、生意氣ですわねえ、年下の女のくせにこんなことを……。でも私は御遠慮のないところの醜態が拜見したかつたんですわ、ほゝゝゝ。

て、

「いつ頃から姉さん達の様に、短かい止袖の着物着るやうになるの。』

ときいたら、

「エ、十七になつたら襟替しまンの。』

と答へて少し眼を細くして苦笑む。私は握つてた手にぎゅつと力をこめた。離しともなき乙女かな。

と云つて關彌は、そんなにチャーミングな顔といふのではありません。高過ぎるほど高い鼻、長い眉、不二額、品のいゝむしろ靜的な人形立。それが何うしてこれほどまでに、私の心を引いたんでせう。頬すりよせて抱きしめて、その蓄のやうな唇から悲しい身の上話でも訴へられてみたいし、姉と云はるゝ年ならば、愛き身を膝に投げかけて、疲れし額胸によせ、たゞ一時を眠らまし。

食後の果物の一片を楊子にさして與へながら、そつと關彌の和かい手を押へ

あら何誰？ そんな餘計な世話焼かなくつてもいゝなんて有仰るのは。それやあもうさうでございませうとも、ちやあんとついてらつしやる方があるんでございませうからねえ。

誰さまやらがお言葉ぢやないけれど、どうせなら夢の浮世に五十年、平々凡々より雨風多い生涯の方が、暮し出があるといふもの。美しい悲劇、花やかな命……。

げに憂も涙もお酒といつしよに飲みこんで、浮いて笑つて唄つて暮すこんな稼業も、いつそ面白いではなからうか。とは云へ矢張り席に侍してゐた二人の老妓、薄い髪を小さな銀杏返し、白粉焼のした素顔に漂ふ陰影の寂しさ。もう白襟も似合はなくなつて、それが黒紋附の裾を端折つて、かつばれなんか踊り出すんですもの。何だか果敢ない感が胸に迫つて、私の眼には涙が一ぱいたまつてゐました。

が、その老妓たちもね、別室で大變泣いてゐたさうですの。丁度私達と同年くらゐな娘があるんですつて。それにつけてもお耻かしい、自分達の境遇が、あほらしくて／＼なりやせんがな、つて。ホ、ヽヽヽヽ泣上戸だつたのかも知れませんけどね、その後二人の連名でこんな端書をくれましたつけ。

雀百まで踊を忘れずと申します。

わたくし共はあなた様が百廿五才まで御丈夫で御筆をおとりなさるやう、祈つて居ります。

でもねえ、こんな女たち相手にして遊んでますと面白いのよ。殿方のお浮かれ遊ばすのも、あながち御無理はないと存じましてよ、ホヽヽヽヽ。

宴はてゝ後、座敷を替へてかねて用意の繪絹引のべ、紀念の寄せ書きが始まりました。

ふつくらした束髪を俯けて、成園様は熱心に秀奴を寫生なさる。秀奴つて一

座の中に——關彌は別ですが——一番年若な女でした。あまり高くなない島田には、水の滴れさうな玳瑁のさし櫛、銀簪一本。藤色が、つた縮緬の目立たぬ若松の裾模様を着てゐたが、燃え立つばかりの薪の長襦袢は、折々チラと月影のさすやうに鮮やかだつた。

一皮眼の乾とした口元の綺つた、濃い眉を時々寄せる癖のある、私大阪妓つてこんなものぢやアないと思つてた。今些と優しくして呉れ、ばい、のにね、あの容貌のやうに、氣性も必と勝氣なんでせう。それや年中醉どれのお客ばつかり相手にしなければならないのだから、あの位強く出なければやり切れまい、でも同性の目からはねえ。それよりは今一人のお琴（名）の方が、温和しさうで私好き。え、私なんかに好かれなくつたつて困りやしないつて、ほ、御尤もさま。

成園様のお筆によつて、繪絹の上に印されたその横姿。周圍には一同が集つ

て、息さへひそめて見入つてゐました。やうくお顔お上げになつた女史は、ボーッと上氣なすつて、お唇を真黒にして被居る。あとは籠引きの順番で、

「志士文士のんでうかれて年の暮、」

「明けてまたもや飲まんとぞおもふ。」

「行く年をおもふ女の嫁入りす。」

などと即吟やら俳句やら脇づけやら慢畫やら、一しきり醉筆淋漓の大騒ぎ。  
かくて名残はつきねども、おかへりの遠い方など多いので十時過ぎ散會。張りつめた氣もゆるんで送り出でたる玄關の扉に、ひとと身をつけ、力なくくうなだれた。

頬に塞き涙傳ふに言葉のみ

華やぐ人を忘れたまふな。

## 口 除夜の感想、不覺の涙 口

おちさまがお迎ひに來て下すつて、その御自宅へ參上つたのは大晦日の午後七時過。ハタ／＼とお子達がお立闌へ駆け出してきて、左右から取着く大歓迎。今日は午後から何度も／＼停留所までお迎ひに行つたのに、こんなにおそく來るのひどいつてお恨みなさるの。サラ／＼とした垂髪にお揃ひの元祿袖、花模様愛らしい友禪のお被布。芭子さんも芹子さんもおちさまに似て快活な、それは／＼人懐つこいお子。お二階の明るい室内にするりコートを脱ぐと、今まで寒い暗い夜風に震へて來た頬がバツと火熱り出した。

涙もろき子はかゝる時人の情の身にぞ沁む。物思ふによき濱寺の松風の宿を寂しかるべしと思ひやらせ給ふおばさまの御厚意に甘へて、せめては明日の新年をこの賑やかな御家庭の一人として迎へやうとするのである。さりげなくは

よそほへども、萬感胸に満つる宵、床柱の掛花活には白玉椿に結び柳が長うし  
だれて春待ち顔。

ふつくらしたお丸齧に時色のお手柄、純日本式のお若いお優しいおばさまは、  
おばさまおばさまつて私の様な大きな者がお呼びするにはまだふさはない。む  
しろお姉さまとも申上げたいやう。皆さまの隔てないおもてなしに久し振で我  
家へでも歸つたやう、氣がのんびりして隨分はしやぎましたわ、お子達相手に。  
もう新來の私がお珍しくつて、お姉妹とも此とも傍を放れやうとはなさらぬ。  
でもまた明朝が早いからとおばさまが強てすかして、下へお連れになつたあと、  
がつかりしちやつて倒るゝやうに椅子の一につに身を投げかけた。

ぎつしりと書棚に並ぶ金文字がさゝやく如く輝いて、ちいつと耳をすませば  
懷しい江戸川河畔の水車の音もきこえさう。あゝ悲しくも美しかりし我が二十  
年の夢の歴史よ、現し世の物にはあらじ、形なき影を慕ふて永劫に、たゞ永久

に泣くべき連命。そもそも何のため何をなし、何を得んとて遠く關西までもさまとひ來りし……天が下には隠れ家もなきこの傷心の胸を抱いて。

笛の手何か清き音は

安き身にこそ興も見れ、

人を怨みて動する身

唯泣かしむる節ばかり。

緑色の卓上へ犇と顔を伏せて丁つた時、階段に亂るゝ小さな足音、愕然として我にかへる。

麻衣のまゝの芹子ちゃんが、うちちはお姉ちゃんに一緒にねたい、つて可愛いことを有仰るの。私は何とも云へぬ感が總身に滲み渡るをおぼえた。一たい私はあまり子供が好きぢやないんです、だからお愛想一つ云ふ術さへ知らないんですね……芹子ちゃんは何とお思ひになつたんでせうね。でも嬉しかつた

ふくとしたお布園をかつぎました。

明朝は早く起きて追羽子しませうの、お手毬をつきませうのと他愛もないお話してゐるうちに、いつかスヤーと小さな寝息に代つて了ふ。ちつとその滑つこい振分髪の額に唇を加へて、はらーと涙を落した。一昨夜森さんに向つてあれほど強い事主張した自分が、何と云ふ不覺の涙だらう。笑つて頂戴いゝわ、いゝわ、このまんま年をとりたくない！ いつまでも／＼若い娘でおちさまやおばさまに甘へてゐたい、幼い芹子ちゃんたちの姉さまでゐたい！ おちさまは悲しいものを見せて下さる。今日こゝでこんな感慨にふけらうとはつい今のが先まで思ひはしなかつた。

私はいつか芹ちゃんのお脊を叩きながら、若き添寝の母が唄へると題したうろ覚えの子守歌を口ずさんでゐました。

『ねんね、ねんねよ、ねる子はよい子。夢見で眠れ、朝白むまで。やがて夢見  
ん乙女とならば。黒い美し瑠璃色眸に、一夜二夜は映るよ影の……』

## 口驚異の眼口

え、大阪つてねえ、あんまり感じのいい土地ではござんせぬ。しかし進取的  
——アメリカ式とでも申しませう。私の紹介されたのはみんな女學校出身の士  
地つ子の娘さん達でしたが、なか／＼の敏腕家や、新しい趣味や思想を抱いた  
大膽な女が多いらしいんですよ。家庭も開放主義の様子です。一寸東京ではあ  
いふ型のは見かけられませんのね、活潑……わるく云へば露骨でお轉婆！  
お品ぶるなんてことはないやうです。初対面からよくお詫がはづみますのよ。  
それに、『だつせ、』『けどな、』『ソーヤ、』『だすやろ、』『云やはる、』などと云ふ  
關西辯は、男子にはいけませんけれど、女同士談笑する場合なんぞには美しい

ほどならかで、案外心地よく耳に響いた。のみかその中に一人きは立つて、アクサンの強い、ギスくした自分の物言ひが、少からず氣になりましたわ。

エ、お芝居？ 否駄目々々。私近來こそ皆さんに感化れて、大層通なやうになつちやいましたけれども、ホ、ホ、ホ。あの頃にはまだ全然——むしろ無茶だつたんですものねえ。角座かどこかへ行つた時、隣りの棧敷へ來てゐるのが鷹治郎だつて教へられたけれど、一向何とも感じやしなかつたんですの。五十あまりの顔色のいやに生白い、優しさうなおぢいさん？ でしたわ。○○さんの夫人に是非是非と電話です、められた浪花座行も、無理矢理お断りして了つただつてそんな花やかな空氣の中にあることは、一刻も苦痛でたまらなかつたんですもの。何しろ曾我の家の喜劇をみてさへ、涙がこぼれたんですから仕方がありませんわ。○○夫人ですか、え、さうく、よく婦人雑誌上にお見えになりますあの方よ。大阪の名物夫人よ。東京の江木夫人みたいな方、それや美人

で御交際家で、御多藝で御多能で……御母校はお茶の水なと承りました。

お年はお三十あまりなんださうですけれど、そのお若々しい事といふものは、思ひ切つた派手づくりをなすつて、それがちつとも厭氣を起させないだけでも……お察し遊ばせな。でも争はれないものでねえ、お額の邊りにはかすかな小皺の見えるのが、人事ながら悲しうござんした。え、お顔は靜的の美よ、そんなど印象の強い、つていふ方ぢやないわ。何となくお眉の邊に、觀音様のやうなところがおありなさるの。この頃よく分髪りお寫眞を拜見致しますが、私のお目にかゝつた時はお丸齧でしたの、恐ろしく鬚の長い下齧の。……髪結さんは毎年新橋のね、有名な髪結んとこへ見學のために上京させなさるんにつてますもの、萬事がその行き方ですわ。お召物の御意匠なんかは申すだけがヤボ。

大柄な麻の葉つなぎの大島お召のお羽織、裏は毛抜合せで、紅と淺黃の段染

鹿の子でした。色彩鮮やかな荒い／＼棒縞お召縮緬に、黒襦子の襟かけて、友禪縮緬の前垂、淺黃鹿の子の半襟、つていふ艶にくだけたマダム振り。

今のお住居の御建築は夫人自ら圖をお引きになつたものだとか、何だか知らないけど、それは／＼お美しいお家よ。お茶の間なんか磨き上げた長火鉢に向ひ合つて、紺友禪縮緬の大きなお座布團、朱羅緒の長煙管、蒔繪のお手函、文臺、衣行、籠れ箱、脇息、まるでお芝居にありさう。お化粧の間の襖を開けると、お臺所が一目であるのは、鏡臺に向ひながら家政の差圖をなさるため、などとは口さがない世間の取沙汰。

あら一寸、一寸、と有仰るのが口癖なの。まだお子様をお持ちなさらない故か、何處か娘らしい初々しい匂ひがする。何だか人妻のために大變御氣焰をあげてゐらしたけれど、例の私の頭腦には暗い／＼考へが充滿だつたので、こんな理想的な夫人の生活状態をみても、美しいとも思はなければ、御幸福など

も感じない。御良人の辯護士龜之助さまは赤門出の秀才、デツプリしたお毬の  
濃い立派な方よ。お李枝、貴郎、で隨分見せつけられますわい。ま  
あ今時分こんなにお嘆申して……さぞお耳をほてらしてらつしやるでせう。

東京——と、それや何につけても匹敵する筈はございませんのよ。たゞ一寸  
驚異の眼をみはらせられましたのは、あの文樂座や近松座の人形淨瑠璃といふ  
ものでした。それも最初のうちは何だか不自然で、滑稽な感がして仕方がなか  
つたけれど、だんぐり引き入れられて來て、——それは／＼滴るやうな情味を  
見せるのですものねえ。サワリのところなんぞ、あの人形の玻璃の眼には、靈  
があるかと疑はれた。神秘的なものですのねえ、私は其後すつかり義太夫好に  
なつてしまつた。ほんとあれだけは大阪の誇りになるわねえ。それと或る夜、  
かるた會の歸途でした。もう夜半の一時過ぎでしたらう、私は連日の氣疲れや  
ら睡眠不足やらに、もう／＼眠くつて眠くつて、俾の上で頭をふら／＼させて

ましたの。すると後から森さんが呼びかけて、  
「御承知でせうが、こゝが宗右衛門町ですよ。」

はつと思つて眼を開いたんですけど、何うしてもはつきりと覺め切らない  
の。ヴニール越しの薄絹のやうな世界に、澤山の藝妓、舞妓がぞろぐと歩い  
てゐました。お座敷からのかへりなんでせう、襷を高く胸のところまで引き上  
げたい、恰好でね、高い／＼こつぼりをボカ／＼と鳴らしながら……。

富田屋の前も駆け抜けましてよ、ほら、成園様の「宗右衛門町の夕」ので名高  
い二人の舞妓の倚りかゝつてたとこよ。あの門口の荒い木柵がねえ、家まるな  
く氣に入つてしまつて。……何だか美しい通り魔でも見たやうに、印象され  
て居りますのよ。

お耻かしいことながらまだ近松物など、手にしたことはございませんでした  
から、曾根崎も観川も生玉も、忠兵衛も小春もおきさもお千代も、昔の夢も憧

れも濃やかな情緒も氣分もあつたものぢやありません。否、何の興味も持てないものを、あちこちと引きまはさるゝのが、苦しくて／＼なりません。

そのくせ濱寺の宿へ歸りますと、もう寂しくて／＼、傍に誰かゐてくれなければとても／＼堪へられさうもありません。で、始終森さんが一緒に起居してゐて下さいましたけれど、物足らぬ、物足らぬ。もつとどうかして欲しい、どうかして、どうかして、と焦り／＼長襦袢の袖を噛裂いたんです。

さうして毎日五六枚づゝの原稿を書かなければならぬ責任を帶びてゐたのですけれど、そんな事は考へるばかりでも息がつまりさうだつた……。物書くことのいやと云つたら、母の許へすら安着のハガキ一枚出しやしなかつたほど……。森さんが日記などつけてらつしやるのを見ると、むしり取つて投げつけたいやうな氣がした。つまりまあ、物質上に不足いなければないだけつのる放囲のない我儘なんでした。毎朝髪結ふのと洗面使ふのが自分の手を下してす

る仕事ぐらゐなもので、三度々々ホテルや料理屋から取寄せる御馳走に飽きて、欲することはみなきかれ、出入には俾<sup>くらま</sup>行く先々では下へも置かず歓待される、いろいろな御進物品は来る。こゝしばらくは地上の榮華を、一身にあつめてたやうなものでした。

が、厭生病つて始末にならないものでございます。これほどまでにして期待を持つて、下さる本社の方々や、間に立つたおぢさまにはいろいろ御迷惑かけてほんとにすまないことは思ひ續けながら……。歎く心も泣く涙もすでに涸きはてて……たゞ茫然たるばかりでした。

それに大阪なんてやつぱり土地がせまいんでございますね。何とかいふ悪口専門の小新聞などでは、私のことなどもいゝ材料にして、もう着阪以來取かへ引かへ、いろいろな記事が出るのださうでございます。けふはこんなことが、昨日はあんなことが、と折々遊びに見える社の方達から片端だけきかされます

けれど、それがみたいと云へば、噛けばきく、きけば都の懸しきにで、あんな物讀むと腹が立つから、いつそ一切目にふれぬ方がよろしいととめられるので、懶さに強ひてそれをとおし返すほどの氣力もなかつたのですが。……隨分おちさまのことを色魔だの、社長様と私とあやしいの何のつて……ほゝゝ串談ぢやあない。社長様はうちの外祖母様と同年齢でござりますわ。その他いろんな手紙も舞ひ込みまして、氣の弱い女なら目をまはして仕舞ひます。

世の中はめくら千人めあき千人と人もいゝ升が、貴女は其めくらの方にヒイキにされてるのよ。

文學々々つて貴女などの了解出来る文學は、冠詞がついてゝよ。「三文」と云ひますのさ！　ヘン人をつけ、氣のきいた化物がヘドを吐くよな甘つたるい文章を書きやがつて、美人がつたり、女流作家がつたり、貴女位がある人もない。一度貴女の寫眞が誌上に出てより、貴女の聲名は地に落ちてよ。

多少其作物がうれるのは、只々あの甘つたるい表題による世間の助平や、のろま女の好奇心についた結果だとあきれる外はない。

自惚もいゝかげんになさいよ。おたふく面の濱風にふかれて、素地の荒い海岸の女！ オム人形が土左衛門になつたといふ面つきで、白粉にうき身をやつし、チンコロが色氣づいたやうな眼つき、獅子つ鼻があくびをしたやうな、それでゐて夢ニ式と自称する、貴女の鐵面皮をはいでやりたい。づんぐり肩の坊主襟、ローマ、コロネーションもすさまじいわ。

云はゞ貴女は色情狂ね。温泉場と海水浴場と、角帽と何とかちやん。それより外に何も御存じないのね、文學がきいて呆れるわ。かるた會で堕落學生に色目をつかつて、汚らしいキツスの一つもしてもらへば、さかりのついためス犬がをス犬になめられたよりも嬉しがつて、針小棒大に御報告、随分な好色女ね、ちつと耻をおしりなさいよ、バカ。

早くいゝおむこさんを引摺たい。金持で學士なら肺病やみでもいゝ。デコ  
トコの大丸醤にでれりしやらりしたとこを人に見せたい。それより海岸で  
落し主のわからない、ダイヤ入の指環が春晝入りのラブレターと一緒に落  
ちてゐればいゝ、私ひろうわ。それがあなたの理想でしよう。

淺學、自惚、鐵面皮、眼尻の下つた淫婦、それが貴女の代名詞よ。

ホ、たんとおのろけなさい。相手もないおたふくが、自己の理想の甘つ  
たるいところを筆にして、せめて自らなぐさめてゐるといふのも、すゐぶ  
ん氣の毒なものさ。

關西ではね、貴女の如きブタのお化然たる不別嬪は、大抵掃ために捨てま  
すのよ。

女ひでりの國へ行つて、獅子つ興をひこつかしたがいゝ。それとも印度人  
のお妻になら、世話して上げてもいゝわ。一回十錢位で。

今後も貴女のあの駄文を、文學世界などへ出す氣なら、本氣ぢやないと思ふわ。來月のバツクを御覽、涙が出来るよ、アバよ。ヒ、ヒ、ヒ。

ほゝ、いつそ痛快ぢやありませんか。私の頬には銀の花のやうに白く冷たい嘲笑が、痺撃的に浮ぶのでござります。

が、或る時、何でも郊外で蜜柑の樹のいっぱい植つてゐる、廣々とした御邸内でしたつけ。箕面電鐵會社の重役さんなんですの、そこのお家へお招かれしてね。その晩餐の美味しかつたこと、いふものは、忘れられませんわ。まあ久しふりで東京風の濃厚な風味を口にする事が出来たんですね。——いつたい大

阪のお料理は、淡白過ぎてまづいんですよ。——青い酒やらきいろいお酒やらもすゝめられましたが、そこの御主人がね、女といふものは貴ひ人のある中に、早く嫁げ／＼つてしまりに忠告して下さるのですよ、森さんと二人に。今なら大概なほこ先は笑つて受け流す餘裕もあつたでせうに、ほんとにゆう通がきか

なかつたんですね。さぞ妙な顔をしてゐましたでせうよ。淑女に向つて失敬だわ、とか何とか二人とも内心散々ファンガイしました。森さんは私とはまた別の意味でもつて。それがおぢさまに知れて、切角深切に云つてくれたもの、おこるといふことがあるものですか。ホネームーンの時には第一番に彼家を訪ねて、安心させて上げなさいなんて冷かされ、口惜しくて口惜しくて、私をそんな女と思つてあらつしやいますか！ 何サ、みんな若い間の熱だヨ、空想だヨ、先天的に大きなお尻と丸い乳房を持つてる女が、よけいなことは云はぬものだ。獨身主義なんてそんな議論は、もう十年も過つてからなさい。いゝのよ、いゝのよ、よござんすよ。なるかならぬか、私が立派に證據を見せる、といきました。一年や二年の證據ちや仕様がないと笑はれて、えゝ、無論少くとも二三十年は結果を待つて頂かなくちや！ と昂然として答へました。

その後森さんはじめ、皆さん方はどうしてあらつしやるでせうねえ、打絶て

御消息も承りませぬ。蘭彌は襟替をしましたらうね、芹子ちゃんの振分髪もさぞのびましたらうね。思ひ出といふものはなつかしいものでござりますわ。それがどのやうに醜いものであつても、どこかに一つ、光つてゐるところがあるものだつて、まつたくですわね。

## 口 跋に代へて 口

まあ何ですか、阿房のよだれの様にだらぐと、長くばかりなつて了ひましたのね。もう際限がありませんから可加減に割愛して、こゝらで擗筆にいたします。飛行器が九天から落下したやうな結末のつけやうでござりますけど。え、その後のことについてのおたづねは、しばらく御無用になすつて頂戴! 健忘症な私は一面また、蛇のやうな執拗さを持つた女でございますが、生涯どうして忘れられやうかと思つた、あれほどの苦腦も傷あども、薄紙をはがす様

に癒えてゆきます。日を経るまゝにまぎれることの出来るやうな戀は儂いものと、つくづく先生のお寫真をみつめることもござりますが、宥して下さい。時ときの力は恐ろしい！ いつまで一所に停滞してはゐられないんです。私ももう命がけで泣いたり笑つたり、悲しい犠牲を拂つたおかげには、今「復活したる生せ」のよろこび」といふものを、力強く味はふことが出来るのでござります。

### 「復活したる生のよろこび。」

この意味はどのやうにでもおとり下さいまし、私わたしたつてまだ生先おひさきのある身みなんですが、将來しょうらいはエツキスです。我われと我身わがみの成行なりゆきを、興深い眼きょうしゆかで眺めて居ります。

が、獨立自尊ひとりきそん！ 「處女主義ツウジョウイズム」の觀念は、ます／＼深くなつてゆくばかりでございます。今ではもうおしもおされもいたしませぬ。

さらば、誇りは永久とほに、うらみも永久とほに、……光輝くわいある我が黒髪くろがみよ、盛り

長かれ！……さらば、さらば!!

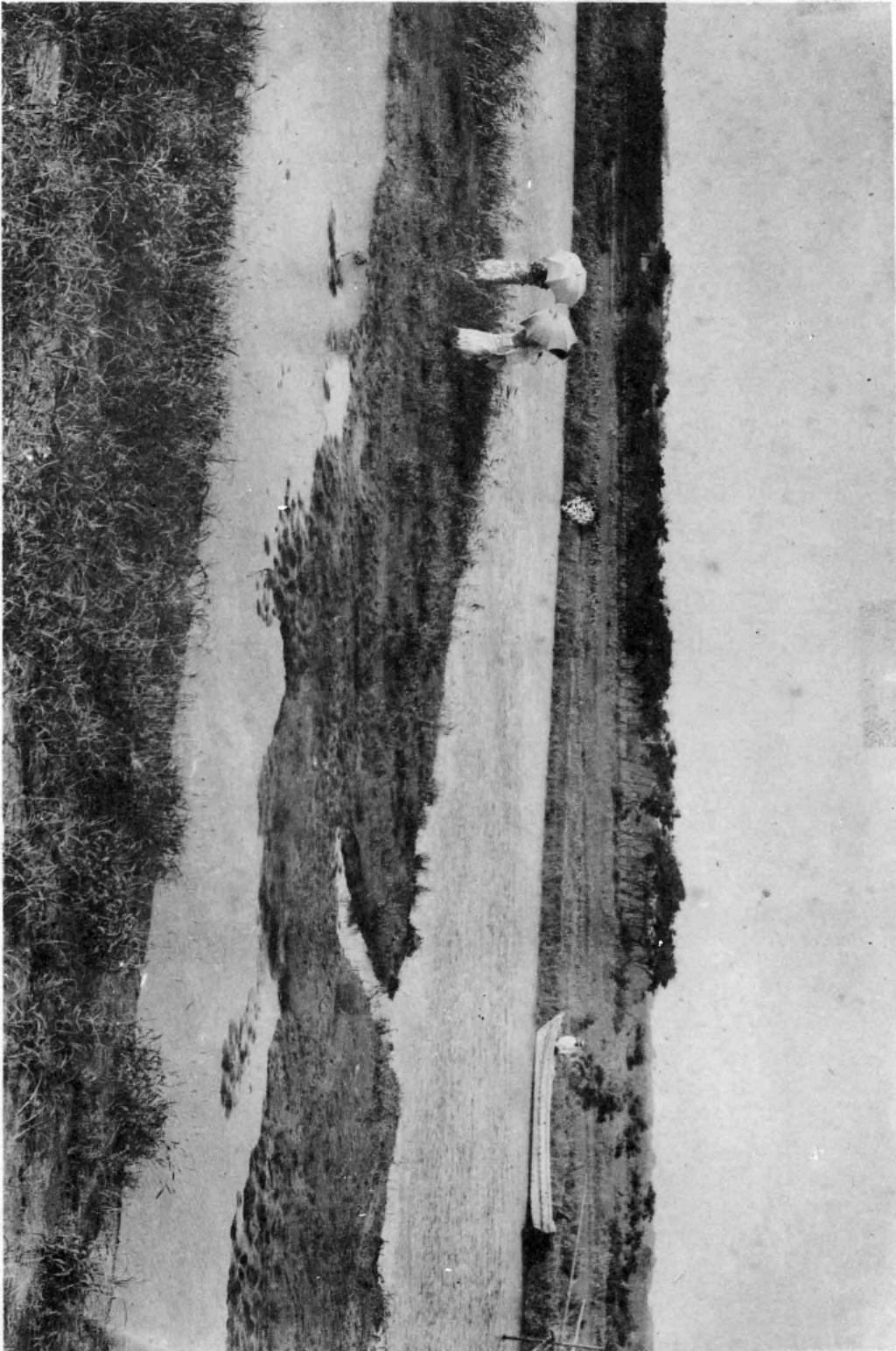
ともすれば仇なる風にさゝ波の、  
靡くてふごと我れ靡けとや。

大正三年九月二十一日夜脱稿

燈下にて

小

町



大正三年十月二日印刷

『生ひ立ちの記』全一冊

大正三年十月五日發行

定價金七十錢

不許復製



著作者 内藤千代子

東京市本郷區本郷四丁目四十三番地  
東市市神田區表神保町十番地

發行者 今成橋佐三  
印刷者 平温

發行所 東京市本郷區本郷四丁目  
(振替東京二七八七五番) 牧民社

特約大販賣所 神田區錦町壹丁目 誠文堂書店

田村俊子氏著

朝倉文夫氏裝畫  
著者肉筆屏挿入

# 木乃伊の口紅

四六判函入美裝  
紙數三百七十頁  
正價金壹圓  
郵送料八錢

【本書に對する世評の一端】(反響九月號、安藤枯山氏評)

著者最近の創作で、曾つて雑誌に出たのを集めた小説である。卷頭の「木乃伊口紅」と卷末の「炮烙の刑」の二長編が、主となり、短編「縁の畔」「憂鬱な匂ひ」「雨時の朝」「ぬるい涙」の四編が中間に入れてある。

「木乃伊の口紅」は、原稿生活をする夫婦間の心持ちや、日常の動作を書いたもので、女主人公が一時、女優になるあたりは、面白く描かれてある。低級な世間並の、闇い影や、いやな心持ちも能く現はれてゐる。義男といふ男の、嫉妬心や、疳癪聲も面白く、意氣地のないみじめさには、幾分同情される。

我まゝで放縱な女主人公みのるは或る晩「不思議な夢を見」、「男の木乃伊と女、木伊乃が、お精靈様の茄子の馬の様な格好をして、上と下とに重なり合つてゐた。その色が鼠色だ

つた。さうして木偶見たいな、眼ばかりの女の顔が上を向いてゐた。その唇がまさ／＼と真つ紅な色をしてゐた。それが大きな硝子箱の中に入つてゐたのを傍に立つてみのるが眺めてゐた夢であつた。自分はそれが何なのか知らなかつたのだが、誰だか木乃伊だと教へた様な気がした。』

「朝起きるとみのるはおもしろい夢だと思つた。自分が嵩を描く人ならあの色をすつかり描き現して見るのだがと思つた。さうしてあれは木乃伊だといふ意識がはつきりと残つてゐたのが不思議であつた。……」

「木乃伊の由來」「口紅の因縁」、如斯であるが、以上抄出した數節に、著書の氣分と、態度が、能く表はれてゐると思ふ。

「炮烙の刑」は放縱な女の我まゝを書いたもので、可なり大膽に描かれてゐる。僕は唯面白いとのみ思つて讀んだ。

女主人公たる龍子の道徳問題に就て、とかくの世評もあつたが、多くの場合藝人や作家に、内面道徳や自覺問題を強ゆるは強ゆる方が無理だと思ふ。

今の場合、眞の自覺問題や、徹底せる内面道徳を作者に強ひたくない。

とにかく、「木乃伊の口紅」一編は、官能描寫の巧みな、艶っぽい小説として、若い文藝愛好者に推賞する。云々……

田村俊子氏著

津田青楓氏裝畫

戀 む す め

正紙四六判函入美  
價金九十六十美  
送料八拾錢錢貢裝

容 内

秋お夏お嫁さ町や  
の の ぐよ 子のま  
一 晩しのまよ 手  
日豊戀のでり紙子

樂初戀市或姉搖 摧  
の のる 指の刺  
手 築雪紙晩日

## 【本書に對する世評の一端】（反響七月號、生田春月氏評）

田村俊子女史は一葉以後の女流作家の第一人と云はれてゐる。女史の舊著『あきらめ』の如きは、一青年批評家を感激せしめた程である。恐らく作者はその感激に價する何物かを持つてゐられるにちがひない。これが藝術の力によるか、それとも其他の事情に基因するかは知らないが。

兎に角女史は確かに現代女流作家の第一人である。と同時にまた確かに平凡なる男子の作家等を凌いでゐる。卷頭の『やま子』のやうな女は、此頃よくあるタイプの興味ある女で、微笑をもつて面白く讀むことが出來た。その他はみな可憐な物語で、むしろ少女小説と云ふべきものもあるので、さうした方面に近い讀者の爲めに集められたものらしくも思はれた。しかし皆相當に藝術化されてるのはいなみ難い。この著は女史の自信ある短篇集ではないやうだが、女史の趣味は隨所に窺ふ事が出来る。要するにこの美しい釘裝の俊子式な艶っぽい本は、しかつめらしい顔して批評しては作者も迷惑であらうし、打ちくつろいだ氣持で讀めば、三越などへ行つて、美しい友禪模様の切れでも見るやうな快感を與へるであらう。この可憐な物語を讀んで興味を感じうる人は、それだけ幸福な生活をしてゐる人だと云へる。云々……